

MAN TO MAN  
われらがマン・ツー・マン運動の戦後史

—— 全国学生青年「合宿教室」レポート（昭和三七年から二八年間）の「はしがき」から ——

山田輝彦 著

国文研叢書  
No36

社団法人 国民文化研究会

# われらがマン・ツー・マン運動の戦後史

——全国学生青年「合宿教室」レポート（昭和三七年から二八年間）の「はしがき」から——

## 目次

はしがき	1
I 「合宿教室」レポートの「はしがき」から	
今こそ新しい学風を興すべきとき	9
ニヒリズムから青年たちを救ふ道	15
甘ったれた国際主義と観念的な平和主義からの脱却を	23
戦後二十年、精神そのものの退廃現象が拡がってゐる	31
激しく揺れるアジアと戦後思想の盲点 —— 「国家」と「死」の脱落 ——	39
学生運動の凶暴化 —— 「積誠」によって国を支へる決意を ——	47
思想戦のやまばを迎へて —— 大学・沖縄・安保 ——	57
全共闘の闘争が不毛の荒廃しか残し得なかつたのは何故か	67
三島由紀夫氏の自決で問はれた「戦後思想」とは	77

「戦後教育」は今こそその無残な成果を問はれてゐる	83
平和と民主主義	89
——日本弱体化と「解体」の原理	89
「世界青少年意識調査報告書」にみる異常な指数の意味するところ	95
国際政局の激動	101
——自由主義国家と社会主義国家における権力の差異	101
ベトナム戦争の終結から何を学ぶべきか	107
——ナショナリズムの根源的認識を	107
教育、防衛、外交を一貫する「哲学」の回復を	115
革新陣営の内部分裂と険しさ続く国際情勢	121
日中平和条約と不可解なる日本の思想と政治	127
ソ連の世界戦略の脅威と自壊作用が進む国内政治	133
病根は深まってゐる	139
——教条的な左翼思想の支配からの脱却を	139
敗戦が日本人の心に刻みつけた深い傷「社会主義」志向	145
教科書問題にみる日本の異常さ	151
——外国の干渉によって書き変へられた日本の教科書	151
パワーポリティックスがせめぎ合ふ世界と国内の「政治倫理」	157

日本の現状は異常といふ外はない——防衛費・教育基本法・建国記念の日——

日本人の魂を抑圧してゐる占領遺制——北方領土・靖国神社・教育問題——

政権抗争の具に供せられた民族興亡の根幹問題

——「新編日本史」検定と靖国神社戦犯合祀問題——

米ソ両大国が軋み合ふ世界の現状から遊離した日本の政治状況

「昭和」の終焉とその重い遺言——占領遺制の確認と伝達を——

東欧社会主義国家の崩壊

## II 〈補〉「合宿教室」の講義から一篇（第三十四回平成元年・一九八九）

昭和の精神——「悲劇」の時代

163

169

175

181

187

193

201

## はしがき

国民文化研究会の「全国学生青年合宿教室」は、昭和三十一年以来回を重ねて四十一回を数へる。そして、その合宿教室の講義と研修の記録も年毎に出版されてきたが、本書はその間の昭和三十七年から平成元年までの二十八年間、小柳陽太郎氏と共に記録編集の任に当たった山田輝彦氏が、終始一貫して書き綴った序文集に他ならない。該当刊行書名は「新しき学風を興すために」第一集から第三集までと、引き続き『日本への回帰』第一集から第二十五集までで、各集それぞれの「はしがき」がこれに当たる。

ここに登場する序文は、さういふ訳だから、当然その年の国民的経験とその意味を顧み、われわれの帰趨する方向を見定めようとしながら、合宿教室に参加する若い人達に、何を語りかけたかを述べてゐる。従つて合宿教室の行はれる年々において、世界に生きるわが国の歩みを、われわれの心の中にある日本を見つめながら、全力をこめて丹念に、しかし速い筆力で山田さんは綴つてこられた。書き始めの昭和三十七年は、第一次安保改定の革命騒動が漸く終つた後であり、終はりの平成元年は、昭和天皇崩御、社会主義東欧諸国崩壊の年であつ

た。「時もし飛去に一任せば間隙ありぬべし」(正法眼蔵「有時」)。年々飛び去ってゆくが念々に持続する意志があつてこそ、国のいのちがあり、国の歴史が展けてゆくのであらう。山田さんは年々に歴史を書いてこられたのである。山田さんは「内なる国家」といふ言葉を早くから使つてをられた。また戦後思想の盲点として、「国家」と「死」が脱落してゐることを、若い人に語つて止まなかつた。その念々がこの歴史書に貫流してゐる。

時の成り行きが落下する勢ひは容易に止まるものではないといふことも、この一年々々々書き留められ集積されたものを読む者にとって、感慨を禁じ得ないところである。著者が繰り返し言つてゐるやうに、今日の歴史生活の原点は、東京裁判と、日本国憲法にある。著者が筆を措いてから今、平成七年に至るまでの、われわれの経験した「時」の内実は、終戦五十年に当たる本年の国会決議、首相謝罪発言等々を思つてみても、著者の視点はそれを先憂し、今の時点で一気に書き上げるものと違いはないだらう。

また、この序文集の最後にあたる年は、共産主義崩壊を目の当たりに見る第一年であり、大東亜戦争の伏流的禍因をなしたそれとのわが国の長い戦ひを振り返らずにをれない大事件の年であつた。歴史の底流に触れる筆勢は随所にある。

山田さんは、合宿教室で何度も短歌創作指導と参加者詠草の講評を担当された。誇張があったり、理屈があつたりする歌を直してゆく中で、感じたままを詠むとかうなるのではないかと、それとこれとを対比されると、聞いてゐるものは納得し、安堵し、時に爆笑するのであつた。歴史叙述における事件の選択と、叙述の仕方に、短歌創作の方法が重なつて見え、私は安心し、肝に銘じて毎年の序文を愛読したのである。

本書のタイトルが、『われらがマン・ツウ・マン (MAN TO MAN) 運動の戦後史』となつてゐることに一言添へれば、これは「われらが合宿教室の」とあつてもいい所を、その営みの性質を端的に言ひ表はさうとして扱はれた表題だと言へよう。国文研が発足したころは、六十年安保に向かつて進行する革命と祖国断罪の狂風が全国に吹き荒れてゐた。わが国の歴史と現実を引き裂く強大な火器は、階級史観に基く闘争イデオロギーであつたと言へやうが、同じ運命を担ふべき国民同士の間、世代間の断絶を意識せざるを得ない中で、私たちが共に信じ相和するためには、相剋のイデオロギーに代る別の反共イデオロギーを説くことではなく、心が心に通ひ、意志が意志をよび起こすほかにはないといふ切実な実感があつた。私たちの営む合宿教室は、集団で行ふ研修であるけれども、壇上の講師の一言が、また膝を

交へて語りかける友の一言が、「一人の真正な日本人」の心呼びおこす、さう信じてつな  
がり拡がってきた運動であった。心と心が通ひ合つてゆく経験の創出、もしくは継承は、同  
時に、大学で学びまた一生を通じて学ぼうとする学問研究の根底に通じるものであった。そ  
の意味でこの標題に示される「マン・ツウ・マン運動」は、「われら」の生き方を示すもの  
であるかと思ふ。

山田さんの序文集制作の意義を提唱した理由で、私がこのはしがきを書くことになったが、  
この書名の選定から、年表、註解、講義録の追加など編集実務を担当して下さった、今林賢  
郁・奥富修一・磯貝保博・稲津利比古・柴田悌輔の諸君のご苦勞に深くお礼申し上げると共  
に、山田さんの力のこもった戦後小史の出版を喜び、刊行の主意を認めた次第である。(平

成七年十二月二十三日 寶邊正久)

I

「合宿教室」レポートの「はしがき」から

第七回「合宿教室」(昭和三十七年・一九六二)

今こそ新しい学風を興すべきとき

(昭和三十八年四月五日記)

【第7回「合宿教室」昭和37年8月（阿蘇）参加者数215】

講 師	演 題
文芸評論家 福田恆存	現代の思想的課題
世界経済調査会理事長 木内信胤	世界の見方

【昭和37年（1962）】

- 1.13 社会党訪中使節団長鈴木茂三郎、中国人民外交学会長張溪若と共同声明を発表、「米帝国主義は日中人民共同の敵」と確認
- 4.26 全労・総同盟・全官公の25組合、全日本労働総同盟組合会議（同盟会議）結成
- 8.12 堀江謙一、日本人で初めて小型ヨットで太平洋を横断
- 10.22 米大統領ケネディ、キューバにソ連ミサイル基地建設中と発表、キューバ海上封鎖を声明（キューバ危機）
- 10.28 ソ連、キューバのミサイル撤去を通告

【昭和38年（1963）】

- 1.7 「ブラウダ」、中国を名ざしで教条主義者と非難
- 1.25 ビルマ賠償覚書署名（純賠償1億4000万ドル、借款3000万ドル）

（注）年表は「はしがき」執筆時期にあはせて作成した。このため当該年と翌年の数ヶ月分を取り込んだものとなっている。

この数年来、国内を二分して争はれた幾つかの激しい政治闘争も一応鳴りをひそめて、世は泰平のムードに包まれてゐるが、危機はむしろ内攻して深刻の度を加へてゐるといふのが現状であらう。内外ともに、力と力との激しい緊張関係の上からうじて保たれてゐる安定であつて見れば、多少心して見る人にとっては問題の所在は極めて歴然たるものがあらう。

それは外でもない。人の心の荒廃である。人間不信の情が滔々として一世の風潮をなしてゐる。政治は人の心を治めるといふ古来の道からはづれて、支配被支配の冷たい力学となつてしまつた。社会機構は人間が生きてゆくための手段に過ぎないのに、逆に人間がそれらの中に完全に埋没してしまふ結果となつた。人間の回復を叫ぶ流行思想は、もっぱら社会制度そのものを悪と断じて、罪のすべてをそれに転嫁することに急である。「敵」を設定し、その「敵」に対する憎悪を共通の分母とする階級意識から、真の人間の回復がなされるであらうか。断じて否と言はざるを得ない。少くとも学園だけは、この浅薄な思想に対して正確な判断を持つべきであるのに、最も濃厚にその支配下にあるのは由々しい問題といはざるを得ない。今の学園を支配してゐる極端な政治主義と孤立感から脱却する道はないであらうか。青年学生の心に人間の真心に対する信頼を回復することなしには、現在の学問の頹廢を克服

することは永久に出来ないであらう。偏った人間観の上に立てられた学問は、その分析が精緻を極めれば極める程、益々いびつなものとなってゆくであらう。偏狭なドグマや感傷的な観念論が、時流にのり、科学といふ美名のもとに、如何に青年学生の心を毒してゐることであらう。今こそ新しい学風を興すべき時である。

我々の主催する「合宿教室」も昭和三十一年霧島合宿以来回を重ねて七回目を迎へた。我々が青年学生諸君に敢へてかういふ「場」を提供したのは、我々なりの願ひがあつたからである。それは参加者全員が、学校差や性格や能力の差を超えて、同時代に生きる一個の人間としてなまの切実な体験をぶつつけ合つて貰いたかつたからである。個人の殻を破ること、自分が人に対して真に心を開き、又人の心の中にとび込んでゆくこと、かういふ体験は一般の社会生活の中ではなかなかないものである。さうであればこそ人と心を通はせることのむずかしさ、人と心の通ひ合った時のよろこび、「合宿教室」はそれを実感する「場」でなければならぬ。それが真に行はれるならば、我々が従来言ひ続けて来た「国民同胞感」といふのも単なる言葉ではなく、かけがへのない経験として心に永く残るであらう。そして、さういふ「友情」が短い合宿教室の期間の後も、継続して守られてゆくならば、その相互研

鑽の中から必ず新しい学問も生れて来るに違ひない。なぜなら少なくとも、人間不信といふ前提でものを考へてゆく風潮に對して、事實によつてそれを否定することができるからである。實際、これまで行はれてきた合宿教室は、参加者にとつてしばしば人生觀の轉機となつて来た。いはば「合宿教室」とは新しい学問を生み出す土壤を培ふ運動といふべきものであつた。

かつて「真理をして成らしめよ、たとえ世界は亡ぶとも」と言つた著名な学者がゐた。閉鎖された特権の座で、抽象理論を組み上げることをもつて学問と心得てゐる学者の感傷に過ぎないのだが、それが神託のやうにありがたがられる雰囲気があつた。さういふ空漠とした無国籍の觀念論と、現在の大衆に媚びた進歩思想は、実は同じ根から咲き出した二つの徒花である。それらは共に現實を直視するきびしい意志と、複雑をきはめる人間現象を綜合的に把握する精神を欠いてゐる。福田、木内両講師の講義は、さういふ幼稚な樂天思想を微塵にうちくたくやうな力を持つてゐる。この書をよまれる方々は、両講師の講義の中に、現實を綜合的に把握する強い精神をよみとつていただきたい。マルクス流の公式論と比較して、如何に新鮮な方法が提示されてゐるかに氣づいて下さるであらう。

将来指導者となるべき学生諸君に要請される能力の一つとして、人の心のいかに微妙な動きをも敏感にキャッチできる感覚を修練して行かなければならない。二百人に余る参加者が全員短歌を創作するといふ思ひ切った試みも、今回の合宿教室で始めて採用された。短歌と学問といふ結びつきは、一見唐突に見えるけれども、人の心が細かくわかり、自分の心を正確に客観化するといふことは、あらゆる学問にとって不可欠の前提でなければならぬ。短歌の創作によって鍛へ上げられた感覚は社会科学や歴史学、さらには自然科学の領域までも必ず大きな力となることを信ずるものである。

保守か革新か、資本主義か社会主義か、さういふ果てしない対立が続いてゐる。その対立は一時的な政策的妥協があつても、一方が力によつて他方を圧殺せねばやまぬ程の根深さを持つてゐる。祖国日本の内包する傷は癒しがたい程深い。この悲しむべき現状に対する一つの具体的解決策として、我々はこの記録を編集した。行間から我々の微意を汲みとつていただければ幸甚である。そして、一日も早く、大らかな国民的共感の世界が広がって行くことを心をこめて念ずるものである。

第八回「合宿教室」(昭和三十八年・一九六三)

ニヒリズムから青年たちを救ふ道

(昭和三十九年二月十一日記)

【第8回「合宿教室」昭和38年8月（雲仙）参加者数202】

講 師	演 題
文芸評論家 竹山道雄	物の考へ方
世界経済調査会理事長 木内信胤	最近の世界と日本
政治評論家 木下広居	現代の政治的危機

【昭和38年（1963）】

- 7.15 経企庁、先進国への道、高成長高福祉めざすと「経済白書」発表
- 7.20 モスクワの中・ソ共産党会談決裂
- 8.5 米・英・ソ、部分的核実験停止条約調印（仏、中、不参加通告）
- 8.15 日比谷公会堂で、第一回戦没者追悼式開催、天皇・皇后両陛下ご出席
- 11.21 第30回衆議院総選挙（自民283、社会144、民社23、共産5、無12）
- 11.22 ケネディ大統領ダラスで暗殺
- 12.9 第3次池田内閣成立
- 12.14 インドの対日戦前請求権問題解決（900万円支払取決め調印）

ここ数年、政局の転換を迫るやうな重大な政治的事件もなく、まづは天下泰平の日々が続いてゐる。しかし、この安定は、われわれ自身の責任と意志によつて勝ち得たものではなく、きびしい国際政治の谷間に、偶然に作り出されたものに過ぎない。国論は四分五裂し、政策論争は水ぎはまでといふ政治の常識も全く省みられない。憲法には、国家防衛の義務も、国家機密保持の規制も全くうたはれてはゐない。厳肅なる使命をもつた自衛隊は単なる「職業」として見られてをり、労働組合は特定のイデオロギーを奉じた「政治団体」と化し、大学は「反体制運動」の牙城になつた。保守派の政治家には、派閥や個人の利益が国家的利益に優先し、革新派の政治家には、階級や組織への忠誠が、国家への忠誠に優先する。いはゆる「安定」の、よつて立つ基盤はかくの如く脆弱である。過剰な繁栄も、所詮荒地に咲いた徒花のごとき感を禁じ得ない。国民の自由にして旺盛なエネルギーが、整然と秩序立つて結集された国家といふ生命体を、日本人は感覚できなくなつてしまつた。杞憂であれば幸ひだが、收拾のつかぬ破局が来てからでは既に遅い。われわれは自分で出来るところから、このゆがみを正す努力を積んで行かねばならない。

国内の泰平ムードにひきかへ、昨年から今年初めにかけて、中ソ論争（注1）、核停条約

締結（注2）、フランスの中共承認と、国際政局はめまぐるしい激動を続けた。それら一連の動きは、いずれも自国の国家的利益の伸張、確保を前提とした、きはめて現実的な動きであつて、世界はやうやく米ソの二元対立の時代から、多元化への兆しを見せはじめた。かういふテンポの早い国際政治の動きは、観念的な流行思想の枠では把握できない。少なくともそれは、日本のジャーナリズムに支配的な漠然たる冷戦緩和のムードとは、全く次元の違つたきびしさの上に展開されてゐる。故ケネディ大統領が、「自分たちのために国が何かをしてくれることを望まず、自分たちは国のために何ができるかを考えよ。」と訴へた呼びかけに、敏感に反応するだけの健康さを、アメリカ国民は持つてゐた。恐らくソビエトに於ても、国家への献身は、イデオロギー以前の自明の問題であらう。国際政治とは、所詮ナショナル・インタレストのあらはな角逐の場であり、平和とは、このナショナル・インタレストの調整によつて得られる、ある状態に過ぎない。このダイナミックスを理解できず、平和を固定した観念としてしか把握できないところに、進歩主義思想の重大な誤謬がある。

しかし、現実の動きは、教条的な左翼理論を置きざりにして進んだ。思想界もやうやくマルキシズムの呪縛から脱却しはじめた。圧倒的な事実の力の前には、架空の幻想や観念は崩

壊せざるを得ない。安保闘争の全学連主流派の指導者であったある高名な思想家（注3）は、「マルキシズムは今やソビエトに於ても、儀式用、宣伝用になった。」と言ひ、その鮮やかな「転向」を満天下にさらした。イデオロギーの狂信者は別として、自己の乏しい思想の粉飾のため、それを手段として使つてゐた人々は、やうやく時流の動きを見て、その言説を変へはじめた。かれらは無垢な青年たちを矯激な政治行動にかり立てた責任に目をつぶつて、再びしたりげな教説をくりかへすのであらうか。

青年たちは今、安定の中に放置されてゐる。ひところのやうな激発的な政治行動に走る者たちは、たしかに、少なくなつた。しかしながら彼らの溢れるやうなエネルギーは、今ではひたすら自己の栄達と眼前の享楽にそそがれてゐる。そして、政治主義の学生にしる、個人主義の学生にしる、その底流をなすものは、やり場のないニヒリズムである。窮極に於て人間は孤独な個体であり、その個我的欲求を充たすこと以外に、どこに人間の生き甲斐があらうといふのが、凡その青年たちの人生観の中核となつてゐる。権力と地位と金が、青年の至上の目標となつた時、一国の頹廢はここに極まるといふべきである。

だが深く思ひをひそめて、この青春の喪失を見つめてゐる人は意外に少ない。為政者の「人

づくり」のスローガンなどではどうにもならぬほど、頽廢は根深いのである。戦争の残した最大の傷痕はまさにこれであらう。われわれの合宿教室は、この現状に対するやみがたい思ひから生まれた。青年たちの胸に、かけがへのない生命の尊さと、人間として生れて来た責任を呼びさまさねばならない。煩瑣でいびつな論理によって、がんじがらめにされてゐる彼らの情意は、一刻も早くその本来の素直さをとりかへさねばならない。そして、現実に即した着実な思想によって、正しい学問への道が一日も早く切り開かれねばならない。いかに迂遠であらうとも、これこそが国を正す唯一の道であらうと信ずるからである。

合宿教室は、学生諸君が個我の殻を破つて、友情の世界に開眼する場でなければならぬ。国の運命と人生の課題に、真正面から真剣にとり組む体験を共にすることによって、失はれつつある連帯感が回復されねばならない。権力やイデオロギーによって、人為的に作り出された連帯感ではなく、青年の内発的な意志によって魂がつなぎ合はされてゆくならば、それは、国の根底を培ふ大きな力となるであらう。合宿教室の中で、参加者たちがひとしく学び取ったものは、人間は性格や能力の外的差別を越えて、心を通はせ合ふことができるといふ確信であつたに違ひない。その体験こそ、人間の生は「他と共なる生」であり機構や制度の

限界をカバーするものは、人間相互の信頼に外ならないことを教へたはずである。そこに人間の自己疎外を突破する一つの道があらう。われわれが、聖徳太子の御思想にふれたことも、短歌の創作を行った理由も、おのづから納得していただけることと思ふ。

われわれの立場は、左翼でないことは勿論、断じてまた右翼でもない。また、その二つを足して二で割った、いはゆる中道思想といふごときものでもない。むしろ、われわれの念願は、国民を簡単に左右に色わけして怪しまぬ機械的思惟の克服であり、人はまごころによつてつながり得ることの確認であった。それこそ、われわれの人間論と国家論と人類社会への志向を一貫する基本的姿勢であつて、「国民同胞感」といふ言葉にこめた、われわれの無量の思ひも実にその一点にあつた。

われわれは、今日の日本のひづみを正す、ささやかな努力の一端として、心をこめてこの一冊の記録を編んだ。一人でも多くの方々が、われわれの提示した問題と真剣にとり組んで下さることを、心から祈念するものである。

(注1中ソ論争) 昭和三十八年(一九六三)一月、ソ連は中国を教条主義者と非難、同七月

スクワの中ソ共産党会談決裂。俗に一枚岩とまで言はれた共産主義国家群の団結が、中ソ二大国の対立で崩壊しはじめた事件として記録される。

(注2核停条約締結) それまで野放しであった、核実験に歯止めをかける意味でこの条約の調印が押し進められた。昭和三十八年(一九六三)八月、米・英・ソは部分的核実験停止条約に調印。一方、核クラブに強硬に参入するつもりゆゑ、中国は不参加を通告。

(注3思想家) 清水幾太郎(当時、学習院大学教授)。

第九回「合宿教室」(昭和三十九年・一九六四)

甘ったれた国際主義と観念的な平和主義からの脱却を

(昭和四十年四月三日記)

【第9回「合宿教室」昭和39年（桜島）参加者数202】

講 師	演 題
文芸評論家 小林秀雄	常識について
世界経済調査会理事長 木内信胤	日本の政治と経済
政治評論家 広田洋二	日本の政治と外交

【昭和39年（1964）】

- 3.2 中国、北ベトナムの米侵略阻止要請に支持確約の回答
- 10.1 東海道新幹線（東京～大阪間）営業開始
- 10.10 第18回東京オリンピック大会開催
- 10.15 ソ連フルシチョフ第一書記を解任（第一書記ブレジネフ、首相コスイギン）
- 10.16 中国、初の核実験成功を発表
- 11.9 佐藤栄作内閣成立
- 11.12 米原潜シードラゴン号佐世保に入港
- 11.17 公明党結成

【昭和40年（1965）】

- 2.7 米軍機、北ベトナムのドンホイを爆撃（北爆開始）

一九六四年十月といふ月は、歴史年表にゴシックで記入されるべき月であらう。

われわれ日本国民は、戦後はじめて、何らの負ひ目の感情なしに、オリンピック会場に高々とひるがへる国旗を仰ぎ、高らかに鳴りひびく国歌を聞いて、「世界の中の日本」を確認し得たのであった。

しかし、われわれ日本人が、東京オリンピックに実現された国際的連帯の世界に陶醉してゐる間に、現実の国際政治はすさまじい勢で動いてゐた。フルシチョフ解任（注1）が特号活字で報ぜられた翌朝には、それに追ひ打ちをかけるやうに、中共の核爆発成功（注2）のニュースが全世界に衝撃を与へた。眼前の仮構の世界と、冷徹な現実の世界の落差が余りに大きかったため、多くの人々は国際政治の苛烈さを正確に受けとめることが出来なかつたやうに見える。予想されてゐたこととはいへ、隣国中共の核爆発は、力の均衡の根底をゆさぶるやうに、無気味な振動を伝えて来た。中共の指導者は力の信奉者であり、中ソ論争においても平和革命の偽瞞を暴露して、暴力革命以外に革命方式はないことを一貫して主張した。これらの人々の意図が、核の圧力を背景として、日本の社会主義革命実現へ向けられることは必至である。共産党がいちはやく中共の核保有に賛成の意を表明したのは、この力の論理

の承認であつた。同じくマルクス主義を理論的支柱とする総評や社会党は一応「遺憾である」といふ形式的声明を発表したが、それは動かしがたい巨大な事実の前で、国民感情に対する媚態以外の何物でもなかつた。非武装中立といふ彼らのスローガンは、核兵器への恐怖感を利用して、自己の政治勢力を拡張する術策に外ならない。非武装中立で核の威圧に抗することができると本気で考へてゐるとすれば、彼らはセンチメンタルな似非思想家に過ぎず、政治家の名に値しない。

それにしても、中共の核開発に関する言論の中で、最も的確に現実を分析したものは、外ならぬフランス人ガロワの論文だけであつたといふのは極めて奇異な事実であつた。(毎日新聞十月二十日、二十一日、二十二日)ガロワは、日本の対処すべき具体策として、アメリカの核の傘の中に入るか、アメリカから核兵器の供与又は売却を求めるか、自力で核兵器を建設するか、中共の保護下に入るか、この四つの選択しかないと述べてゐる。そして、核を持たぬ国は絶対の「不可侵地域」たり得ないといふ明確な事実を指摘した。国家的利益を大前提とした、かういふ現実的な反応が、力の論理としてタブー視され、常に違つた次元の問題にすりかへられるところに、戦後日本の異常さがある。日本だけが国際政治の原則の適

用を受けない特殊国家であり得るはずはないからである。国際政治のきびしい風雪の中で、国民の平和と安寧を守る具体的な意志を持たず、絶対的な保証のない、他国の「公正と信義」にたよる甘つたれた国際主義は、戦争を敗北にみちびいた極端な国家主義の裏がへしであつて、極めて危険な観念論である。そして、さういふ知的風土を生み出したものが、外ならぬ思想と学問の誤りであつたことを改めて痛感させられるのである。

ひるがへつて国内の状況を見ると、政権の交替が行はれたとはいへ、依然として経済第一主義のペースが続いてゐる。保守政党は、当面の政策をこなすことに精力を消尽し、基本的な姿勢を正す努力に欠けてゐるけれども、革命勢力の四分五裂によつて、まづ近い将来に「変革」の兆はないやうに見える。事実「社会主義」は魅力を失なひ、青年の保守化が云々されつつある。言論界に於ける進歩主義の敗北は明瞭になつた。国民的基盤は徐々に回復され「反動」「逆コース」といふただけしい怒号も生気を失つて来た。まづはめでたい泰平の世である。

しかし、時代を凝視する眼には、病根は極めて明らかである。かつて、ハワイ軍港を出港

する原子力潜水艦の乗組員の妻が、幼児を抱き涙をためて夫を見送つてゐる姿を、テレビの画像で見たことがある。それは、世界の政治に現実の責任を持たねばならぬ国民の悲痛な姿であつた。さういふ他国民の悲痛な犠牲の上に守られてゐる「平和」の中で、日当を貰つて動員された原潜阻止のデモ隊が、別の「平和」を叫んでゐるのである。無制限な要求と責任の皆無、これが現代の日本人の憐むべき一つの姿である。

青年の「保守化」の傾向を為政者は喜ぶであらう。しかし、それは牙をむいて国家権力に反逆して来る青年とは別の意味で、痛ましい現象であらう。何故なら、それは青年らしい意志を放棄した、安易な現状肯定にすぎないのだから。教育とは単なる知識の授受であり、学校とは単に立身出世のエスカレーターであつてよいのだらうか。今われわれは、欲望の充足に最高の目標を置く教育が行きついた、恐るべき壁に直面してゐる。打開の方途は色々考へられやう。しかし、われわれは、魂と魂が火花を散らして接触するといふ教育の原型を回復する以外には道はないと信ずる。今こそ、青年の胸に素直な雄々しい魂をよびさまし、友情をあたためつつ、「人の人たる道を学ぶ」と古人が言つた学問の初心に回帰しなければなら

ない。サークルから地方合宿へ、地方合宿から大合宿へといふつみ上げの中で、われわれは常に「心の姿勢」を問題にした。お仕着せの既成概念にたよらず、自己の体験に根ざした着実な思想の方法を身につけること、さういふ緊張した求道の中できびしく育てられてゆく友情と連帯の世界を創造すること、それ以外に青年の心の空隙を埋めることはできない。或る者は、合宿教室の中から、現在の学園に支配的な疎外の意識や、跳ね上った政治主義を克服するきっかけを擲んだであらう。或る者は真剣に自己を凝視する眼を磨いたであらう。古典の輪読は多数の参加者が心をつ一つにして、歴史の生命に直接する方法であり、短歌創作は具體的な表現を通じて孤立から脱却する経験を教へた。そこには、イデオロギーに呪縛された同志意識とは異質の、生命と生命が最も自然な形でつながってゆく喜びがあった。その喜びは、見えざる力となつて、学園における人間の崩壊を支へるに違ひない。人間を無機的な数に換算する大衆運動とは全く違った次元で、われわれは一人一人のかけがへのなさに日本の未来を託さうと念ずる。現在政治的用語として革新の意味に使はれてゐる「ラディカル」とは、本来「根源的」の意味であつた。現代の一切の停滞に対して、国家の運命を切りひらく視野を青年の胸に培はんとするわれわれの運動は、眞の意味で「革新的」であると信ずる。

何故なら、それは日本の青年の生の意義を、その根源に於て回復せんとする運動だからである。

(注1フルシチョフ解任) ソ連共産党中央委員会総会で、高齡と健康の悪化を理由に解任された。中央委員会総会では、彼が行ってきた経済政策や対米讓歩、中ソ対立など、その政治姿勢を厳しく批判する発言があひついだ。

(注2中共の核爆発成功) 中国はアメリカの核兵器の脅威に対抗するため、昭和三十一年(一九五六)に核兵器開発に着手、同三十三年自力開発方針決定。膨大な費用と高度技術を必要とするウラン235を使用した原爆開発の成功は、水爆開発も予想させ、全世界を驚かせた。

第十回「合宿教室」(昭和四十年・一九六五)

戦後二十年、精神そのものの退廃現象が拡がっている

(昭和四十一年四月二十九日記)

【第10回「合宿教室」昭和40年8月（大分）参加者数215】

講 師	演 題
奈良女子大学名誉教授 岡 潔	日本の情緒について
世界経済調査会理事長 木内信胤	私の構想する世界の新秩序
政治評論家 花見達二	日本政治の憂ふべき動向

【昭和40年（1965）】

- 4.24 「ベトナムに平和を！ 市民文化団体連合」（ベ平連）主催、初のデモ
- 6.22 日韓基本条約と付属の協定に調印
- 8.9 シンガポール、マレーシアから分離独立
- 12.10 日本、国連安保理事会非常任理事国に当選
- 12.15 米機、ウォンピ火力発電所爆撃（聖域爆撃）

【昭和41年（1966）】

- 1.18 早大、授業料値上げ反対スト（6.22 全学スト解除）
- 2.28 韓国、南ベトナムへ一個連隊増派決定
- 3.11 インドネシア、スカルノ大統領が政治権限をスハルト陸相に委譲。共産党の非合法化

「戦後に賭ける」といふヒステリックな叫びと、「戦後は虚妄だ」といふ否定的断定が、ひところの論壇を鋭く二分した。しかし、そのいづれの声も、掛け替へのない日々を、いのちをこめて生きて来た庶民からは遠いところにあつた。この二十年といふ歳月は、さういふ觀念的な論断では到底割り切れぬ民族的体験の、苦渋に満ちた軌跡を示してゐるのではないか。オリンピックと高度成長によつて象徴される一つの時代は終つた。それは日本人の潜在的エネルギーを世界に誇示したものであつたが、同時に経済第一主義の国是と個人至上の原理の限界を示したものであつた。不況は深刻化し、戦後の日本人の精神全般の姿勢がきびしく問ひ直されてゐる。

ベトナム戦争（注1）は膠着し、アメリカ帝国主義と北爆反対の感情的なキャンペーンが執拗にくりかへされてゐる。しかし、北爆の非人道性が一方的に強調されながら、「北」のゲリラの残忍性が不問に付されるのは奇怪である。相手側の理性的抑制を逆用し、非戦闘員を容赦なく殺戮に捲きこむことを自明の前提とするゲリラは、極めて惨酷な「政治的軍隊」である。「北」は中共の餌である。戦火が国境を越えぬ限り、ベトナムの消耗戦は中共の思

ふ壺である。日本の知識人の感傷的観念論とは全く逆の非情冷酷な打算が働いてゐる。「ベトナムに平和を」と叫んでさへをれば、如何なる悪もカバーされるといふムードは、左翼政治原理と道徳のすりかへであり、道徳そのものの衰弱現象を示してゐる。

中共の核開発は進んでゐる。ミサイルの開発が成功すれば、日本列島は容易にその射程の中に入るであらう。三億の民兵を擁するこの巨大な軍事国家は、「政権は銃身から生れる」と呼号する指導者に率ゐられてゐる。「戦争は血を流す政治であり、政治は血を流さぬ戦争である」といふ彼らは、流血の中で鍛へ抜かれた力の信奉者である。パキスタン、インドネシア、キューバと政治的敗退を重ねた中共の膨張力が、核の圧力を背景として日本に及んで来るのは力学的必然である。この簡明な事実が、煩瑣なイデオロギーの網の目の中で見失はれてゐるところに、中国問題の菌切れの悪さのポイントがある。

ともあれ、思想の混乱といふよりもっと根深い、精神そのものの退廃現象が拡がりつつある。民族的エネルギーの涸渇をうながす根源を追及して行く時、われわれは「日本国憲法」につきあたる。この憲法の根底にあるものは、人権宣言、独立宣言の系譜につながる思想であつて、個人といふ完結した単位が至上であり、国家はそれを保障する手段にすぎないとす

る。しかし、国家は個に先んじて存在し、個に優先する生きた全体である。この事實は制度上の「全体主義」と混同されてはならない。国家を支配階級の道具とし、その消滅を目的とする共産主義国家が、例外なく強烈な国家意識を強調せざるを得ないといふ逆説は、構成的な国家観の限界を示してゐるのではないか。事實、体制の如何を問はず、かかる国家観は生活経験によつて修正され、克服されつつある。個人至上の憲法を強ひたアメリカは、既に個人至上の国ではなかったし、「自我の解放」を外部からアジテートしている中共やソ連もまた決して個人至上の国ではない。この簡明單純な事實が見ぬけぬ程日本人の目は盲目ひてしまったのであらうか。

スターリン批判(注2)に始まり中ソ分裂(注3)に至る一連の事實は、マルキシズムの神話を崩壊せしめた。現実に存在するものは「社会主義」ではなく「社会主義国家」であった。近親憎悪の心理からいへば、中ソ戦争の可能性さへ皆無ではない。まさに歴史は不可測に進展する。思想界もやうやく進歩主義の呪縛を脱却して、自己回復への平衡運動を始めた。ナシヨナリズム論争も、歴史の再評価も、国民不在の思想への鋭い挑戦であった。しかし、

マルキシズムの理論的破綻と、それが日本の社会で現実にも機能してゐることとは別物である。今やマルキシズムは小市民的なエゴイズムと結んで、アナキーな自己主張の根拠となり、秩序破壊の暗い衝動となつて青年層の心に浸透しつつある。「原潜反対」も「日韓阻止」(注4)も「血を流さぬ戦争」の一環である。われわれをとりまく現実の様相は、まさに「分裂国家」のそれである。非情な政治主義の風潮の中で青年の心は荒廢の度をましてゆく。

しかし、破壊のよろこびや欲望の充足の中にしか生を実感できぬやうないびつな空気は、何としても正されなければならない。克己や犠牲や全体への献身もまた人間性のやみがたい要求である。いまだに自国の文化や伝統が、憎悪と自嘲の対象としてしか教へられない大学の学風から、豊饒な思想が生れ出るはずがない。人間をイデオロギーによつて分類し、政治の系列に組織してゆく「学生運動」が残したものは、人間不信と絶望的な挫折感だけではないか。今こそ、一人一人の学生の胸に、日本の青年本来の純粋な意志が奪回されねばならない。日本の青年の心に、魂と魂が響き合ふよろこびが実感された時、思想の昏迷は必ず打ち破られるであらう。意志は指標を見出し、視野は世界へ開かれるであらう。人の心が正

確に働かねば一切の組織や制度は空しい。雄々しい意志と、みづみづしい情感をもって、果敢に現実に立ち向へる青年、さういふ一人の「人物」の養成にわれわれの希ひはかけられてゐる。このメカニカルな時代に、野暮とも愚直ともいはれながら、一人から一人への「志」の伝達に心血をそそいで来た。この冊子は、さういふわれわれの苦闘のささやかな記録である。行間にこもるわれわれの思ひをくみとっていただけたら幸ひである。

(注1ベトナム戦争) 昭和三十九年(一九六四)八月二日、米國務省は、北ベトナムが米駆逐艦隊を攻撃と発表(トンキン湾事件)、同八月四日、米軍、北ベトナム海軍基地を爆撃、同八月七日、米議会、大統領に戦争遂行権限を付与、同四〇年二月七日、米軍機「北爆」開始——これらの事件が、昭和五〇年四月のサイゴン陥落に至る一〇年間のベトナム戦争の始まりであった。

(注2スターリン批判) ソ連共産党の最高指導者スターリンの死後、彼の専断的恐怖政治に向けられた批判。昭和三十一年(一九五六)二月のソ連共産党第二〇回大会で、フルシチョフ第一書記は資本主義との共存、武力革命絶対の公式を退け議会の多数による平和革命

方式を認めた。

(注3中ソ分裂) 固い団結と蜜月の関係にあった中ソ両国は、五十六年二月に起きたスターリン批判の評価をめぐって意見対立が表面化。対立の基本図は対米路線の相違、すなはちソ連の対米共存・協調路線に対し、中国の反米・反帝国主義路線の対立であった。

(注4日韓阻止) 昭和四〇年(一九六五)六月、日韓両国は日韓基本条約と付属の協定に調印、同八月、韓国国会は日韓条約を与党単独で調印。日本の社共両党は同一〇月、日韓条約批准阻止で統一行動を実施した。(二〇万人が国会デモ)

第十一回「合宿教室」(昭和四十一年・一九六六)

激しく揺れるアジアと戦後思想の盲点

——「国家」と「死」の脱落——

(昭和四十二年四月二十九日記)

【第11回「合宿教室」昭和41年8月（雲仙）参加者数240】

講 師	演 題
文芸評論家 福田恆存	「近代化」の意味とその克服
世界経済調査会理事長 木内信胤	私の経済哲学

【昭和41年（1966）】

- 5.30 米原潜、横須賀に初入港
- 8.2 総評大会、ベトナム反戦闘争強化決議
- 8.18 中国、北京で文化大革命勝利祝賀の紅衛兵100万人集会（革命運動、中国全土に波及）
- 10.21 総評、ベトナム反戦統一ストに54単産186万人参加と発表
- 10.25 対シンガポール血債問題解決（総額58億8000万円）
- 11.24 明大学生会、授業料値上げ反対、無期限スト

【昭和42年（1967）】

- 2.11 初の建国記念の日
- 4.16 東京都知事選、美濃部亮吉（革新系無所属）が圧勝
- 4.26 米機、ハノイ中心部至近の鉄橋など爆撃（北爆拡大）

アジアは今、激しくゆれ動いてゐる。後進地帯への共産主義の衝撃が、到るところで激しい動乱をまき起してゐるのだ。ベトナム、インドネシア、中共はその三つの焦点である。

北爆開始以来二年、五十万を越える米軍が投入されてゐるが、ベトナム戦線は、膠着し、新しい展開への兆は見えない。近代の生み出した「イデオロギー」といふ神と、性能の卓抜した殺戮兵器と、米ソ、米中、中ソの国家利害が三つ巴にからみ合つて、湿地とジャンゲルの風土に劫火が荒れ狂つてゐる。「戦争」がその非情な意志を貫徹してゆく現実に対して、「ベトナムに平和を」といふスローガンは完全に無力である。しかし、このスローガンが革命勢力結集へ果す有効性は、最大限に利用されてゐる。感傷的人道主義へのアッピールが、左翼の戦略戦術へ容赦なく組みこまれてゆく欺瞞は許せない。「ベトナム問題」は思想戦における革命陣営の鋭い武器である。

九・三〇事件（注1）以来、インドネシアは左から右へと大旋回を遂げた。民族、宗教、共産主義を三位一体とするナサコム体制は崩壊した。北京——ジャカルタ枢軸の推進者であり、中共と共にアジアのラディカリズムを代表したスバンドリオ外相は反逆罪に問はれた。陸軍の主導権によるスカルノの追ひ落としは時間の問題といはれる。おびただしい流血の中で、

政情不安は極めて深刻である。

昨年四月、郭沫若の自己批判に始つた中国の整風運動は、半歳の間、紅衛兵運動、文化大革命（注2）へと主流派と実権派が血みどろな権力闘争を続けてゐる。猜疑と憎悪によって生き抜いて来た共産主義者が一たび権力をめぐつて敵対関係に入るとき、いかに残酷非情な闘争を辞さないか、われわれは眼前に展開されつつある凄惨なドラマを凝視すべきである。それは、いかなる詭弁をもつても、全く弁護の余地なき非人間性を露呈してゐるではないか。しかも、中共は昨年中に連続三回にわたる核実験を重ね、ミサイル核兵器の開発に成功した。今や日本列島は完全にその射程距離に入った。

中ソ関係も極度に緊迫してゐる。中共の内部紛争が辺境に波及するに従ひ、その長い国境線が緊張の度を加へるのは必然である。しかも中共は意識して対外的緊張を作り出してゐる。両国の亀裂は予測を越えた速度で深まつてゐる。ソ連は二十六個師団の地上兵力を極東地域に配置し、中距離ミサイル部隊を国境線に集結し、ウラジオにはミサイル装備の四十隻をふくむ百二十隻の潜水艦を集結したといはれる。一方中国は、新疆、東北三省に五十万の兵力を展開してゐると報じられてゐる。世界最大のウラニウム埋蔵量を持つ新疆地区をめぐつて、

情勢は全く予想を許されない。数年前には想像も及ばなかった国際関係の激変である。アジアの情勢は厳しく、かつ険しい。

このやうに力と力が軋み合ひ、火花を散らしてゐる国際政治の世界で、日本だけが嘘のやうに泰平である。他国の意志によつて、いつでも、侵犯できるやうな脆弱な「平和」が続いてゐる。綱紀はゆるみ、ストライキは慢性化し、頹廢は根ぶかく広がりつつある。政界上層部の一連の不祥事件に対して、「黒い霧」といふ小説のタイトルが、マスコミの波に乗つてまたたく間に全国津々浦々に拡がった。現在のところ革命勢力の激しい攻撃を保守はからうじて支へてゐるが、今にして姿勢を正さねば悔を千載に残すであらう。建国記念日の制定（注3）は、戦後思想史の一つのエポックではあつたが、祖先の心を偲ぶといふ体験が公教育の場で全く与へられてゐない現状は痛恨の極みである。

戦後思想の最大の盲点は、われわれの視野から「国家」と「死」の觀念がすつぱりと脱落してゐたことであつた。国家とはわれわれにとつて、選択の対象ではなく運命であり、「存在」ではなくして「価値」である。遠い祖先と遙かな子孫を包含する「国」は、血脈の集団であり、われわれの生命がそこから来、そこへ帰る母胎である。人間がその生命のうつろひやす

きを知り、その依拠を求めるとき、最も身近にあるものは国のいのちである。われわれにとって、それは「祖国日本」である。かつて、第一次大戦後、ロイド・ジョージは「生くるに価値する国」をもって、英国再生の原理とした。故河村幹雄博士（注4）は、その言葉を引きつづ、われらの国をして「死するに価する国」にすることを政治家の使命とした。それは半世紀前のことであつたが、その言葉は今もなほ新しい。

社会のメカニズムの中で疎外されてゆく青年たちの生命は、今その突破口を模索してゐる。果してそこには性と革命と虚無しかないのか。あるいはまた、精神の牙を抜かれた平凡な日常性への埋没しかないのか。いのちをかけて守るべき価値を持たぬ時代の中で、鬱屈し、低迷する青年の生命は何かを待つてゐる。それはみづみづしい生命の必然の要求である。どのやうな形であらうと、われわれにはそれに応へる義務がある。われわれが毎年に行ふ合宿教室は、その一つのささやかないとなみである。日本の伝統と生命を断たうとするイデオロギーの組織に対して、われわれは一人から一人へと生命の組織を拡げてゆく外はない。その願ひの一端をこの小冊子からくみとつていただきたい。

いかなる時代においても、教育の原型は一人から一人への経験の伝達である。それは本質

的に大量生産ではなく手工業でなければならない。木内、福田両先生は貴重な時間を割いて合宿地雲仙に数日滞在され、ご講義の外、質疑に答へ、班別討論を指導し、パネル・ディスカッションに参加された。教育不在の叫ばれてゐる時代において、そのご熱意は深く銘記しなければならぬ。

(注1九・三〇事件) インドネシア、ウントン中佐のクーデター失敗。陸軍の共産党弾圧が始まる。インドネシアのスカルノ大統領は米、ソに等距離を置く非同盟主義をとつてゐたが、実質は北京と枢軸同盟を結ぶ等、共産党に権力の基盤を置いてゐた。しかし、この事件後急速に権力を失墜していき、翌年三月政治権限を当時のスハルト陸相に委譲、スハルト陸相は翌日共産党を非合法化した。

(注2文化大革命) 毛沢東と劉少奇等いはゆる実務派との権力闘争と捉へられるこの中国国内騒動は十一年の永きに渡つた。毛沢東は毛語録を金科玉条とする紅衛兵(十〇代の少年、少女)を動員、次々と実務派政治家を失脚させた。又密告を奨励したり、大学生を帰農させたり等人心を荒廃させた。

(注3 建国記念日の制定) 戦前の紀元節の日を建国記念日として、一九六七年(昭和四二)より国民の祝日の一つとした。紀元節は明治政府が神武天皇即位の日を建国記念の日として祭日に制定したものである。

(注4 故河村幹雄博士) 明治十九年生。明治四十四年、東京帝国大学理科大学地質学科卒業。大正八年九州帝国大学教授、地質学担当。昭和六年没。著書に「名も無き民のこころ」(岩波書店)がある。

第十二回「合宿教室」(昭和四十二年・一九六七)

## 学生運動の凶暴化

——「積誠」によつて国を支へる決意を——

(昭和四十三年三月三十一日記)

【第12回「合宿教室」昭和42年8月（阿蘇）参加者数336】

講 師	演 題
作家 林 房雄	日本民族の中核性格
亜細亜大学学長 太田耕造	指導者の教養
世界経済調査会理事長 木内信胤	世界の転機と日本

【昭和42年（1967）】

- 6.30 ケネディ・ラウンド（関税一括引下げ交渉）参加48か国調印
- 8.8 ASEAN（東南アジア諸国連合）正式発足
- 10.8 佐藤首相南ベトナム訪問に反対して反代々木系全学連の抗議デモ、警官隊と衝突。学生1人死亡
- 12.19 『世界経済白書』、国民総生産で日本3位と発表
- 12.28 ベトナム駐留米兵47万8000人（初の公式発表）

【昭和43年（1968）】

- 1.19 エンタープライズ佐世保入港
- 1.29 東大紛争始まる
- 1.30 南ベトナム全土でベトコンが大攻撃（テト攻勢）
- 3.9 沖縄のB52、北爆発進と米紙報道



佐世保に入港した  
原子力空母エンタープライズ号  
<毎日新聞社提供>

明治百年の記念すべき年である。だが、「昭和元祿」と揶揄される泰平の中で、この一世紀間の巨大な民族的経験の重みを、真に精神の衝撃としてうけとめ得るかどうか。明治人のあのかなしき緊張の生は、大衆社会に埋没し規格化されてしまった精神にとつて真に生きた歴史であり得るのかどうか。造船量世界第一位、自動車生産量世界第二位といふ。ハーマン・カーンは二十世紀日本の国民総生産世界第一位を予言した。しかし、目の眩むやうな繁栄のおかげに、果てしない精神の腐敗と退廃が拡がってゐる。戦後日本が、歴史のほしいままな裁断と否定の上に出発した当然の帰結ではないのか。虚心に歴史に対しないものは、必ず歴史によって復讐される。明治百年よりもロシア革命五十年に情熱を燃やす知識人の中から、真に日本人を動かす思想と行動が出てくるはずはない。

エンタープライズ(注1)が大きな波紋を残して佐世保を出港してから兩日を出でずして、米情報収集艦ブエプロが元山沖で北鮮によつて拿捕された。それは一月下旬からのベトコンの大攻勢と気脈を通ずるごとく、無気味な国際緊張を生み出した。ソ連や中共からは安保を廃棄せよといふ恫喝がしきりに行はれてゐる。それに呼応するごとく、国内では非武装中立(注2)の空論が横行してゐる。昨年六月の中共の水爆開発の事実も、それに対抗するアメリカのABM(ミサイル迎撃ミサイル網)配置もソビエト革命五十周年式典の赤の広場を埋めた巨大な弾道兵器の戦列も、現代がイデオロギーに武装された国家の自己主張の時代であることを語つてゐる。先進諸国のナシヨナリズムが、国際機構を利用した間接的な現はれを示すのに対して、中東戦争で勝利をおさめたイスラエルは、後進国のナシヨナリズムの原型を鮮明に示した。彼らは民族の原点エルサレムを奪回した。砂漠の果のキブツでは、「国のために」といふ一語で青年たちは想像に絶する苦難に耐へてゐる。

学生運動の凶暴化が大きな社会問題となつた。昨年九月の法政大学事件以来、矯激なゲバルト肯定思想が、学生間に公然と主張されるに至つた。それは「合法、非合法は力によつてきまる」と主張する教師集団によつて指導された戦後教育の「成果」であつた。アメリカ帝



佐世保大橋上でもみ合ふ全学連と機動隊  
<毎日新聞社提供>

国主義と佐藤政府は一切の悪の根源であり、それと対決する一切の暴力はゆるさるるといふ演繹的思考が、羽田や佐世保の学生を支へた思想であった。抵抗こそ最高の美德と教へた人々が、流された血に対して、かへりみて他を言ふのは卑怯である。核アレルギーと戦争嫌悪の心理を組織すること、戦争への恐怖を煽ることによって、革命への恐怖を帳消しにすること、集団暴力のつみ上げによって、暴力革命への心理的地ならしをすること、佐世保事件はかういふ実際的な効果ををさめた。左翼の世論操作は成功した。機動隊に背番号をつけようといふ児童に類した投書が大新聞に掲載された。エンタープライズといふ「黒船」の衝撃で、日本全体が集団

妄想の中に踊った。国家利益を中心にした冷静な打算が最も必要な時に、婦女子の感傷論と、人権思想に保護された安価なヒロイズムだけが横行した。まさに亡国の兆である。誤った思想と学問が国家生活を崩壊に導く凶器であることを証明するに足る事件であった。

佐世保事件（注3）は、大学の自治にも大きな問題を残した。国有財産である九州大学の学生会館は、あらかじめ予告された暴動の主役たちの拠点となった。大学当局者たちが、その説得の限界を自認しつつ警察力による排除を拒否したのは何故か。その原因の一つは、治外法権の特権意識であらう。大学の自治は自治権を意味するものではない。それは近代国家の慣行によって、国民から黙認されてゐるものに過ぎない。大学は国の法の外にあるといふ錯覚が支配してゐる。社会主義国家の大学は、きびしい思想統制の下にあるといふ現実と、この過剰な自治意識はどこで調和するのであらうか。また最近における学園紛争の焦点が学生会館の管理問題にあつたことの意味も明白になった。各大学の学生会館は大学の自治を楯として、二年後の安保改定期には、職業革命家の橋頭堡となるであらう。大学の自治の拡大解釈は、日本の中に数百の「解放区」を黙認することになるであらう。

不法占拠を招いた第二の原因は、階級闘争の是認といふ学園の一般的ムードであらう。そ

れが「国家権力」と闘ふ狂信的な若者を英雄にまつり上げてしまった。暴力しか信じないト  
ロッキストの姿に、人々はイデオロギーの呪縛が人間を抹殺する恐しさを読むべきであった  
のに。ともあれ、一群の意識分子は、教育の場として国立大学から、数日の間完全にその機  
能を奪ったのである。「平和と民主主義」のスローガンが、「革命と共産主義」のシノニムで  
あることに気がつかないヒューマニストは、恐るべき全体主義の到来を知らずして招いてゐ  
るのである。

明治維新は歴史的民族的根源への回帰によつて危機を切り抜けたのであった。攘夷にも開  
国にも、尊王といふ明確な主体があった。国論分裂はその一点においてからうじて支へられ  
たのであった。明治の達成はまさに世界史的なものであったが、それは歴史の切断と否定に  
よるものではなく、その連続と確認の上に実現された成果であった。憎悪と否定のエネルギ  
ーが生み出した革命とは異質のものであった。力と力の戦ひの中から生れた国家権力は、所詮  
相対的なものである。それはより強い力によつて倒されるのが宿命である。しかし、天皇の  
政治は、それとは次元を異にしたものであった。それは本来独断や狂信とは最も遠い、静か  
な祈りに支へられて来た。その、実証に耐へ得る歴史的事実の究明は、日本の人文科学を学

ぶ者たちの義務でもあらう。今や権力政治の横行と、それが宿命的に醸し出す底深いニヒリズムが世界を掩ふてゐる。人類の停滞からの脱出に寄与する思想は、空漠たる無国籍の觀念論からは絶対に生れて来ないであらう。

歴史参加といふことは、必ずしも直接的な政治行動を意味しない。醒めた心で、明日の日本を凝視する努力は、「エンブラ反対」のシユプレツヒ・コールに自己陶醉するよりも遙かに困難な行為である。松陰先生が言はれたやうに、「一朝の憤激」ではなく、「積誠」によつて国を支へるといふ決意が今日程要請されることはない。雄々しい意志と、美しい心情をもつた一個の人物を育てるといふわれわれの運動が、かりそめならぬものであることを改めて反省せしめられるのである。

(注) エンタープライズ) エンタープライズとは核搭載可能の米空母の名前。昭和四二年(一

九六七) 十二月、佐藤首相は「核を製造せず、持たず、持ち込ませず」のいはゆる非核

三原則を言明。翌四三年一月佐世保に空母エンタープライズが入港するに当たり、核を

搭載してゐない事を米国に確認させると、野党側が迫り大規模な反政府運動に發展した。

(注2 非武装中立) いっさいの軍備をもたず、中立の立場を維持することによって米ソ冷戦下の安全保障を確保しようとする政策。一九五一年(昭和二六)の社会党大会で全面講和・中立・軍事基地反対・再軍備反対の平和四原則が採択され、社会党の安全保障政策として確立された。

(注3 佐世保事件) 昭和四三年(一九六八)一月十九日、米原子力空母「エンタープライズ」は佐世保に入港したが、学生運動の各派は全国から大動員をかけ、社会党や労働組合などとともに激しい入港阻止行動に出た。政府も警官隊を総動員、佐世保は騒然とした空気に包まれた。

第十三回 「合宿教室」 (昭和四十三年・一九六八)

思想戦のやまばを迎へて

—— 大学・沖縄・安保 ——

(昭和四十四年四月三十日記)

【第13回「合宿教室」昭和43年8月（霧島）参加者数353】

講 師	演 題
文芸評論家 竹山道雄	西洋文化との対照における日本文化の問題
政治評論家 高谷覚蔵	ロシア革命とソ連の現実
世界経済調査会理事長 木内信胤	これからの国造り——物心両面の理想は何か

【昭和43年（1968）】

- 4.15 日大紛争始まる
- 5.13 ベトナム和平会議（パリ会談）開始
- 6.26 小笠原諸島復帰実現
- 8.21 ソ連・東欧軍、チェコへ侵入
- 10.13 中国共産党、劉少奇を追放
- 10.21 国際反戦デー、新宿騒乱事件発生
- 10.23 明治100年記念式典、日本武道館で開催
- 10.31 ジョンソン大統領、北爆全面停止とパリ会談への解放戦線、サイゴン政府参加発表（拡大パリ会談）

【昭和44年（1969）】

- 1.18 東大、機動隊8500人を導入、占拠学生を實力排除。  
19日安田講堂の封鎖解除、学生631人逮捕
- 1.20 ニクソン、米大統領就任



東大紛争<毎日新聞社提供>

大学紛争（注1）で荒れ狂つてゐるゲバルトと、めくるめくやうな物質的繁栄を生みだしたエネルギーとは、共に日本民族の異常な活力の現はれであるが、それらの現象の底にひそむ共通の虚無感はどこから来るのだらうか。生の根源が崩壊しつつあるといふ実感が否定できない以上、その真因の追求に全力を傾けなければ事態は一步も前進しないであらう。

わづか一年前までは、一部学生生活動家の特殊用語に過ぎなかつた「ゲバルト」（注2）といふ言葉は、すでに日常語として定着してしまつた。この事實は、大学の内包してゐた問題が、常識的な收拾の枠をはるかに越えて、社会全体の問題に広がつてしまつたことを意味する。ある人は、先進文明国に共通した社会の機構化に伴ふ必然的な問題であると断定する。そして世界的なスチューデントパワーとして一般化することによつて、故意に現実から目をそらさうと

する。なるほど先進工業国における機械や機構の支配は、しばしば人間を巨大な社会の一つの部品と化してしまふ。さういふ状況から、トータルな人間性回復の叫びが上ることも当然であらう。しかし、現代日本の大学における、底知れぬ空虚感は、単なる社会機構がもたらした「人間疎外」といふ流行語で片づけられるものではない。むしろ一部の学者や思想家によつて、意図して故意に作り出された価値観の転倒によるものが大きく作用してゐると思はれる。

丸山真男氏の著書『日本の思想』（岩波新書）は、戦後思想の平均的な型を最もよく示してゐる。そこで対置されてゐる「である」論理と「する」論理は、現状肯定の思想と現状変革の思想を意味する。現代人はすべからく現実を行動によつて変革すべしといふ理論であつて、これが「進歩派」の発想の典型であつた。進歩的文化人にとっては、過去は概ね嘲笑と否定の対象以外ではなかつた。日本の歴史は蒙昧な遺制であり、天皇制は万惡の根源であつた。多感な青春の時代に、くりかへしくりかへし自国の歴史の否定面のみが強調し続けられる時、青年の心が空洞化されるのは当然であらう。生の依拠を失つた、その荒涼たる精神から、狂暴な破壊のエネルギーが爆発することも当然であらう。今日の大学紛争の根は、過去

二十年間の徹底した思想教育によるものである。急進的な学生が、現状破壊といふ点で進歩的文化人たちよりもっと「進歩的」になった時、彼らはオロオロして「対話しよう」とくりかへすばかりであった。しかし「対話」を受けつけない非人間的な学生を作ったのは、外ならぬ人間不在の彼らの理論であった。時流に便乗した無責任は白日のもとに暴露され、彼らは自らの生んだ鬼子によって「自己批判」を強ひられたのである。「進歩主義」の神話は無惨に崩れた。今やチェコにおいては「進歩的」とは共産主義への接近ではなく、共産主義からの離脱であるといふ明白な事実さへ生れてゐる。

一月十八日から十九日にかけて、テレビは東大安田講堂攻防（注3）の鮮烈な映像を茶の間に送りこんだ。「基本的人権」を逆用し、絶対に死なないといふ前提で「国家権力」に牙向ふ青年たちのヒロイズムを、世の人は一篇のテレビ・ドラマとして受け取った。まことに世界にも類のない異様な法感覚である。朝日は、万一モスクワ大学でソビエト体制打倒をかかげた学生が、国家権力に公然と挑戦すれば忽ち銃殺であらう、権力がそれほど強くなくて日本は幸ひだと論評した。これもまた問題の奇妙なごまかしである。

棍棒をふるひ、野盗の如く横行する暴徒たち。「独占下の教育や研究はすべてベトナムに

つながる」といふ独断とバーバリズム。それらの行為を黙認ないし公然と擁護する風潮。歴史が一まはりまはって古代に帰ったやうな異様さである。数億にのほる国有財産のゆゑなき破壊が何故に「学生」であるがためにゆるされるのか。大学教授そのものの權威が泥に塗れてしまったのに、何故に大学だけが「聖域」視されるのか。思ふに、代々木系、反代々木系を問はず、大学内のゲバルトを容認する最大の根拠は、大学教授と日本の知識層の中に、未だ根強く残つてゐるマルキシズムに対する負ひ目である。それが脆弱な理論と傍若無人の行為を合理化し、正当化する根拠である。あの機動隊の排除作業の中で、学生の生命は慎重な配慮によつて守られてゐたけれども、投石と火焰ピンの雨の中で、若い警察官は生命を賭けてゐた事実を忘れてはならない。それとも警察官の人権は、権力側であるからないとでもいふのか。学生たちのいふ「自由と平和」の実態を垣間見る思ひがする。

沖縄問題が政治の一つの焦点となつてきた。「蛍の光」の一節には「千島の奥も沖縄も、やしまのうちの守りなり」といふ一句がある。この懐しい小学唱歌が作られた明治十四年の時点において、北千島も沖縄もたしかに日本の領土であつたのだ。その島々は今や異国の統

治下にある。祖国の胸に一日もはやく抱きかかへてやらねばならない。しかし、「沖縄奪還闘争」といふ姿勢で果してその困難な課題が解決できるであらうか。統一した国論なくして圧倒的なアメリカの力の前には全く無力であらう。しかも、基地完全撤去によって生じる軍事力の空白に中共の膨張力が及んで来ないといふ保証はどこにもない。さうなれば弾道ミサイルの砲門はすべて日本本土に向けられるであらう。さういふ可能性を故意に意識から排除した沖縄返還論は力の均衡を崩すことによつて日本の社会を改革しようとする別な意図を持つてゐる。沖縄の人達が、真に独立した日本の主権の下に生活し得るためには、苛烈な国際政治の渦の中で、国益優先の原則を貫きつつ、現実的な一歩一歩を着実に積み重ねる以外にはない。沖縄の人たちの自然発生的なナショナリズムが革命派に先どりされてゐる事實は重大である。

大学、沖縄、安保、この三つは相互に関連しつつ、「安保」へ向つて結集されてゆく。革命勢力は、その力と論理のすべてを傾けて安保破棄、社会主義革命への道をつっぱしるであらう。政権奪取の構想は、コミュニストたちの具体的なスケジュールに組みこまれるほどに

熟して来た。権謀術策を尽して、彼らは挑んで来るであらう。祖国の歴史と伝統の中に生の依拠を見出さうとする者と、それらの徹底的な抹殺によって全く新しい社会を造らうと欲する者と、思想の戦ひは今年から来年にかけて勝敗を決するやまばを迎へるであらう。学問をする者たちが否応なしにその姿勢を問はれる時代が来てゐるのだ。

和歌を詠み、古典を輪読し、友と討論し、自己をみつめ祖国と人生と学問に思ひをこらして来たこの十数年のわれわれの営みは、現実から最も迂遠の如くして、実は現実と最も深くかかはるものであったことを、われわれは確信する。この小冊子にこもる無量の思ひを行間からくみ取って下さるならば、特に紛争の中で思ひ悩んでゐる学生諸君の手がかりの一助ともなるならば、編者として幸ひこれに過ぎるものはない。

(注1 大学紛争) ピーク時、全国大学の内、一六五校がバリケード封鎖等の紛争状態に入った。

理由は些細なことでも、反権力が当時の学生の心を捉へたと言へる。又これらの紛争を牽引したのが従来の左翼組織ではなく、「全共闘」と呼ばれる新たなセクトであったこと

が特徴。

(注2ゲバルト) 暴力を意味するドイツ語。大学紛争に振るはれた暴力行動や、セクト相互の乱闘事件(内ゲバといふ)に限定して使用。後に赤軍派等の国際テロ、仲間同士のリンチによる殺害事件(連合赤軍事件)にまで発展。

(注3東大安田講堂攻防) 昭和四三年(一九六八)東大医学部での登録医制度反対に端を發した無期限ストを解決するために大学当局が機動隊を導入、これに他の学部も反発し、同年六月、各学部自治会が一斉に無期限ストに突入、そのため四四年の東大入試は中止となった。この事態を解決するため、五〇〇人が立て籠もる東大安田講堂に機動隊が突入、学生側の投げる火炎瓶、石等と機動隊の放水、催涙ガスの攻防が三五時間続いた。

第十四回 「合宿教室」 (昭和四十四年・一九六九)

全共闘の闘争が不毛の荒廃しか残し得なかったのは何故か

(昭和四十五年二月一日記)

【第14回「合宿教室」昭和44年8月（阿蘇）参加者数403】

講 師	演 題
奈良女子大学名誉教授 岡 潔	欧米は間違ってる
元侍従次長 木下道雄	宮中見聞談
世界経済調査会理事長 木内信胤	これからの国造——物心両面 の理想は何か

【昭和44年（1969）】

- 2.18 日大文理学部の封鎖解除に機動隊導入（以後、各大学で相次ぐ）
- 5.24 政府、大学紛争を取捨する為に、「大学に関する臨時措置法案」を国会に提出。8.3成立
- 6.29 ベ平連による新宿駅西口地下広場での反戦フォークソング集会に7000人参加、機動隊、ガス弾で規制、64人逮捕
- 7.20 米アポロ11号飛行士、初の月面着陸
- 11.5 警視庁、山梨県大菩薩峠で武闘訓練合宿中の赤軍派53人逮捕
- 11.21 佐藤・ニクソン共同声明、沖縄核抜き72年（S47）返還・本土並み決定
- 12.27 第32回総選挙、社会党50減の大敗、自民党300の勝利、「70年安保」に決着

昨年八月三日、「大学運営臨時措置法案」（注1）は野党の執拗な抵抗を排除して強行可決された。その政治的効果は誠にめざましいものがあり、各大学は相ついで機動隊を導入して封鎖を解除して行った。一〇・二一の国際反戦デーや一一・一六の佐藤訪米阻止の街頭ゲリラは局所的には騒然たる内乱の様相さへ呈したが、おびただしい逮捕者を出して制圧された。急進的な学生組織は潰滅に瀕する状態にまで追いつめられた。十一月二十二日、日米共同声明によつて沖縄施政権返還（注2）がきまり、七二年祖国復帰が確認された。この成果の上に立って行はれた解散、総選挙において自民党は圧勝し、社会党は四十以上の議席を失つて空前の大敗北を喫した。七〇年代の幕明けは政府、与党のペースによつて開かれ、危険は一応回避されたかに見える。政治の次元においては確かに政府は「状況を先取りした」といへる。しかし問題はそれほど簡単ではない。異様な狂躁と明るさの底で、日ごとに病根は深まりつつあるからである。

封鎖が解除された建物に足を踏み入れた人々は、異口同音にその破壊のすさまじさに息を呑むといふ。その徹底的な破壊に費された膨大なエネルギーの源泉が何であるか理解に苦し



早大構内で機動隊と衝突する学生  
〈毎日新聞社提供〉

むといふ。生硬な政治的語彙とあらはな春画の落書にとまどひを感じるといふ。たしかに、そこにはかつての左翼理論を支へた「倫理」は影をひそめ、もつと原始的な、なまの衝動がうごめいてゐる。それは貧困からの脱出、食ふための最低線の確保といふ次元では把握できぬ問題を提出してゐる。反逆する若者たちは、故意に「安定」と「豊かさ」に背をむけて、今の一瞬の生命の燃焼にわれを忘れようとするのである。「人間」であることを教へられなかつた彼らは原始的な「生き物」として自らの存在を確かめようとするのである。

全共闘(注3)の学生が挑戦した対象は「学

問の退廃」であつた。そしてその退廃の根源は「現体制」にあつた。体制下の一切の全否定といふ発想は、究極のところ自己そのものの否定に至り、際限のないニヒリズムの奈落にずり落ちてしまふ。文化が人間の経験の累積であり、学問が持続的な知的活動の集積に外ならぬものならば、それらの一切を否定した精神の砂漠から一体何が生れるといふのか。彼らの「純粹さ」は、現実を根づよく、不断に改革して行くといふ持続的意志を放棄したところに生ずる虚妄のまぼろしに過ぎない。彼らが「学問の退廃」に挑んだ、殆んど生命的な反撥は、彼らの内奥の生命が未だ枯死してゐないことを示すあかしであるが、その克服に示された彼らの思想と行動は言語道断である。進歩的文化人が自ら生み出した鬼子たちによって、面罵され「自己批判」を強要され、「平和と民主主義」といふ護符を泥靴で踏みにじられたのは、誠に皮肉な「歴史的必然」であつた。それは故意に歪曲された歴史の痛烈な復讐であつたといふべきである。

しからばこのやうな「反抗的人間」を作つたものは何であらうか。それは容赦なく個人を部品化して行く現代の機構への抗議であると説明することもできる。マルキストも実存主義

者も現代の学匠たちはしたりげな口つきで「自己疎外」をいふ。そしてそれは先進文明国の必然の現象だと説明する。問題を一般化することによって、責任の焦点をぼかさうとする知識人共通のずるさがある。たしかにそれもあらう。しかし日本の若者の反逆にはもつと作為的な原因がある。それはまさに戦後思想の原点ともいふべき「自我至上」の考へ方である。「すべての人間は平等に創られてゐる」といふアメリカ独立宣言の受動態の表現には、まさしく「全能の神によつて」といふ言葉が自明の前提として省略されてゐる。強烈な自己主張は共通の神への信によつてからうじて均衡を得るのである。「神」を消去した機械的平等観はエゴとエゴの相剋を導き出すだけである。戦後の言論界の指導者たちは「自我」を超えた一切の価値を否認した。就中「国家」と「歴史」は憎悪の対象とされた。国家は悪である、日本の歴史は抑圧の歴史であるといふ風潮の中で、今の若者たちは育つた。かつては日教組は「道徳」の特設に反対を呼びかけたが、大阪教職員組合の自主カリキュラムは、幾つかの徳目の最後を「抵抗」でしめくくつてゐた。永い間、祖先がひたすら献身の対象として来た祖国日本を残酷に否定し、抵抗こそ最高の美德と教へられた子供たちがどんな姿になるか、余りにも自明な結果が現はれたといふべきであらう。破壊に費された尨大なエネルギー

は、青年たちの内心において喪失されたものの逆証明である。日本の青年のエネルギーを狂気に近い破壊の姿でしか現はし得なかつたといふこの悲しい現実を噛みしめて見よう。「断絶」などといふ流行語で流してしまふには、痛ましすぎる現実ではないか。この問題を真に内的に解決できぬ限り、戦後はまだ終りはしないのである。

全共闘の闘争が遂に不毛の荒廃しか残し得なかつたのはなぜか。それは「体制」といふ言葉の呪縛があつたからである。そこに専門的な科学と、人間であることを学ぶ広義の学問との区別はあるにしろ、凡そ学問とは教へる者と教へられる者との魂の接触、交流なくしてはあり得ない。「人格」の問題が欠落したところに学問論のなり立ち得る筈はない。魂ですら体制の所産といふなら、自ら人間の主体性を放棄して、主体性の回復をいふのはナンセンスである。かつて松陰先生は師道の衰退を嘆ひて次のやうに言はれた。

《師を取ること易く、師を撰ぶことつまひら審ならず。故に師道軽し。故に師道を興さんとならば、みだり妄に人の師となるべからず、又妄に人を師とすべからず、必ず真に教ふべきことありて師となり、真に学ぶべきことありて師とすべし》

大学問題を一切の時務論から解き放つて、究極のところまで煮つめて行けば、かういふ簡明なことばになつてしまふ。実に力強く、きびしく、美しいことばではないか。教育の「初心」であり「原型」であるものは、古来常にこの通りであつたし、将来もこの通りであらう。「朝に道を聞けば夕に死すとも可なり」といふ論語のことは、「道を聞く」ことは生命を代償とするに価する喜びであつたといふ意味であらう。真に学問する者のみが、「行動コンプレックス」を克服できるし、行動すべき時に正確な行動ができるのである。ゲバルトを誘発する精神の空洞を、真に補填し得るものは、日本人の根源をみつめる地道な努力以外にはない。大言壮語と増幅された観念語が氾濫するなかで、われわれは終始自立した精神であらうとした。地すべりのやうな解体現象の中で一人一人の「志」がためされてゐるからである。

(注1 大学運営臨時措置法案) 政府、文部大臣が積極的に大学紛争に介入出来るやう求めた法

案。大学自治への介入と野党、学生たちは反発したが、昭和四四年(一九六九)一月から三月にかけての相次ぐ大学紛争の解決の基となつた。

(注2 沖縄施政権返還) 昭和四四年(一九六九)三月、当時の佐藤首相は沖縄返還に関し、

「核抜き、本土並み」の方針で交渉すると表明。同十一月、訪米してニクソン大統領との会談後の共同声明で昭和四七年（一九七二）の施政権の返還を確認した。社会、共産二党は沖繩返還に関し、「核の持ち込みはしない」「基地の規模を本土並みに縮小する」の二点を明文化せよと反対運動を展開した。

（注3全共闘） 全学共闘会議の略。昭和四三年から四四年にかけて全国的に拡がった大学紛争の主体となった運動形態。クラスやサークルなどから自然発生的に生まれた闘争組織。従来の組織にとらはれず、いはばノンセクトのセクトであったことが特徴。

第十五回「合宿教室」(昭和四十五年・一九七〇)

三島由紀夫氏の自決で問はれた「戦後思想」とは

(昭和四十六年四月記)

【第15回「合宿教室」昭和45年8月（雲仙）参加者数491】

講 師	演 題
文芸評論家 小林秀雄	文学の雑感
世界経済調査会理事長 木内信胤	新生日本の精神的歴史的基礎

【昭和45年（1970）】

- 3.14 日本万国博（～9.13）。77か国参加、入場者数延べ6421万8770人
- 3.31 日航機「よど号」、赤軍派学生9人に乗っ取られ、北朝鮮へ
- 4.16 米ソの戦略兵器制限交渉（SALT）、ウィーンで開催
- 6.22 政府、安保条約の自動延長を声明（6.23自動延長、反安保統一行動に77万人参加）
- 7.14 閣議、日本の呼称を「ニッポン」に統一
- 10.20 初の「防衛白書」、自力と米の核で専守防衛強調
- 11.25 三島由紀夫、楯の会会員と陸上自衛隊東部方面総監部でクーデターを訴へ失敗。会員1人とその場で自決

【昭和46年（1971）】

- 3.8 日米繊維問題、業界「自主規制宣言」正式決定（11日ニクソン拒否の声明発表）



割腹自決直前に市ヶ谷陸上自衛隊  
総監部前のベランダで演説する三島由紀夫氏  
<毎日新聞社提供>

「戦後思想」と呼ばれるものは、敗者の政治的計算と、感傷的な贖罪意識の上に組み立てられた一つの仮構であった。進歩的知識人にとって、思想とはわが身を全く傷つけず、良心的

ポーズを満足させる玩弄物ではなかったのか。多くの青年が、虚妄の幻想にとり憑かれて暴走し、やがて現実から手ひどいしっぺ返しを受けて無惨な敗北感を噛みしめざるを得なかったのも、必然のなりゆきであったといふべきである。本物の思想は、時にそれをになふ肉体とその重みに耐へられないほど、重いものであるやうだ。いはばいのちを代償にしなければ、思想の真の成熟はあり得ないのであらう。余りに軽薄に、余りに無痛感に思想が語られてゐたのではなからうか。

昨年十一月二十五日、晩秋の静寂をつき破

るやうに「事件」は起つた。三島由紀夫氏の自決の報は、肉体的な激しい痛覚を伴つて、閃電のやうに伝はつて来た。戦後の日本人がひたすら隠蔽し、抑圧し、故意に回避して来たもの、ある者は「日本の恥部」とまで極言して憚らなかつたもの、「天皇と国家」の問題が一人一人の眼前につきつけられたのである。それこそが個人の生命を捧げて悔いぬ日本の生命であると。

三島氏は「革命の哲学としての陽明学」の中で、大塩平八郎の「身の死するを恨まず、心の死するを恨む」の一語を引き、それを次のやうに註した。《われわれは心の死にやすい時代に生きている。しかも平均年齢は年々延びていき、ともすると日本には、平八郎とは反対に、「心の死するを恐れず、ただただ身の死するを恐れる」といふ人が無数にふえていくことが想像される。肉体の延命は精神の延命と同一には論じられないのである。われわれの戦後民主主義が立脚してゐる人命尊重のヒューマニズムは、ひたすら肉体の安全無事を主張して、魂や精神の生死を問わないのである》と。そしてこの言葉は、氏の最後の檄文の次の部分に、まっすぐにつながつてゆく。《生命尊重のみで、魂は死んでもよいのか。生命以上の価値なくして何の軍隊だ。今こそわれわれは生命尊重以上の価値の所在を諸君の目に見せて

やる。それは自由でも民主主義でもない。日本だ。われわれの愛する歴史と伝統の国、日本だ。

これらの言葉は、職業思想家の口舌の論ではない。氏は自らの生命を代償として、これらの言葉に内容を与へたのだ。「事件」の衝撃の大きさは、氏が虚偽なる「戦後」と刺しちがへて死んだところにある。

「戦後」とは何であったか。第一に物質的富の獲得に、日本人がすべてのエネルギーを傾注した時代であった。その目標が達せられた時、「繁栄の中の貧困」と呼ばれる精神の空洞化がはじまった。第二は個人の生命が至上であり、すべてはそれに従属するといふ断定が自明のこととされた。この立場から見れば、人間が高い価値のために献身するといふ行為はナンセンスである。しかし、自己の生物的生命を防衛することが人間の本能なら、より高い価値への献身もまた、やみがたい人間の本能である。この人間に固有な衝動が抑圧された時、眞の生き甲斐は消えてしまふ。その政治的立場の如何を問はず、「時代の毒」は人々の心に浸透してゐた。三島氏の死は、かういふ「魂」の死滅した時代全体への「諫止」であったと解すべきであらう。この悲劇的な死が訴へるものを、われわれはかりそめに受けとめるべきで

はあるまい。

第十六回 「合宿教室」 (昭和四十六年・一九七二)

「戦後教育」は今こそその無残な成果を問はれてゐる

(昭和四十七年四月記)

【第16回「合宿教室」昭和46年8月（霧島）参加者数302】

講 師	演 題
文芸評論家 村松 剛	世界各国の思想動向からみた 日本思想界の反省
世界経済調査会理事長 木内信胤	世界の転機と東洋思想
国学院大学講師 戸田義雄	物を思ひ、感ずることと生き 甲斐と

【昭和46年（1971）】

- 6.17 沖縄返還協定、東京とワシントンでテレビ調印式
- 8.15 ニクソン、金・ドル交換の一時停止、10%輸入課徴金暫定実施などドル防衛策発表（ニクソン・ショック）
- 8.16 ドル防衛のニクソン演説で、政府、日銀、全経済界大ショック、東京株式市場、市場最大の暴落
- 8.18 政府、国際通貨危機に対し固定相場制から一時離脱し、変動相場制移行決定
- 9.27 天皇陛下、ヨーロッパご歴訪
- 10.25 国連総会、中国招聘・台湾追放案可決（賛成76、反対35）

【昭和47年（1972）】

- 1.27 横井元軍曹、グアム島のジャングルで救出
- 2.19 連合赤軍5人、軽井沢の浅間山荘に管理人を人質に籠城、28日銃撃戦後逮捕（浅間山荘事件）
- 2.21 ニクソン米大統領訪中
- 2.27 米中共同声明（米は台湾を中国の一部と認め、米兵引揚げ確約）

「朝に道を聞けば、夕に死すとも可なり」とは、既に言ひ古された孔子の言葉である。しかし、この淡々たる言葉にこもる異常な決意をくみとることは、それほど容易なことではない。道とは人間が禽獣ではなく、まさに人間であるための正しいありやうは何かといふことであらう。その問を解くためには、生命を賭けても悔いがないといふ、断乎たる、さはやかな宣言である。しかし、教養とは道を身につけることであり、学問とは聞信のよろこびを目指しての精進であるといふ時代は去つてしまった。知識の体系のみが、学問のアルファであり、オメガであるといふ状態の中では、青年は情熱を失つて傍観者となるか、過激なイデオロギーの盲信者となるしかないのである。ゲバルトとポルノの時代だといはれる。歴史の歯車が一サイクル逆転して、原始の蒙昧に帰つたやうな奇怪さである。この底知れぬ退廃さにも、人々にはもはや余り異和感を抱かないやうに見える。内面の空虚とはうらはらの、徒花のやうな文明が、人々の刹那的な生をからうじて支へてゐるからである。

横井庄一さん（註一）がグアム島から二十八年ぶりに帰つて来た。「はずかしながら生きながらへてをりました」といふ第一声とともに。「私は天皇陛下さまからいただいた小銃はちゃんと持つて帰つてまいりました。陛下さまにそれはお返し申し上げます。陛下さまに對



連合赤軍によるリンチ遺体発掘現場  
〈毎日新聞社提供〉

しては、私は十二分にご奉公できなかつたことを、私としては恥ずかしい次第でございます。」  
ここには、天皇に直属した一人の兵士がある。その帰依感が、二十八年の孤独なジャングル  
の生を支へたのだ。かういふ言葉の重みは一切のしたり  
げな進歩的言辭を封殺する。ナンセンスと言はうと、時  
代錯誤と言はうと、天皇陛下への信が彼の魂を支へたこ  
とは「事実」であつた。そして、それは決して狂信では  
なかつた。狂信が二十八年もの永い歲月一人の人間の心  
を支へ続けることはできないからである。天皇や国家と  
いふ個人を越える「価値」のために献身する心情、それ  
はまさしく戦前にあつて戦後には全くなかつたもの  
だ。それが硬化し、イデオロギー化した故に犯した罪  
を糾弾することと、超個人的価値そのものを否認するこ  
とは、全く別の問題である。献身の対象を否認し、抹殺  
することは、人間を個の枠に閉ぢこめることであり、人

問性の名において、無制限な、むき出しのエゴの横行する修羅を許すことにもなる。中共の山村ゲリラ方式を真似て、主婦を人質に軽井沢の山荘に閉ぢこもった「連合赤軍」(注2)なる一派は、説得の母親の乗った装甲車に向つて発砲したといふ。人間の「道」にはづれた、恩愛の情などナンセンスとせせら笑ふ多くの若者を生み出した元凶は誰か。「戦後教育」は今こそその無残な成果を問はれてゐるのである。

二月二十一日、ニクソン訪中(注3)が実現した。昨年の中国の国連加盟以来の異常な中国ブームに更に拍車がかけられるであらう。しかしジャーナリズムの甘い論調とは逆に、国家はおのれの国益のためには何でもするといふ当然のことが実現したに過ぎない。両国とも力を背景にした徹底的な現実主義。狡智と冷静な打算と、確乎とした国家意志の貫徹。さういふ姿勢の見事な成果である。永い革命戦争と権力闘争の中で鍛へぬかれ、生き残つて来た中国の要人たちは例外なく「力」の信仰者である。微笑し、もみ手をし、母国の政府の「軍国主義」を批判する共同声明に喜んで署名する政治家たちを、彼らが対等の交渉相手とする筈がない。身を挺して「内政不干涉」の原則の遵守を迫る政治家が一人もいないのか。危機はまさに深刻である。

(注1横井庄一) 昭和四十七年(一九七二)一月二十四日、グアム島のジャングルの中で、元日本兵、名古屋出身の横井庄一軍曹は現地人に発見救出された。同二月二日日航特別機で帰国、帰国後の記者会見で「恥ずかしながら、生きながらへて帰ってきました」と発言。日本人にさまざまな感慨を呼び起こした。

(注2連合赤軍) 「銃口から政権が生まれる」といふ毛沢東の言葉を信奉する京浜安保共闘と、赤軍派の残党が野合した武闘組織。結成直後から仲間うちの反目から、内ゲバで十二人を殺害、更に軽井沢の河合楽器の保養所「浅間山荘」を管理人夫妻を人質に占拠。この解決のために警官隊との間に十日間に渉る銃撃戦が繰り広げられた。

(注3ニクソン訪中) 昭和四十七年(一九七二)二月、それまで敵対関係にあった米、中が密かに交渉を重ね、電撃的に米中が国交を正常化した。日本には全く内密であったため、俗に「頭越し外交」等と呼ばれ、日本側に多大なショックを与へた。

第十七回「合宿教室」(昭和四十七年・一九七二)

## 平和と民主主義

——日本弱体化と「解体」の原理——

(昭和四十八年三月記)

【第17回「合宿教室」昭和47年8月（阿蘇）参加者数402】

講 師	演 題
経済学博士 山本勝市	日中国交正常化の問題点
世界経済調査会理事長 木内信胤	世界の動きとその解釈
評論家 胡蘭成	大自然の法則と文明

【昭和47年（1972）】

- 5.12 沖縄返還協定発効、沖縄県発足
- 5.26 SALT（戦略兵器制限交渉）、米ソ首脳調印
- 7.7 田中内閣成立
- 9.29 田中首相訪中、日中共同声明に調印、日中国交を樹立（79番目の中国承認国）
- 9.29 台湾、対日断交声明
- 12.30 ニクソン、北爆停止命令

【昭和48年（1973）】

- 1.27 ベトナム戦争終結のための和平協定調印（パリにて）
- 2.13 政府、円の変動相場制移行決定
- 3.2 ベトナム国際会議（ベトナム停戦と和平協定実施を国際的に保障）、12外相調印

「平和と民主主義」といふ、戦後をリードした原理が、「創造」の原理ではなく、「解体」の原理であったことは、誰の目にも明白になった。連合赤軍事件や、テルアビブ空港乱射事件（注1）の主役を演じた青年たちは、その大部分が国民の血税によってまかなはれてゐる国立大学の学生であり、戦後教育の中で育てられた秀才たちであったことは改めて注目されねばなるまい。彼らの出現の原因を独占資本の人間疎外とか、都市化現象とかに求めようとすれば、発想には、知識人特有の巧妙な責任回避の姿勢があらはに見える。それは、まぎれもなく、戦後日本の思想の総体が生み出した必然であった。この「平和と民主主義」といふ原理によつて国家といふ全体が個人といふ最終単位に解体され、殆んど無制限な欲望の解放が、それこそ人間性に忠実な所以だと謳歌されるやうな風土を作り上げて来た。かういふ風潮は、今こそきびしく反省されねばなるまい。「国のいのち」に感ずる能力を培ふことは、いづれの国においても自明な教育の原理であるはずなのに、それが悪であり、反動であるときめつけられる雰囲気支配的であるといふのは、世界で稀有な例外であらう。あれほど「アメリカ帝國主義」を攻撃する左翼が戦後思想のこの核心については、口を緘して語らぬとは奇妙なことである。彼らが「平和と民主主義」の擁護者をもって任ずるのは、日本弱体化のこの原理

が、彼らが意図する独裁体制実現のために有効であるといふ打算以外の何ものでもない。いはばこのスローガンは「独裁と共産主義」といふ中味をつつむオブラートである。おのがじし、むき出しのエゴを主張して、乱世の様相が深まれば深まるほど、そのフラストレーションを政治的エネルギーに組織する機会は多くなる。戦後の占領政策を彼らが「原点」として死守しようとする意図は、全くこの一点にかかつてゐるといつてもよい。青年の心の「飢ゑ」と「甘え」は暴力革命を激発する起動力である。彼らの心の荒廃は一刻も放置することを許されないのである。

昨年一月のニクソン訪中以来、世界政治はもっぱら中国を軸にして動いたやうに見える。中国当面の最大の敵はモスクワであり、中ソ国境線の核ミサイルの砲列である。いはゆる「日中国交回復」(注2)が急がれたのも、「北」が停戦協定締結に追ひこまれたのも、この二つの共産帝国の鋭い対立に原因がありさうである。それにしても、日本人は未だに太平洋戦争は侵略戦争であつたといふ断定的な史観の呪縛から解き放たれてゐないため、特に中国に対しては余りに感傷的な外交感覚が支配してゐるやうである。だが中国は安保に対しては、内政不干渉の立場でとかくの批判はしないといふ。米軍の戦力が対ソ抑制戦力として働く限り、

それはむしろ好ましいといふべきなのであらうか。微塵のセンチメンタリズムも寄せつけぬ冷酷さである。

昨年末の総選挙で共産党の議席が大幅に増大した。プロレタリア独裁の綱領と議会制民主主義との矛盾を、彼らはあらゆる詭弁で糊塗しようとするが、その政治的体質は発足以来毫も変化してゐない。民族主義と結びついた後進地域の共産主義の力は、ベトナムで実験済みだが、青年の心の空白を埋める「民族」の問題を最も効果的に利用してゐるのは、外ならぬ彼らであることは注目されねばなるまい。イデオロギーの対立がいかんにかに大国の戦争介入をまねき、小国を悲劇のどん底に追ひこむかをわれわれはベトナム戦争の教訓から切実に学ぶべきであらう。

(注1)テルアビブ空港乱射事件) 昭和四十七年(一九七二)五月、日本赤軍の三人がイスラエルのテルアビブ空港で自動小銃と手投げ弾で乗客等は無差別殺戮、二十四人が死亡、八十人以上が負傷した。

(注2)日中国交回復) 昭和四十七年(一九七二)七月に成立した田中内閣は、日中国交回復を

内閣の最大課題として掲げこれを実現した。米中国交回復に遅れること七ヶ月、昭和四十七年九月、首相が訪中し国交を樹立した。

第十八回 「合宿教室」 (昭和四十八年・一九七三)

「世界青少年意識調査報告書」にみる  
異常な指数の意味するところ

(昭和四十九年三月記)

【第18回「合宿教室」昭和48年8月（雲仙）参加者数433】

講 師	演 題
文芸評論家 村松 剛	現代の日本と伝統
世界経済調査会理事長 木内信胤	戦後の第二期が始まった—— 脱マスコミ的理解が望ましい

【昭和48年（1973）】

- 8. 8 金大中事件発生（韓国の元大統領候補金大中、東京のホテルから拉致。13日ソウルの自宅に戻る）
- 9. 7 札幌地裁、自衛隊は違法と長沼ナイキ基地訴訟で判決
- 9. 21 日本・ベトナム国交樹立
- 10. 17 ペルシャ湾岸6か国、原油21%値上げ一方的発表
- 10. 29 石油危機の余波から、奈良市でトイレット・ペーパーの買い占め騒ぎ起る。物不足パニック拡大、洗剤、砂糖、塩なども全国に波及

【昭和49年（1974）】

- 1. 9 田中首相バンコク到着、タイ学生の反日抗議デモ
- 1. 15 田中首相インドネシア訪問、ジャカルタ市内で学生らの行動暴動化、日本大使館襲撃
- 1. 26 ベ平連解散
- 3. 10 フィリピン、ルバング島で元陸軍少尉小野田寛郎救出。12日帰国

中東戦争から派生した、いはゆる石油戦争は、ソビエトのアラブ諸国を通じての、自由諸国へのゆさぶりではないかといふ推測を生むほど、先進工業諸国へ強烈なショックを与へた。われわれの達成した巨大な繁栄は、産油国の一方的決断によって、瞬時に壊滅するやうなバベルの塔に過ぎなかつたのだ。一朝有事の際を常時念頭に置いて行動した往時の人々に比して、現代日本人の外交感覚の鈍麻はおほふべくもないのである。

しかし、このやうな可視的な危機とは別に、目に見えぬところで、恐るべき崩壊現象が進行しつつある。昨年七月、総理府青少年対策本部から発表された「世界青年意識調査報告書」は日本の青少年の意識が、世界の青少年の平均的なそれとくらべて、いかに異常で孤立的なものであるかを語る、まことに衝撃的なデータであつた。今、そのいくつかを指摘すれば、まづ性悪説を肯定する者は、アメリカ、イギリス、西ドイツがほぼ一六%前後であるのに、その約二倍の三三%であり、社会生活全般への不満度も、アメリカ、西ドイツの約三五%前後に比して、二倍以上の七四%という圧倒的な高率を示してゐる。更に、国家への不信度ともいふべき指数も、イギリス五三%、アメリカ四八%に比して日本八九%、十八歳から二十四歳といふ人生において最も純粹で多感な人たちの、十人中約九人が国家への不信を表明し

てゐるといふことになる。日本と同じく、徹底的な敗北を蒙つた西ドイツは、わづか一三%といふ低い指数しか示してゐないことを考へると、日本のそれは異常に暗いといふべきであらう。

この暗い指数は、ジャーナリズムと日教組といふ反体制集団によつて、意図的に作り出されたと断じて間違ひないであらう。戦後思想の中で「国家」といふ言葉ほど、不当な憎悪と呪咀の対象にされたものはない。国家とは国家権力であり、打倒すべき悪であると断定するコミュニストが、社会主義国家の権力については、口を緘して語らない。あるいはその矛盾を合理化して全人民を代表する権力であるが故に、資本主義国家の権力とは異質であるといふ。しかし、ソビエトにおけるサハロフやソルジェニーツィンなどの自由思想家への仮借ない弾圧、林彪の死に象徴される中国の血なまぐさい権力闘争などは、社会主義国家の権力の本質を語つて余りがある。とすれば、戦後の一貫した国家呪咀の風潮は、別の強大な国家権力樹立への意図的な布石といふ他はない。

自明のことながら、国家の独立と安全を、他国の公正と信義にまると委ねるやうな甘えが通用するには、国際政局は余りに苛烈である。札幌地裁は昨年九月七日、長沼ナイキ基地

違憲訴訟（注1）において、自衛隊は「戦力」であり、戦力の保持を禁じた憲法第九条に違反するといふ判決を示した。防衛問題は遂に來るべきところに來たといふべきであらう。現憲法の成立事情そのものの曖昧さが、これからも合憲違憲の論争を激化せしめるであらう。しかし、日本海を遊弋するソビエトの艦艇や、タクラマカン砂漠に上る中国の水爆実験の巨大なキノコ雲の存在と、この自衛隊違憲判決との落差に、何の矛盾も感じないやうな人間で日本が充満した時、日本は独立国家として最も重大な防衛の「意志」を喪失したことになりはしないか。

われわれは日本の青年の胸に、国への愛と国への献身といふ、誰に憚ることもない素朴な心情を回復するため、ささやかな努力を続けなければならない。それは一刻の猶予も許されないのである。

（注1）長沼ナイキ基地訴訟　北海道長沼町に「保安林」指定を解除し、自衛隊がナイキ基地（ミサイル搭載機基地）を建設しようとしたことに反発した住民側が自衛隊違憲訴訟を起した。昭和四十七年（一九七二）九月、札幌地裁は自衛隊違憲の判決を下し、日本最初の

自衛隊違憲判決として注目された。その後昭和五十一年、札幌高裁が地裁判決を取消し、昭和五十七年、最高裁は住民側上告を棄却した。

第十九回「合宿教室」(昭和四十九年・一九七四)

## 国際政局の激動

——自由主義国家と社会主義国家における権力の差異——

(昭和五十年三月記)

【第19回「合宿教室」昭和49年8月（霧島）参加者数528】

講 師	演 題
文芸評論家 小林秀雄	信ずることと知ること
世界経済調査会理事長 木内信胤	新しい世界と日本文化
教育文化研究所所長 文博 戸田義雄	「日本のいのち」の人類史的 意義

【昭和49年（1974）】

- 7.7 第10回参院選（7議席差で与野党伯仲）
- 8.8 ニクソン、テレビ・ラジオで米史上初の辞任演説（ウォーターゲート事件）
- 8.15 ソウルで朴正熙大統領狙撃、夫人死亡（犯人は大阪在住の韓国人）
- 8.30 東京・丸の内の三菱重工業本社爆破事件。8人死亡、250余人重軽傷、東アジア反日武装戦線、犯行声明
- 9.14 東京の三井物産本社でも時限爆弾爆発、17人重軽傷
- 10. 立花隆、「田中角栄研究——その金脈と人脈」を「文芸春秋」に掲載。田中金脈への批判高まる
- 11.26 田中首相、辞意表明
- 12.9 田中内閣総辞職。三木武夫内閣成立

一九七四年といふ年は、近來稀に見る国際政局激動の年であつた。三月にはイギリスで政変があり、ウィルソン労働党政権の誕生を見たとはいへ、過半数を制する安定勢力とはなり得なかつた。フランスではポンピドゥー大統領の死に伴ふ保革対決の大統領選挙が行はれ、保守のジスカールデスタン氏が辛うじて勝利を占めたが、社共連合との差は五一%対四九%といふきはどい激戦だつた。この大統領選挙の行はれた五月には、西ドイツで親ソ政策を推進してゐたブランド首相が突如辞任した。側近の秘書が、東独のスパイであるといふ驚くべき事実が発覚したからである。ヨーロッパは石油ショックもからんで、揺れに揺れた一年だつたといふべきであらう。

八月、ウォーターゲート事件（注1）以来混迷を続けてゐたアメリカの政局は、ニクソン辞任といふ最悪の事態に迫ひこまれた。デモクラシー神話のシンボルともいふべき元首を、自らの手で追放しなければならなかつた悲劇の深刻さが想像されるのである。そして、十一月二十六日、金脈問題（注2）によつて田中政権はあつてなく崩壊した。インフレと、三菱重工爆破事件（注3）に象徴されるやうな極度の精神的荒廃を残して。

自由社会が、崩壊の危機を孕んで激動を続けたのに比して、共産圏は一応平穩であつたか

に見える。しかし、内実は必ずしもさうではない。二月十三日「收容所群島」等一連の作品で、ソビエト体制そのものの暗黒面を告発し続けてゐた作家ソルジェニチンは、市民権を剝奪され、国外追放された。その決定は憲法に規定された司法組織を通じてではなく、最高幹部会令といふ、超憲法的強制力の発動によるものであった。社会主義権力といふものの実体を世界の世論の前にさらした象徴的な事件であつた。

一方、中国では本年一月に一九六四年以来十年ぶりで第四期全国人民代表大会が開かれ、新憲法が発表された。その第一条の国家の性格の規定には「労働者階級の指導する労働者同盟を基礎とするプロレタリア階級独裁の社会主義国家」と明記されてある。

国家権力の正統性の根拠は、自由主義国家においては「民意」である。多くの問題を孕むとは言へ、民意による政権交替の可能性は厳として存在してゐる。然らば、社会主義国家の権力の正統性の根拠はどこにあるのであらうか。バートラム・D・ウルフのいふ、レーニンの四つの手品と呼ばれる一片の論理である。すなはち、プロレタリア階級は全人民の代表である、前衛党はプロレタリア階級の代表である、党機関は前衛党の代表である、党指導者は党機関の代表であるといふ論理である。この論理の糸をつないで行けば、党指導者が全人民

の意思の代表者といふことになる。権力者の意思はすべての法の上に君臨する。社会主義国家の権力を支へてゐるものは、かういふ論理の詐術と、秘密警察と軍隊といふ強大な物理力である。大新聞の新憲法讚美の論調は、まことに異常な感覚としかいひやうがない。

今や自由主義諸国は、国家が個人の価値観の問題に介入しないこと、つまり価値の多元性の容認といふ原則と、国家の有機的統一といふ相矛盾する問題を、どのやうに両立させて行くかといふ困難な課題の解決を迫られてゐる。そして、この問題は単に政治の次元でのみ解決できるものではなく、深く文化や人間観にかかはって来るものである。一人一人の価値観がどのやうに多様であらうと、そこに普遍的道德への確信や、共通の文化的伝統に対する畏敬の念が存在しなければ共同体の存立はあり得ないからである。

国際収支が記録的な赤字となり、GNPはマイナス成長を示し始めた。日本人が、物の獲得のために、全エネルギーを傾注した一つの時代ははつきり終わったのである。われわれの合宿教室のいとなみも、かういふ時代の混乱に対するやむにやまれぬ思ひに発したものである。われわれは、日本の青年が、大衆社会の果しない風化現象の中での解体を、拱手して傍観するほど怯懦ではないことを信じたい。

(注1 ウォーターゲート事件) 昭和四十七年(一九七二)六月、アメリカの現職大統領ニクソンの再選委員会の運動員が民主党全国委員会本部に盗聴装置を仕掛けようとして発覚した事件に端を発し、昭和四十九年(一九七四)八月のニクソン大統領辞任まで発展した。アメリカ史上未曾有の政治的スキャンダル。事件名の由来は、民主党全国委本部がワシントンのウォーターゲート・ビル群にあったことによる。

(注2 金脈問題) 昭和四十九年(一九七四)十一月、田中首相が辞意を表明した。田中退陣のきっかけとなった田中首相個人の資産形成にからむスキャンダル事件を言ふ。同年十月、雑誌「文藝春秋」は「田中角栄研究」を掲載、このスキャンダルを暴露した。

(注3 三菱重工爆破事件) 昭和四十九年(一九七四)八月、東京丸の内の三菱重工ビル前で制限爆弾が爆発、死者八人、二五〇余人の重軽傷者を出した。これ以後かうした無差別テロを目標にした企業爆破事件が十件も発生した。

第二十回「合宿教室」(昭和五十年・一九七五)

ベトナム戦争の終結から何を学ぶべきか

——ナシヨナリズムの根源的認識を——

(昭和五十一年三月記)

【第20回「合宿教室」昭和50年8月（阿蘇）参加者数435】

講 師	演 題
文芸評論家 福田恆存	現代の病根——見えざるタブーについて
世界経済調査会理事長 木内信胤	最近の日本の動きは世界の驚きである

【昭和50年（1975）】

- 4.17 カンボジア、プノンベン陥落（政府軍、全面降伏）
- 4.29 米、サイゴン総引揚げ（ベトナム介入終結声明）脱出ヘリ81機、空母40余隻動員
- 4.30 サイゴン政権、無条件降伏（ベトナム30年戦争終結、革命政府全権掌握）
- 8.4 日本赤軍、クアラ・ルンプールの米、スエーデン両大使館を占拠、過激派7人の釈放を要求
- 8.15 三木首相、現職首相として初めて終戦記念日に靖国神社参拝（私人の資格）
- 9.30 天皇陛下、ご訪米（10.14帰国）
- 11.15 第一回先進国首脳会議、仏のランブイエで開催（所謂サミット）

【昭和51年（1976）】

- 2.4 米上院外交委、ロッキード社の「黒い商法」公表（日、独、スイス、西独、北欧などの有力者に総額48億円の賄賂。内、対日工作費37億円）

昨年の国際政局の動きの中で、日本に最も重大な影響を及ぼすものは、サイゴン陥落（四・三〇）によるベトナム戦争の終結であらう。大国の介入による三十年の長い内戦は、北ベトナムの南ベトナム制圧といふ形で終り、ラオス、カンボジャを含めて、タイを除くインドシナ半島の大部分は共産化の運命を免れなかった。われわれはこの厳しい現実から何を学ぶべきであらうか。

その一つは、ある民族が己れの国家を持ちたいといふ願望がいかに強烈なものであるかといふことだ。既に百年前に、父祖の苦闘の中から近代国家を作り上げて来た日本が、余りにも自明な国家の存在を忘れ、呪咀や憎悪の念をもって国家を見る多くの青年を生み出してしまったことに、このあたりで気づかねば、事態はとりかへしがつかぬことになるのではないか。ナシヨナリズムは、ほとんど深層意識といつてよいほど、人間の精神にとって根源的な力であり、それを最大限に利用してゐるのが他ならぬ共産主義者である。一九五四年、ホーチミンがフランス軍を破って共産政権を樹立した時、百万人近い人が南へ脱出したことを思へば、「民族統一」「解放」の美名のもとに、南ベトナムにいかなる事態が進行するか、監視を怠らぬ必要があらう。ベトナム戦争から学ぶべき第二の教訓は、共産主義国家は、情勢い

かんによつては容赦なく国際協定を破るといふ事実である。パリ和平協定の条文を虚心に読めば「北」の協定侵犯は明白であり、米軍撤退によつて生じた空隙に乗じて、十五ないし十八師団、三十万近い正規軍を「南」に送りこんでゐる。それらの大軍は中ソの数十億ドルに上る軍事援助の重火器に装備されてゐた。「北」が正義で「南」は不正義だつたから、「北」の勝利は道徳的にも当然だと説く感傷的文化人の解説が一とき紙面をにぎはせたが、相も変らぬセンチメンタリズムといふほかはない。「北」の勝因は、圧倒的な武力である。社会主義イデオロギーが帝国主義に勝利したといふのは妄想であり、曲論であらう。ソ連も中国も、パリ協定の調印国の一つであり、「北」の条約遵守を監視すべき立場であつた筈だが、もとより中ソはそれほど観念的ではない。日本のインテリ層はマルクス主義のもつ徹底した冷酷さに恐しく無感覚といふ外はない。

さういふ点で、昨年十月二十四・五の両日、朝日新聞とドイツ大使館の共催で行はれた「日独シンポジウム」基調報告における、西独代表の発言はわれわれに多くのことを考へさせた。まづ先進産業社会における「革新」の役割について、ドイツ社会民主党が政権担当能力を持つに至つた原因として、一九五九年のゴータスベルク綱領で「マルクス主義からの意識した

訣別だった」と明快に述べてゐる。また、日本の論壇で横行してゐる「デタント」（緊張緩和）論（注1）とは全く違つた次のやうな発言を聞くこともできた。〈ソ連では、デタント政策の本質をまったく異つた形で、通常「平和共存政策」という表現であらわす。共存による「平和状態」は平和を意味すべきものではなく、戦闘意欲をわき起させるためのものである。

「階級闘争」は世界的規模で進行しなければならぬ。戦略的には、平和共存は利害の調整ではなく、共産側の完勝に至るまでの戦闘と奸智である。日本のジャーナリストの発言が、この徹底したリアリズムの前でいかに間が抜けて聞えることであらう。「松生丸事件」（注2）といひ「覇権問題」（注3）といひ、「北方領土」（注4）といひ、われわれには余程の緊張がなければ乗り切れないといふ感じがする。要は思想的にマルクス主義的発想と徹底して対決しなければどうにもならないのであらう。

われわれが最近の時代風潮の中で最も心痛めるのは、「天皇」および「天皇制」に対する、公然、隠然たる攻撃である。沖縄御訪問の皇太子御夫妻に向つての火炎瓶投擲、未遂に終つたとはいへ、過激派による陛下のお召列車爆破計画など、抵抗こそ最高の美德と教へ込んだ戦後教育の、余りにも当然な一つの帰結であらう。しかし、さういふ状況の中で、九月三十

日から十月十四日まで、半月といふ長期間の御訪米が行はれた。それが、いかなる外交的天才も及ばぬほどの成果を収めたことに対して、今更ながら陛下の無私の御人格と、皇室の持つ文化伝統の深さに心打たるる思ひである。

(注1 デタント) 「緊張緩和」の意味。米、ソの軍拡競争にお互ひに歯止めをかけようとSALT II (第二次戦略兵器制限条約) 等に調印した動きを言ふ。しかし内実は米国の軍事力増強を押しへ込み、その間にソ連の軍事力を増強させようとしてゐたソ連の意図が後にはっきりした。

(注2 松生丸事件) 昭和五十年(一九七五)九月二日、黄海北部で操業中のふくはへなは漁船「松生丸」が北朝鮮の警備艇に銃撃され、乗組員九人のうち二人が死亡、二人が重傷、乗組員とも抑留された事件。

(注3 覇権問題) 日中平和友好条約を締結する際、中国側はソ連を覇権主義国家として名指しで批判する文言を盛り込む様強く要請し、日本側がこれを拒否した事件を言ふ。このため交渉は三年間中断されたが、最終的には特定国を名指ししない一般原則として覇権主

義反対の文言を盛りこむことに留めた。

(注4 北方領土) 日本とロシアは一八五五年(安政二)の日露和親条約で千島列島(クリル諸島)においてはエトロフとウルップの間を国境とすることを定めた。のち一八七五年(明治八)の千島樺太交換条約で北千島は日本領、サハリン(樺太)はロシア領とした。第二次大戦の末期に連合国で取りかはされたヤルタ協定によりソ連は歯舞諸島を占領。一九五一年のサンフランシスコ平和条約により日本は北方領土を放棄させられた。しかし、ソ連の領有は規定されず、日本は歯舞・色丹は北海道の一部として放棄しないことをあきらかにしたが、その後一九五五年の日ソ国交交渉において日本側の南樺太・千島返還論とソ連側の問題解決ずみ論が衝突し、北方領土問題が今日も続いてゐる。

第二十一回「合宿教室」(昭和五十一年・一九七六)

教育、防衛、外交を一貫する「哲学」の回復を

(昭和五十一年三月記)

【第21回「合宿教室」昭和51年8月（佐世保）参加者数372】

講 師	演 題
文芸評論家 村松 剛	日本人の死生観
内外ニュース社長 長谷川才次	もっと根本的に考へ直さう ——主体性の危機
世界経済調査会理事長 木内信胤	「脱ケインズ経済学」の建設

【昭和51年（1976）】

- 4. 5 中国、天安門事件（周恩来追悼の花輪撤去が口実）
- 4. 13 カンボジア、ポルポト政権成立、大虐殺始まる
- 7. 2 統一ベトナム、正式発足（ベトナム社会主義共和国）
- 7. 27 ロッキード事件で田中前首相逮捕（8. 17 2億円で保釈）
- 8. 5 長沼ナイキ訴訟控訴審、一審の自衛隊違憲判決取消し
- 9. 9 毛沢東死去
- 10. 12 江青（毛沢東夫人）ら急進派逮捕
- 11. 15 防衛費をGNPの1%以内とすることを決定

【昭和52年（1977）】

- 1. 20 カーター、米大統領就任

昨年一年間、国内の政局はロッキード事件（註1）によってゆさぶられ続けた。その総決算としての年末の総選挙で、自民党は結党以来始めて過半数を割り、その後無所属議員の入党によって、辛うじて単独政権維持に成功したものの、政情不安は依然として深刻である。

一方、共産党は改選前の議席数の半数にも満たぬ大敗北を喫した。昨年六月、「自由と民主主義」の宣言案を採択し、選挙直前には党綱領に背反する「安保破棄棚上げ論」まで持ち出して、柔軟路線のイメージ定着に躍起になったが、国民の審判は意外にクールであった。これが契機となって、明確にマルクス主義と絶縁した漸進的な革新勢力が結集されれば、硬直した保守政治もあるいは再び活力をとりもどすかも知れない。そのためには、教育や防衛、外交を一貫する「哲学」の奪回が何よりも必要である。「経済」はあくまで当面の重大問題であるが、そのみが国家目標となると、物の豊かさの中で心の飢餓感が深まり、有機体としての国家が、その生命力の衰弱に追ひこまれてゆくことは、日本のみならず、先進工業諸国の現状が雄弁に語ってゐるところである。

昨年五月いはゆる「学テ事件」の最高裁判決が出された。昭和三十六年十月実施の全国中学校一斉学力調査が、教育基本法（註2）一〇条の「不当な支配」に当るか否かをめぐる論

争の決着である。最高裁の判断は（許される目的のために必要かつ合理的と認められる行政介入は、たとへ教育の内容及び方法に関するものであつても、必ずしも、同条の禁止するところではない）といふものであつた。公教育における教育内容に、ある程度行政当局が介入し得るといふことは、自明の常識であらう。この自明の道理の正否の究明に、実に十五年の歳月が費やされたといふ異常さを凝視せねばなるまい。日教組は「倫理綱領」に謳つた革命路線から一步も後退してゐないし、集団の威圧による教育秩序のなしくづしの崩壊は着実に進んでゐる。

教育問題と共に、国家の運命を左右する防衛問題についても、昨年は重要な判決があつた。すなはち八月五日の、いはゆる「長沼ナイキ裁判」についての控訴審判決である。これは地裁段階で「自衛隊違憲」を打ち出した四十八年九月の福島判決をくつがへして、国側の逆転勝訴となつたが、その判決理由は明確な憲法判断を避けたものであつた。自衛隊法やその設置運営は国会や内閣の統治行為であり、司法審査権の範囲外にあるといふ理由である。やがて上告して争はれることにならうが、国家防衛の機構の存在が、合憲か違憲か国論を二分にして争はれるといふ国が世界のどこにあらうか。憲法第九条そのものの当否が、厳粛に問は

れてゐるといふべきであらう。一時の流行語であつた「デタント」といふ言葉も今は誰も使はなくなつた。それは、ソビエトの軍備充実の時間かせぎであつたことは、今や明白となつた。米国の海軍長官が、ソビエトは日本海の制海権を完全に握つたと発言したのは、昨年二月であつた。今年になつて米国の国防長官は、「ソビエトは遂に、第二次世界大戦初頭にドイツ軍が行つたと同様な電撃攻撃を欧州で敢行するに十分な軍事力を持つに至つた」と衝動的な発言をしてゐる。中国が、あの激烈な権力闘争の中でも、水爆を始めとする長距離ミサイル等の巨大兵器の生産に全力を傾けてゐることは周知の通りである。中ソの対立は深刻であり、当分和解は望めさうにないが、その条文中に明白に「日本」を仮想敵国と明記した「中ソ友好同盟条約」が、一九八〇年まで有効なこともまた事実である。かかる緊張の中で防衛意志そのものまで抹殺するやうな教育が、日夜行はれてゐるのである。

かういふ状態の中で、われわれにとつて、ほとんど唯一の心の救ひであつたのは、昨年十一月十日の御在位五十年の式典の挙行であつた。戦前の二十年は神格天皇の時代だからといふ理由で、式典参加を拒否した首長もあつたが、昭和といふ時代が、今上天皇といふ御人格によつて一貫してをり、戦前と戦後で憲法上の字句の表現こそ違へ、国家生活において果さ

れてゐる天皇の現実的機能は寸毫も變つてはゐないのである。

《よろこびもかなしみも民と共にして年はすぎゆきいまはななそぢ》

かういふ歌をよまれる方を、王者としていただくわれらは、幸ひきはまれりといふべきであらう。

(注1 ロッキード事件) 昭和五十一年(一九七六)二月、米上院、多国籍企業小委員会がロッ

キード社の日本政府高官への贈賄を公表。米国のロッキード社が航空機の売り込みに絡んで、日本の首相を収賄したと言はれる戦後最大規模の汚職事件。

(注2 教育基本法) 戦前の「教育勅語」にかはる戦後教育の指標として昭和二十二年(一九四

七)に公布・施行された前文と十一ヶ条からなる教育に関する法律。

第二十二回「合宿教室」(昭和五十二年・一九七七)

革新陣営の内部分裂と険しさ続く国際情勢

(昭和五十三年二月記)

【第22回「合宿教室」昭和52年8月（雲仙）参加者数332】

講 師	演 題
東京大学教授 衛藤 藩吉	世界の中の日本人
世界経済調査会理事長 木内信胤	「新生日本の誕生」とその動因

【昭和52年（1977）】

- 3.26 社会党江田三郎、社会主義協会と対立して離党、  
社会市民連合結成の意向表明（5.22急死、後継  
江田五月）
- 6.10 閣議、「君が代」の国歌扱ひ了承
- 7.10 第11回参議院選挙（自由過半数確保、社共後退）
- 7.22 鄧小平復活、四人組永久党籍剥奪
- 8.12 文革終結宣言（中国共産党十一全大会）
- 9.28 ボンベイで日本赤軍5人が日航機ハイジャック、  
ダッカ空港に強制着陸。同志9人の釈放と身代  
金600万ドル（約16億円）要求。
- 10.1 出国拒否の3人を除いて釈放した6人と身代金  
支払ひ
- 11.19 エジプトのサダト大統領イスラエル訪問
- 11.20 イスラエル国家承認
- 11.30 米軍が、立川基地を全面返還

石油ショック以来の、深刻な円高不況の中で、政策を持たなかった戦後日本のほとんど唯一の政策であった経済第一主義が、明白な破綻を示し始めたことは周知の通りである。最近の国内の政治の動きの中で顕著な傾向の一つは、いはゆる「革新」内部の深刻な対立抗争である。社会党内の協会、反協会両派の感情むき出しの派閥抗争は、きれいごとのタテマエ論のかげにかくれた、この党の古い体質をまざまざと見せつけた。「革新のカナメ」どころではない。彼らの教条主義が、十年一日のごとく唱へてゐる福祉の増大や分配の平等化の原則は、外ならぬ自民党政府によって、大半は達成されてしまった。大義名分を「敵」に先取りされてしまったこの党が、良識ある世の大人達から見捨てられるのは余りにも当然である。かつては「無謬の党」として、青年達の信仰の的であった共産党の凋落ぶりも目ざましい。最近の選挙における、うち続く大敗北をきっかけに表面化した宮本・袴田抗争は、権力闘争の中では永年の同志も一瞬にして反逆者として肅正される、この党の冷酷な家父長的性格を衆人の前に露呈した。彼らのタテマエと現実の落差の大きさは、今や揶揄の対象として、週刊誌のゴシップ欄にぎはしてゐる。昨年七月、ジャーナリズムが、ほとんど既定の事実であるかのやうに報道した「与野党逆転」が、からうじて阻止されたのは、このやうな革命陣

營の内部分裂といふ失点によるものであって、「哲学」を持たぬ保守が緊張感を失へば、均衡は一瞬にして崩れ去るであらう。

国外に目を転じて見ても、状勢は依然として険しい。ソビエトでは、昨年五月、ボドゴルヌイ最高幹部会議長が解任され、コスイギン首相をふくめた、いはゆるトロイカ方式が崩れ、ブレジネフ独裁体制が固まった。十一月七日の革命七十周年記念のパレードに見られる無気味な大型兵器の戦列は、この国が依然として、帝政ロシア以来の巨大な軍事国家であることを誇示してゐた。昨年冬から夏にかけての、力を背景にしたゴリ押しの漁業交渉の経緯を見るにつけても、この隣人の怖るべきしたたかさは、日本人の肌身にしみた筈である。北方領土の問題にしても、非を非として主張し続ける、国民的意志の統一と持続こそ、すべての前提でなければなるまい。

中国では過去十年の文革路線が、「四人組批判」(注1)といふ形で修正されつつある。スターリンの死後の非スターリン化と全く同じ形で、非毛化が進んでゐる。実務家鄧小平の復活といひ、あからさまな近代化路線の宣言といひ、イデオロギー万能の毛沢東主義の空洞化であることは、誰の目にも明らかである。いはば文革路線に乗って権力を掌握して来た華国

鋒体制が、ジャーナリズムが讚美するやうに安定したものであるとは思はれない。だが北京タブーは依然として強い。日中平和条約の問題点「覇権条項」に中国側が固執するのは、日本を対ソ攻守同盟の一員に引きこむためである。イデオロギーが国益に優先するとき、日本はかつての三国同盟の轍を踏むことにならう。

昨年九月末から十月中旬にかけて、日本と西独はほとんど時を同じうして赤軍派のハイジャックを経験した。人質を救出するために、巨額な身代金を送り、拘留中の殺人犯をふくむ凶悪犯を釈放して、犯人に全面服伏した日本政府と、モガジシオ空港奇襲の電撃作戦で犯人を射殺し、人質全員を救出した西独政府と、余りにも対照的な二つの解決法に世界は注目した。この事件は当然、面白半分の比較文化論的評論に絶好の論題を提供した。しかし、この問題の処理の仕方には、戦後の日本人の人間観や価値観が象徴的に表はれてゐた。少くとも為政者は「人命は地球よりも重い」といふやうな、文学青年的発想をきびしく拒否しなければならぬ。武装して国法に挑戦して来る集団に対しては、こちらもいのちを賭けるといふ決意がまづ前提であらう。世界がシユミットの果敢の方に、惜しめない拍手を送ったのは当然である。

原子炉搭載のソビエトの軍事衛星が、突如として地球に落下して来るといふ時代である。文部省は昨年七月二十三日、新学習指導要領を告示した。その末尾で祝日などの儀式の場合には「国旗を掲揚し、国歌を斉唱させることが望ましい」と明記した。遅ればせながらの一步前進と評価しよう。ただならぬ国の歩みの中で、われわれはもう一度初心を確認したいものである。

(注1 四人組批判) 毛沢東夫人の江青等四人が文化大革命を指導してゐたが、昭和四十一年(一九六六)九月、毛沢東死去の後、この四人に対する批判が集中、同年一〇月逮捕に到った。

第二十三回「合宿教室」(昭和五十三年・一九七八)

日中平和条約と不可解なる日本の思想と政治

(昭和五十四年三月記)

【第23回「合宿教室」昭和53年8月（阿蘇）参加者数440】

講 師	演 題
文芸評論家 小林秀雄	感想——本居宣長をめぐって
世界経済調査会理事長 木内信胤	現代の経済学と当来の経済学

【昭和53年（1978）】

- 3.7 米韓合同軍事演習、韓国全土で開始（沖縄の米軍機も参加）
- 3.26 成田空港建設反対の過激派、航空管制室に侵入、管制機器を破壊、開港遅れる
- 5.20 成田空港開港
- 7.18 自民党政審と総務会、元号法制化決定
- 7.24 東京市場、通貨史上初の1ドル100円台突入
- 8.12 日中平和友好条約調印
- 12.7 大平正芳内閣成立
- 12.16 米中、国交樹立発表

【昭和54年（1979）】

- 1.8 カンボジアのプノンペン陥落（11日新政権、人民共和国樹立宣言）
- 1.13 国公立120大学で、初の共通一次試験実施
- 2.4 中国軍、ベトナム領侵入（3.5 撤兵開始）
- 3.26 エジプトとイスラエル、平和条約調印（31年間の戦争状態終結、4.25発効）

昨年度の日本をめぐる国際情勢は、終始中国を軸にして展開されたといふ感が深い。八月十二日、永年の懸案であった日中平和条約が締結され、十月二十三日批准書交換により発効の運びに至ったが、懸念されてゐたいくつかの事項は未解決のまま、残されてしまった。露骨な対日軍事同盟である中ソ友好同盟条約は、一九八〇年まで有効であるが、その廃棄については、遂に政府レベルでの公式確認はなされなかった。尖閣列島（注一）領有権の問題は、昨年四月の中国武装漁船団の領海侵犯の事実も不可解きはまることであつたが、賢明な次の時代の人民の決定に待たうといふ鄧小平発言によつて巧みに棚上げされてしまった。日本側は連絡用ヘリコプター発着場の建設によつて、実効支配をもくろんでゐるが、そんなことで簡単に断念する相手とは思はれない。最後まで両国の合意をさまたげた焦点の「覇権条項」は、特定の国の覇権主義を指すものでないといふ了解のもとに条文の表現こそや、薄められたが、中国のいふ「覇権」がソビエトの国家意志と同義である以上、日本は否応なく対ソ包囲網に組みこまれてしまったのだ。締結後二ヶ月も経過せぬ中にソ越友好協力条約が成立したのは、間髪を容れぬソビエト側の対抗措置であつた。また、国後、択捉両島への兵力投入と軍事基地設営は、戦争末期の混乱期に強奪した北方領土の領有権を永久化しようとする意

図の、傍若無人の表はれでなくて何であらう。日本が行った一つの「選択」は、かくのごとく国際場裡でその責任をきびしく問はれることになった。

壁新聞による毛沢東批判といふ、数年前には信じられなかつた路線の大転換を図りながら、中国はもう一つ、世界の耳目をそばだたせる大きな賭けをやつてのけた。それは、本年一月一日付で米中両国が国交正常化を行ふといふ宣言である。この一月末に、中国要人として初めて訪米した鄧小平は、俊敏果敢な行動によつて、一連の政府間協定の調印に成功した。高エネルギー物理学研究用の五百億電子ボルト加速器の購入、通信衛星の導入など、直ちに軍事科学に転用され、対ソ戦力の強化につながつてゆくであらう。「世界大戦の脅威はソビエトから」といふ彼のキャンペーンが、アメリカの世論形成にどんな影響力をもつか、刮目して注視すべきであらう。

鄧小平訪日によつて、日本人の主体性のなさが浮彫りにされたのは、まことに皮肉である。彼は、日米安保は必要であり、自衛隊は侵略に備へて、もつと戦力を増強すべきだと、極めて、自然に言つてのけた。数年前の「日本軍国主義は日中共同の敵」といふ言辞は、幣履のやうに捨て去られた。教条的な革新派の受けた衝撃ととまどひは大きかつた。これが現実の

政治なのだといふことが、彼らにはまだ充分納得がゆかぬらしい。現在の自衛隊法は法的に不備であり、有事に備へての法的整備が必要であるといふ発言によつて、栗栖統幕議長は更迭された。

日本の思想も政治も、まことに不思議で不可解といふしかない。「有事立法」(注2)と「元号法制化」(注3)の問題は、子孫に対する責任において、明確な結着がつけられるべきであり、その努力を惜んではなるまい。

時代の危機は内攻し、深化してゐるといふべきであらう。青少年はきびしく鍛へられることのかはりに、「競争は悪だ」といふ固定観念によつて教育されてゐる。人間進歩の健康な原動力である競争原理を、教育全体の中にいかに位置づけるか。そのことがなされない限り、国家の活力は次第に衰弱してゆく外はないであらう。学問といふものが、ひたすら自己の栄達的手段にすぎないといふ現状から、いかに脱却してゆくか。そのことが真剣に考へられ行はれない限り、目標喪失に起因する停迷から若者たちは永久に立ち上がれないのではなからうか。

(注1尖閣列島) 八重山群島の北北西およそ一五〇kmに位置し、魚釣島、南小島など五つの島と岩礁からなる無人島。中国は一九七〇年(昭和四十五)十一月、「人民日報」紙上で、日本が台湾、韓国とともに同列島海域を含む大陸棚海底資源の開発を企図してゐるとの非難を行ひ、その後は日本軍国主義復活批判を展開した。

(注2有事立法) 従来、日本には他国から侵略された場合(有事)にどう対処すべきか、法的な根拠がなかった。栗栖統幕議長が職を賭してこのことを指摘した。様々な反発を受けながら、これを機会に「危機管理」としての有事における法制研究が本格化した。

(注3元号法制化) 戦前、元号制定の法的根拠であった皇室典範が戦後廃止され、戦後の新皇室典範には元号制定の定めがない。この為、元号を制定する法的根拠を定めるべく昭和五十三年(一九七八)頃から活動が活発化した。が抵抗が強く昭和五十四年六月に至って成立の運びとなった。

第二十四回「合宿教室」(昭和五十四年・一九七九)

ソ連の世界戦略の脅威と自壊作用が進む国内政治

(昭和五十五年二月記)

【第24回「合宿教室」昭和54年8月（霧島）参加者数268】

講 師	演 題
文学博士・元京都大学教授 高山岩男	精神文化と科学的機械文明と —従来のイデオロギーでは今日 の難問は解けなくなった
世界経済調査会理事長 木内信胤	これからの世界の中の日本 —近刊「新しい健康な経済学」 に触れながら

【昭和54年（1979）】

- 4.18 A級戦犯、靖国神社に合祀
- 5.4 英、女性首相サッチャー内閣誕生
- 6.6 元号法案参院可決、元号法制化成る
- 6.11 インドシナ難民の流出、深刻化
- 6.18 米・ソ、SART II（第2次戦略兵器制限条約）  
調印
- 6.28 第5回先進国首脳会議（東京サミット）開催、  
各国の石油輸入抑制目標を決定した「東京宣言」  
を採択
- 10.7 第35回衆議院総選挙（自民党大敗）
- 12.27 ソ連軍、アフガニスタン政変介入

【昭和55年（1980）】

- 1.2 米、アフガン問題で対ソ報復措置を表明
- 1.10 社会・公明両党、共産党抜き連合政権構想明示

かねてから国後、択捉両島の軍事基地化を急いでゐたソビエトは、根室の鼻先にある色丹島にまで兵力を進出させて来た。北方領土全体の兵力は師団規模にふくれ上り、戦車、火砲、攻撃用ヘリコプターの配備などによって、今や北方ソビエト軍は、島嶼防衛の性格のものでなく、明らかに強襲上陸能力を備へた攻撃的性格のものに変わつてゐる。最新鋭空母ミンクスの極東への回航、第二次戦略兵器制限条約からはづされた、高性能中距離爆撃機バックファイアの極東配備など、極東全域における軍事的主導権を握らうとするソビエトの異常な執念には驚かざるを得ない。ツァー時代以来、少しも変らぬ膨脹主義は、ロシア人の深部にくひ込んだ本能なのであらうか。「有事」は今や目睫に迫つて来たといふ感じである。

昨年六月に東京で開かれた第五回主要先進国首脳会議(東京サミット)で論議の中心になつたのはエネルギー問題であつた。原油のほとんど百パーセントを中近東の産油国に依拠してゐる日本は、今更のやうに、その高度の生活水準を支へてゐる基盤の脆弱さを思ひ知らされた。今や、印度支那半島の大部分は、タイを除いてソビエトの影響下に入ってしまった。マラッカ海峡から東支那海を抜けて来る海域でタンカーを抑へてしまへば、日本の国民生活は数ヶ月で崩壊する。そのやうなことは万々ないといふ前提の上に、泰平の眠りを貪つてゐる

のが日本の現状ではないだらうか。先進工業国の機能は、その活殺の権を中近東諸国に握られてゐるといっても、決して過言ではないであらう。

イラン王制が倒れて、パーレビ国王が出国して十ヶ月、昨年十一月四日、イラン学生はテヘランの米大使館を占拠し、大使館員を人質にした。一部の人質は解放されたけれども、拘禁状態は今も続いてゐる。戦時でも尊重されるべき外交官特権が、公然とふみにじられ、しかも国家権力がそれを支持してゐるといふのは前代未聞のことである。これに対して、アメリカは経済制裁以外に打つ手がない。その国家的威信は地に堕ちた感じである。イランに隣接するアフガニスタンでは年も押し迫つた十二月二十七日、クーデターが勃発、アミン革命評議会議長は処刑された。ソビエトは「友好善隣協力条約」を逆手に取つて、直ちに軍事介入（注一）を開始した。アフガニスタンに投入されたソビエトの兵力は五箇師団、八万から十万と推定されてゐる。ソビエト側はカルマル新政権の派兵要請によると説明してゐるが、もとより詭弁に過ぎない。アメリカは穀物輸出の削減をふくむ制裁措置に乗り出し、国連安保理の撤兵決議を取りつけようとしてゐるが、ソビエトの拒否権の壁にはばまれて動きがとれない。こゝでもソビエトは世界戦略において、着々と先手を打つてゐる。産油国支配の野

望は今や歴然として来た。

かういふ世界的緊張の中で、国内では政治家や官僚の汚職事件が相ついだ。彼らの公私混淆と金銭感覚の麻痺は、国家秩序そのものの崩壊といふ不吉な予感さへ感じさせる。統一地方選挙での保守回帰への流れをつかみ切れず、十月七日の総選挙において、自民党は敗北した。それに続く、首相指名をめぐる一月にわたる権力闘争は、自民党の統治能力の限界を国民の眼前にさらけ出した。受け皿としての社公民連合政権が具体的構想として打ち出されて来た今日、自民党は憲法問題をふくめて立党の原点に立ち帰らなければ、その自壊作用の速度が早められるだけであらう。

ある新聞社が、昨年十二月に行つた現状の若者の意識調査の一項目に防衛意識の集計が上げられてゐた。もし外敵が侵入して来たらどうするかといふ設問に、「戦う」と答へたものは三四パーセント、「逃げる」「降服する」「その時でない」と分らない」と答へたものが、実に六六パーセントを占めてゐる。

この怖るべき主体欠落状況への対処は、一刻の遅滞も許されない。われわれは日本青年の心に、国への熱き思ひの蘇へる日を念じてこの記録を編んだ。

(注1ソ連の軍事介入) 一九七九年(昭和五四)十二月から八九年二月まで、アフガニスタンへの影響強化を企図してソ連が侵攻、軍事占領した事件。ソ連軍は最盛期には一〇万三〇〇〇人を数へたが、アフガニスタンのゲリラ部隊の攻撃が活発化するにつれソ連軍は多大な損害を出した。この侵攻はソ連の経済力を著しく弱める結果となった。

第二十五回「合宿教室」(昭和五十五年・一九八〇)

病根は深まってゐる

—— 教条的な左翼思想の支配からの脱却を——

(昭和五十六年二月七日記)

【第25回「合宿教室」昭和55年8月（雲仙）参加者数431】

講 師	演 題
文芸評論家 福田恆存	人間の生き方・物の考へ方
元外務次官・元駐ソ連公使参事官 法眼晋作	世界の平和に貢献する道 ——国際情勢と日本の対応——

【昭和55年（1980）】

- 5.18 韓国全土に非常戒厳令。5.21韓国光州市のデモ  
隊、全市制圧（5.27戒厳軍鎮圧）
- 6.22 初の衆参同時選挙、衆参共に自民党圧勝
- 7.19 日米など不参加のモスクワ五輪開幕
- 8.14 ポーランドのグダニスクで造船労働者スト
- 8.27 韓国、新大統領に全斗煥就任
- 9.23 イラク地上軍、イラン領内進撃（イラン・イラ  
ク全面戦争）
- 10.9 奥野法相、衆議院予算委で憲法問題に関して52  
年までに主権はなかったと発言、紛糾

【昭和56年（1981）】

- 1.20 レーガン、米大統領に就任、強いアメリカ再生  
強調
- 2.7 初の「北方領土の日」スタート

二月七日が「北方領土の日」ときまつて、今年から政府主催で実施されることになった。根拠は一八五五年(安政二年)日露通交条約締結の日に因んだものであるが、この条約は扨捉、得撫間を国境と定め、樺太を両国の雑居地と定めたものであった。従つて、この日の設定は、得撫以北の島々を放棄することにつながり、むしろ一八七五年(明治八年)五月七日の樺太、千島交換条約締結の日の方が根拠としては正しいのではないかといふ異論も成り立つ。その他終戦直後、ソビエト軍が不法侵入した九月三日を返還要求の記念日とする説も有力で、自民党はこの日を「北方領土実効支配に抗議する日」と決定したと伝えられる。日時の設定に異論を残したまゝの発足とはいへ、「北方」に対する国民感情が一つの方向を与へられたことは評価してよいであらう。事実、なりふりかまはぬソビエトの膨脹主義こそは世界の政情不安の根源であり、その軍事力の尖端が根室の鼻先に迫つてゐるといふ事実には、何人といへども目をふさぐことはできなくなつた。政府サイドでこの日が決定されてから、ソビエトはノサップ岬のすぐ沖合に、艦尾に大型ヘリコプターを搭載した二、〇〇〇噸級の砕氷艦を碇泊させ、露骨な威圧を加へて来てゐるし、プラウダは連日、反日キャンペーンを続けてゐる。その記事の中に「南千島はロシア領」といふ日本人学者の論文の引用があるといふ。戦

後三十六年「島よ帰れ」の叫びも風化して、「島よりサカナ」といふ声が大きくなってゐるともいはれる。問題は主権回復への国民的意志の結集であり、教育によるその意志の持続継承にこそすべてがかげられてゐるといふべきであらう。

人権外交の名のもとにソビエトに譲歩を重ね、屈辱的なイラン人質事件を解決できぬまゝ、に任期を終ったカーターに代つて、アメリカ国民はレーガンを選んだ。一月二十日、レーガンはその就任演説の末尾で、アーリントン国立墓地を指さし、第一次大戦のとき西部戦線で戦死してそこに眠る一人の無名の青年兵士の遺書にふれて次のやうに述べた。

《彼の遺体から日記が見つかったという、見返しには「私の誓い」が書かれ、その下には次のことばが記されていた。「米国はこの戦争に勝たねばならない。このため、私は働き、儉約し、身を捧げ、耐へ抜き、そしてこの戦争のすべてが私の肩にかかっているかのように喜んで戦い、最善を尽くす」と。》

レーガンはこの引用に続けて、国民が一体となり、神の加護があれば、当面の問題は解決可能であると訴へ、「さう信じようではないか。われわれは米国人なのだから」といふ感動深い言葉で演説を結んでゐる。こゝにはリンカーンの「ゲティスバーグ演説」を彷彿させる

戦死者への憶念の情意があり、アメリカの再生へかける悲願が胸にひびいて来る。毎年八月十五日がめぐって来る度にくりかへされる靖国違憲論争（注1）、閣僚が参拝する時に「一人として」と断はらなければならぬわが国との相違を今更のやうに痛感させられる。

青少年非行で、刑法犯に当るものの数が、昨年度は十六万六千人を超えた。その原因としては、先進工業国に共通な、社会的目標の喪失、核家族化の進行、大人の世界の価値観の混乱等々が数へられるであらう。しかし、最大の原因は、教育界や思想界における教条的な左翼思想の支配にある。中国における「江青・林彪集団」（いはゆる「四人組」）の裁判にしろ、ポーランド労働者のストライキにしろ、共産主義政権の実体はあますところなく世界の衆目の前にさらされてゐるのに、教師たちはなぜこの事実の前に目をふさいで、革命への幻想を捨て切れないのであらう。「抵抗こそは最高の美德」と呼号する教師たちの下から「非行」が出て来るのは当然の帰結ではないであらうか。「進歩的」を自認する大新聞が「偏見多い社会科教科書」「目に余る社会主義色」（朝日新聞・五六・一・一二）と書かざるを得ないところまで、病根は深まってゐるのだ。

(注1靖国違憲論争) 敗戦直後の昭和二〇年、占領軍の神道指令で、靖国神社は国と分離され、東京都知事認証の単なる宗教法人となった。その為政府及び地方自治体と、靖国神社との関わり合ひは、憲法の定める政教分離原則に違反するとして、玉串料訴訟、公式参拝訴訟等がおこされた。

第二十六回「合宿教室」(昭和五十六年・一九八二)

敗戦が日本人の心に刻みつけた深い傷「社会主義」志向

(昭和五十七年二月十一日記)

【第26回「合宿教室」昭和56年8月（阿蘇）参加者数353】

講 師	演 題
文芸評論家 村松 剛	歴史に学ぶ——明治維新と現代
国際政治評論家 斎藤 忠	急変する国際情勢 ——祖国日本の明日を憶ふ

【昭和56年（1981）】

- 3. 2 中国残留日本人孤児47人（第一次調査団）来日、  
26人が身元判明
- 5. 1 日米自動車問題決着（81年度輸出台数168万台）
- 5. 8 鈴木首相・レーガン大統領会談で共同声明（日  
米の同盟関係、防衛の役割分担明記）
- 5.10 仏、社会党ミッテラン大統領選出（23年ぶりに  
左翼政権誕生）
- 5.12 鈴木首相、日米共同声明に不満表明（伊東外相  
辞任）
- 5.17 元駐日大使ライシャワー、核搭載米艦船の日本  
寄港や領海通過は常識、日米口頭了解もあると  
発信。日本政府、事前協議制度を理由に核持ち  
込みの事実を否定
- 8.15 鈴木内閣の全閣僚、靖国神社参拝
- 12.13 ポーランドで戒厳令施行（「連帯」弾圧、ワレサ  
氏軟禁）

松陰はその「獄中問答」の中で「太平尚ほ久しかるべし。悲しいかな。」と書きつけてゐる。勿論これは松陰の激しい逆説であつて、妥協と偷安の上なきづかれた「太平」が、国民の精神的活力を摩滅させてゆく現状を痛憤した激語に外ならない。

今こゝに二つの資料がある。一つは総理府の発表した「青少年白書」である。十五歳から二十四歳までを対象としたこの意識調査で、生活に関する満足度は、積極、消極の違ひはあれ、七八・三%の高率を示してゐる。大部分の青少年にとって、現代の生活は快適なのだ。これは経済企画庁が発表した、現在のまゝの成長率が続けば、紀元二〇〇〇年には、日本の一人当りのGNPは、二一、五一〇ドルに達し、アメリカを二二%上まはって世界第一に達するであらうといふ楽天的予想とも無縁ではない。自虐症に罹つた一部の学者の言説とは逆に、今や日本は世界が注目する経済大国にのし上つてしまつた。

もう一つの資料は、昨年末に警察庁の発表した非行少年の数である。五十六年度の刑法犯少年（十四歳—十九歳）の数は十八万七千人に達し、一千人中一八、七人の比率で、成人世代の一千人中約三人に比すると、六倍以上の高率であり、凶悪化、低年齢化が顕著であると  
いふ。

この二つの資料は、戦後が獲得したもの、失ったものを、誠に象徴的に示してゐる。獲得したものは、諸外国が羨望するやうな豊かな物質であり、失ったものは豊かな心である。岡潔先生は、それを「日本の情緒」と言はれた。それは、日本人といふ魚が、その中に住む水のやうなもので、その水が濁ると日本人は死んでしまふとまで先生は極言された。こまやかな人情、自然への愛、気高いものへの献身、総じて日本人の默契であつた美德は、根こそぎに破壊されてゆく。その原因はたしかに、高度成長期以後のすさまじい社会の変貌にもよるだらう。核家族化の現象が、青少年の孤立化を深め、成熟加速現象といはれるやうな心身のアンバランスが、方向を失つたエネルギーを暴発させてゐるともいはれる。価値観の多様化といふ名のもとに、社会の道徳的規制力が急速に弱まつたともいはれる。それは、アルビン・トフラーの言ふやうに、農業社会、産業社会を経て、今や「第三の波」の波がしらが寄せ始めてゐると文明史的に説明することもできよう。しかし、日本の青少年問題には、そのやうに一般化されることでは説明できぬ、特異な原因がある。

それは、敗戦が日本人の心に刻みつけた深い傷である。具体的には戦後の思想界、教育界に宗教的ドグマのやうに根深く喰ひ込んでしまつた「社会主義志向」だと言ひかへてもよい。

ポーランドでは、昨年十二月十八日、ヤルゼルススキの率ゐる救国軍事評議会が、いはゆる「自主管理労組・連帯」の自由化の動きを一挙に圧殺した。かつて、ハンガリー、チェコで行はれたと同じパターン、容赦ない苛烈な弾圧である。「連帯」の指導者の一人は、「ソビエトの政治とイデオロギーの残酷さは病的だ」と言ったといふ。さういふ疑ひない事実を眼前につきつけられながら、社会主義への幻想を捨て切れぬ日本の知識人の心理は、どこか病んでゐるとしか言ひやうがない。一連の教科書論争で、「権力の不当な介入」を呼号する人たちの執筆内容に、果して「イデオロギーの不当な歪曲」はないのか。少し仔細に点検すれば、社会・歴史・国語等の人文系の教科書は、濃淡の差こそあれ、左翼イデオロギーの橋頭堡の観を呈してゐるではないか。歴史や現実の暗部のみをとり出して、さながら祖先の罪悪史、反逆史を教へるやうな教育が、世界に開かれた創造的な人材を生み出す筈はないであらう。

第二十七回「合宿教室」(昭和五十七年・一九八二)

教科書問題にみる日本の異常さ

——外国の干渉によつて書き変へられた日本の教科書——

(昭和五十八年二月十日記)

【第27回「合宿教室」昭和57年8月（霧島）参加者数321】

講 師	演 題
国際政治評論家 斎藤 忠	主権回復の後三十年、いま再び アジアの危機——祖国の明日を 憶ふ
作曲家 黛 敏郎	日本の心
伊勢神宮文教部長 幡掛正浩	日本の伝統文化と祭祀

【昭和57年（1982）】

4. 2 アルゼンチン軍、フォークランド諸島制圧、領  
有宣言（英との間にフォークランド紛争起る）
4. 13 閣議、8. 15を「戦没者を追悼し平和を祈念する  
日」と決定
6. 14 アルゼンチン軍守備隊降伏（英、73日ぶりフォ  
ークランド奪回、英の勝利に終はる）
6. 26 教科書検定で、「侵略」を「進出」に書きかへた  
と報道され問題化
7. 26 中国、教科書検定で正式抗議
8. 3 韓国、教科書検定で抗議
8. 26 政府、教科書問題で政府の責任で是正と発表（27  
日、韓国が受入れ表明）

【昭和58年（1983）】

1. 17 中曽根首相訪米、米紙に「日本列島不沈空母」  
発言、日米責任分担の決意表明
1. 27 米ソ、中距離核戦力（INF）交渉再開

昨年七月二十六日、高校社会科教科書の歴史記述をめぐる中国政府の抗議に端を發し、続いて韓国政府の抗議となり、政府の屋台骨をゆり動かすやうな国際問題に發展した、いはゆる教科書問題（注1）は、一過性の政治的事件として葬り去るには余りに深刻な問題を改めてつきつけた。

それが、五十六年度の検定過程で、「華北侵略」が「華北進出」に「改竄」されたといふ事実無根の誤報に始まったことは、今や周知の事実であるが、その誤報の責任を明確に陳謝したのはサンケイ新聞（五七・九・八）のみで、他は言を左右にしながら、もっぱらその銚先を教科書検定制度そのものの廃棄に向けて来てゐる。あれほど、教育の世界に政治の力が介入することに執拗な批判を続けて来た「革新勢力」が、外国政府の干渉といふ巨大な政治力の介入には、抗議するどころか、援軍の到来とばかり居丈高な政府追求の姿勢を示したのは、問ふに落ちず、語るに落ちたものであった。彼らは自己陣營の強化のためにはいかなる政治力も利用するといふ意味で、独立国家の民として一片の倫理観もない実態をさらけ出したのであった。イギリスがフォークランド紛争（注2）（五七・四・二一―六・一四）において、絶海の孤島の奪回のために国運を賭したのと全く対照的に、日本はなほ「保護觀察国家」で

あることを世界に示したのであった。そもそも、講和条約発効後は、相互の過去の非難を慎むことは国際的常識であり、十七世紀前半、ドイツを中心に戦はれた三十年戦争の終結に当り、ウエストファリア条約（一六四八）には「今日以後、諸国民相互の間には、永遠の忘却あるべし」と明記してある。独立国家の教科書の記述が、外国の干渉によって書き変へられるといふ事態に直面しながら、他人事のやうな反応しか示さないといふ日本の現状は、異常としか言ひやうがないのである。

そのことは改めてわれわれに、戦後日本の出発点であつたあの極東国際軍事裁判（東京裁判）（注3）の意味を考へさせる。ポツダム宣言受諾による降伏は「条件付き」降伏であり、「無条件降伏」は「日本国軍隊の無条件降伏」であることを、武装したM・Pに囲まれながら敢然と主張したのは清瀬一郎弁護士であつた。しかし、さういふ正論が通る由もなかつた。それは勝者の敗者に対する復讐の儀式といはれるやうに、過ぐる「大東亜戦争」に「侵略戦争」といふ烙印を押す為のショーであつたのだから。唯一人、日本の無罪を主張した印度のパール判事の「時が熱狂と偏見をやわらげ、また理性が虚偽からその仮面を剥ぎとつたあかつきには、そのときこそ、正義の女神はその秤の平衡を保ちながら、過去の賞罰の多くに、

そのところをかえることを要求するであろう」といふ、その「時」の到来まで、われわれにはまだ、苦難の永い道が残されてゐるといはなければなるまい。

かういふ背景の中で行はれた第二十七回合宿教室の記録を、例年のやうに世に送ることになった。祖国の来し方、行く末を思ふとき、感慨たゞならぬものがある。一人の「志」を持った青年の育成にすべてがかかつてゐるのである。

(注1教科書問題) 昭和五十七年(一九八二)七月、中国政府は、日本の教科書検定で中国への「侵略」が「進出」に書き変へられたと非難、同八月、韓国政府も韓国植民地支配に関する記述に抗議、是正を要求。日本政府は中、韓の教科書批判に対し、政府の責任で是正することを決定。以後中、韓は日本の高官の歴史認識に事ある毎に非難を加へ、内政干渉がましいことを繰り返してゐる。

(注2フォークランド紛争) アルゼンチンの沖五〇〇キロの大西洋上のフォークランド諸島の領有をめぐる英国とアルゼンチンの争ひ。一九八二年(昭和五十七)四月にアルゼンチン軍が占領、六月に英軍が同島に上陸、戦闘の末英軍が勝利した。八九年一〇月に敵対

關係の終結を宣言、九〇年二月、八年ぶりに国交を回復した。

(注3 東京裁判) 極東国際軍事裁判の別称。昭和二十一年(一九四六)一月に連合国司令官マツカーサー元帥の命令で設立、五月三日開始した裁判。アメリカ、イギリス、中国、ソ連など十一ヶ国が原告で、東条英機ら二十八人が起訴された。判決は東条ら七人は絞首刑、終身禁固一六人、禁固二〇年、同七年各一人であった。

第二十八回「合宿教室」(昭和五十八年・一九八三)

パワーポリティックスがせめぎ合ふ世界と  
国内の「政治倫理」

(昭和五十九年二月十日記)

【第28回「合宿教室」昭和58年8月（雲仙）参加者数327】

講 師	演 題
東京大学教授 小堀桂一郎	古典と私たち
国際政治評論家 斎藤 忠	急変するアジア・太平洋世界 ——祖国の明日への祈り

【昭和58年（1983）】

- 3. 1 大阪地裁、忠魂碑霊祭訴訟で公務員出席は違憲と判決
- 3. 8 レーガン、ソ連は「悪の帝国」と演説
- 4. 3 米の中距離核ミサイル配備に対して西独・英・伊・オランダで約20万人集会
- 8. 21 フィリピン有力野党議員アキノ暗殺（これを契機に反マルコス大統領運動広がる）
- 9. 1 大韓航空機、サハリン沖でソ連戦闘機に撃墜される（乗員・乗客269人不明）
- 10. 9 ランゲーン爆発テロ事件（韓国閣僚4人を含む16人死亡）
- 10. 12 東京地裁、ロッキード裁判の田中角栄被告に懲役4年・追徴金5億円の実刑判決
- 10. 25 グレナダに米軍侵攻
- 12. 18 第37回衆議院総選挙（自民党過半数割れ）

【昭和59年（1984）】

- 1. 5 中曽根首相、靖国神社参拝（現職首相の初詣、戦後初）

この数ヶ月に起きた衝撃的な事件を見ると、この世界は依然としてパワー・ポリティクスのせめぎあふ修羅場だといふ感を深くする。昨年九月一日未明、ソビエト領空内に迷ひこんだ大韓航空機が、サハリン西方モネロン島（海馬島）近くで、ソビエト軍用機スホイ15によって撃墜された。同機の搭載してゐるA A 3 ミサイルによって一瞬にして空中分解したものと推測される。邦人をふくむ二百六十九名の遺体は、その毛髪一本すら還つて来ない。ソビエトは意図的なスパイ行為として非を認めないどころか、居直つて撃墜の正当性を主張さへしてゐる。しかし、自衛隊の傍受したソ連機交信記録の解読から、残酷極まる無警告撃墜であることが世界の眼前にさらけ出された。ソビエトといふ軍事国家の無気味な体質を垣間見させたこの大事件も、邦人の脳裏からはや薄れかけてゐる。そして、「ソビエトは脅威でない」といふ不思議な言挙げが、依然としてジャーナリズムに横行してゐる。

今一つの国際的大事件は、昨年十月九日、ビルマ、ラングーンの国立墓地アウンサン廟で起きた、リモコン爆弾による韓国閣僚ら二十一人の爆弾テロである。この事件の犯人はラングーン港に停泊してゐた北朝鮮の貨物船トンゴン号から上陸した国軍将校三名によるものであり、彼らは犯行現場との往復に大使館の公用車を使用してゐた。外交特権をフルに活用し

た驚くべき犯罪である。そこにはタテマエとしての人道主義などに一顧も与へないやうな、酷薄極まる共産国家の実態がある。

ヨーロッパでは、ソビエトのSS 20に対抗して、アメリカのパーシングⅡ、巡航ミサイルの配備が始まった。東側に国境を接する西独では、昨年六月から十月にかけて、参加者二百万人といはれる反核デモが荒れに荒れた。これらの運動にKGBが深くかかはってゐるであらうことは、素人の眼にも明白であるのに、日本の大新聞は常に「反核」側の味方であった。核バランスにおいて、アメリカを劣勢に追ひこむことが、日本に有利であるといふ判断がどこから出てくるのだらうか。意図的な世論誘導であることは弁明の余地がない。

一方、国内では十月十二日、田中元首相のロッキード汚職に対して実刑懲役四年といふ判決が出た。「政治倫理」といふ曖昧な争点を中心に、解散、総選挙が行はれ、自民党は大敗した。「倫理」が政争の具に供せられるほどに、日本人は墮落してしまったのか。本来、政治といふものは、権力と利害をめぐって展開される人間間の角逐といふ一面を持つてゐるから、さういふ相對世界を超えたものへの忠誠心なくしては「倫理」はあり得ない。キリスト教圏において、元首や大統領の就任式に、神への宣誓が厳粛に行はれる所以であらう。かつ

ての日本の政治家たちは、天皇の無私の御心に応へてゐるかどうかが、「倫理」の基準であつた。天皇の臨席される国会の開会式に、意図的に欠席を続けてゐる共産党には、彼らが愛用する「憲法違反」のレッテルがふさはしい。今や、保革を問はず「倫理」はない。閣僚の資産公開が「政治倫理」とは何とうそ寒い風景ではないか。

第二十九回「合宿教室」(昭和五十九年・一九八四)

日本の現状は異常といふ外はない

——防衛費・教育基本法・建国記念の日——

(昭和六十年二月一日記)

【第29回「合宿教室」昭和59年8月（阿蘇）参加者数302】

講 師	演 題
東京大学教授 小堀桂一郎	国民意識の目覚める時 ——東西思想の対決——
前チェコスロバキア国 駐箚特命全権大使 吉岡一郎	国際問題に対処する日本民族の 使命

【昭和59年（1984）】

- 2.28 社会党大会、自衛隊は適法性もたぬとの運動方針案承認
- 3.19 米、83年経常赤字407億ドルで史上最高と発表
- 3.21 米韓合同演習中の米空母とソ連原潜、日本海で衝突
- 4.7 日米農産物交渉決着（高級牛肉とオレンジの輸入枠拡大など）
- 5.8 ソ連、ロサンゼルス五輪ボイコット表明（東欧13国も追随）
- 6.21 国鉄総裁、国鉄の民営・分割に基本的賛成と初めて明示
- 9.6 全斗煥大統領来日、天皇「不幸な過去は誠に遺憾」と言明

【昭和60年（1985）】

- 1.20 レーガン、第2期就任演説で「アメリカの再生」を強調

ソビエトに於て、アンドロポフ書記長の死去により、チエルネンコ政権が発足して約一年になる。「デタント」は軍拡のための時間稼ぎと割り切つてみた彼らは、国民総生産の一五％前後と推定される龐大な軍事費で遮二無二、軍拡政策を推進した。今や地上軍は勿論、ミサイル・航空機・艦艇等に於て、ソビエトの量的優位は動かしがたいものになった。そのソビエトがこの一月、ともかくも外相レベルの軍縮交渉予備会談に応じたのは、宇宙兵器開発に於けるアメリカの絶対的優位と、平和維持のための「力」の必要を強調するレーガン大統領の圧倒的勝利によることは確実である。平和論者の論調とは全く逆の冷厳な現実がここにある。しかし、中東、アフリカ、南米のいたるところで展開されてゐる悲惨な殺戮は、依然として両超大国の代理戦争の様相を呈してゐる。国家の独立を維持するための「防衛の意志」の養成が全く行なはず、「防衛費」一％の枠の可否（注一）のみが常に防衛論の焦点となつてゐる日本の現状は異常といふ外はないであらう。

昨年八月、臨教審設置法が成立し、「臨教審」は審議を開始した。しかし、その諸改革は「教育基本法」の枠内ではといふのが、政府の基本姿勢である。「臨教審」に先行した「文化と教育に関する懇談会」で、委員の一人であつた京大名誉教授田中美知太郎氏は、「戦後、早急

に制定された教育基本法は、わが国の教育の基本を律する抽象的な法律として、これに適合するものは是、適合しないものは非、といった極めて単純な、過度に法律主義的な議論や風潮をもたらしてきた。よって同法を廃止するか、少なくとも縮小するなり改革することを検討すべきだ」といふ内容の個別意見を提出した。しかし首相側はこの「田中私見」を撤回させてしまった。「臨教審」は学校制度、入試方法、教科内容等に涉つて活発な論議を展開して行くであらうが、制限主権下に、きびしい思想検閲の下に成立した「基本法」の抜本的見直しなくしては、いたづらな制度いじりに終始しないであらうか。深く祖国の伝統に根ざした「開かれた日本人」育成のために今こそ蛮勇が必要な時と思はれるのである。

今年もまた「建国記念の日」がめぐつて来る。従来民間有志の「建国記念の日奉祝運営委員会」によつていとなまれて来た「宗教色の濃い」式典から、「神武創業」と「天皇陛下萬歳」の二項目を削除した式典にするため、政府主導による「建国記念の日を祝う会」が作られた。その式典に中曽根首相は「首相として始めて」出席するといふ。しかし、「建国記念の日」から、「神武創業」と「天皇萬歳」を消去すれば、二月十一日の意味は全く空洞化された「休日」に過ぎなくなる。この日の制定の根柢は、いふまでもなく『日本書記』の卷三、「神武

天皇記」による。近代の歴史学は、那珂通世博士の「紀年作為説」や、津田左右吉博士の「神武天皇非実在説」を生んだ。それは実証的な科学の立場からすれば疑ひのない事実であらう。しかし、千数百年前の古代の人々が、カムヤマトイワレヒコ（神武天皇）なる建国の英雄をイメージし、その伝承を国の原点として、確認し続けて来たことも、紛れのない歴史的事実であった。「神武天皇」はまさに、国民の心の中に生き続けて来た心理的実在であった。国家の祝祭日の意味が、個人を越えた共通の記憶の確認であり、ナショナル・アイデンティティーの確認であるとすれば、日本の建国の日を神話伝承の世界に置くことは少しも不思議ではないのである。「文化の日」から明治天皇を、「建国記念の日」から神武天皇を消去することは、祝祭日の根源の意味を奪ひ、国民から健康な歴史意識を奪ふことにならないであらうか。かつての駐日フランス大使クロデルは、日本人を「貧しいが高貴の民」と言ったといふ。今の日本人は、「富んでゐるが下賤な民」になり下ってしまったのではないか。

（注1 防衛費一%の可否） 昭和五十一年（一九七六）、三木内閣の閣議決定で防衛費をGNPの一%以内にすることを決定、防衛力増強の歯止め目安とされた。その後GNPの伸

びの鈍化や、購入兵器の高額化等の実情にそぐはなくなつてゐたが防衛費増強にアレル  
ギーを示す野党、マスコミの抵抗からこの目安を外すのに十年間の日時を要した。

第三十回「合宿教室」(昭和六十年・一九八五)

## 日本人の魂を抑圧してゐる占領遺制

——北方領土・靖国神社・教育問題——

(昭和六十一年二月五日記)

【第30回「合宿教室」昭和60年8月（阿蘇）参加者数249】

講	師	演	題
元東京大学教授 市原豊太		学問と人生	

【昭和60年（1985）】

- 2.11 中曽根首相、「建国記念日を祝う会」主催の式典  
に首相として戦後初の出席
- 3.10 チェルネンコ死亡（11日、後任書記長ゴルバチョ  
フ選出）
- 5.27 香港の97年返還、正式に発効
- 7.29 ゴルバチョフ、核実験の一方的停止宣言
- 8.15 南ア、人種隔離政策に強硬姿勢表明
- 8.15 中曽根首相、戦後の首相初の靖国神社公式参拝
- 9.5 文部省、国旗掲揚、国歌斉唱徹底通知
- 9.22 G5、ドル高是正に協調介入合意
- 11.19 米ソ首脳会儀（ジュネーブ）、6年半ぶり開催

【昭和61年（1986）】

- 1.8 ニューヨーク株式、1929年大恐慌以来の大暴落

ソビエトでは、ここ数年間に、ブレジネフ、アンドロポフ、チェルネンコと、最高首脳の死があいついだ。昨年三月十日に発足したゴルバチョフ政権は、硬直化した党組織の改革と併行して、果敢な外交攻勢を展開した。ジュネーブにおける米ソ首脳会談の久しぶりの再開もその一環であつた。核不戦の原則確認の共同声明が十一月十九日に発表されたが、ソビエトに於ける「核」の優位、アメリカに於ける「宇宙」の先行といふ、現在の均衡が崩れるやうな具体案は何一つ示されなかつた。今年一月のシュワルナゼ外相の訪日で、懸案の領土問題を中心に、日ソ外相会談が実現したが、その核心部は、一月十九日の共同声明の中の「一九七三年十月十日付の日ソ共同声明において確定した合意」に基き、以後日ソ平和条約締結へ向けて協議を継続するといふ程度にとどまつた。その、一九七三年（昭四八）の合意とは、「戦後未解決の諸問題」を将来の協議の内容に含ませるといふ、曖昧な表現の中で「領土」といふ明確な言葉は故意にぼかされてゐる。北方領土問題が常に、戦争末期におけるソビエトの不法占拠といふ、既成事実の上に展開されざるを得ないのは誠に残念といふ外はない。

北方領土問題へのとり組みは、サンフランシスコ条約まで遡つて、徹底してソ連側の非を追究する覚悟がある。同条約第二条C項は、わが国がその帰属先を決定せず、同条約の調印

国に対して領有権を放棄したのである。その第二五条には、「この条約に調印しない国に対しては、いかなる権利、利益を与えるものではない」と明記されてゐる。調印を拒否したソビエトは、元來北方領土に関する法的権利を持たないのである。現在のパワー・ポリティックスの中で、かういふ主張は空論と言はれさうだが、法的正義を貫くといふ覺悟を放棄してしまつてゐるところに、この問題において終始守勢に廻らざるを得ない原因がある。

占領遺制の圧力がいかに日本人の魂を抑圧してゐるかは、靖国神社公式参拝にも如実に表はれた。「神道指令」から「憲法二十条」へ引きつがれた政教分離原則が、日本人としての自然な慰霊の心情を、常に「合憲」「違憲」といふ別次元の論争の中で攪乱する。自民党は十一月一日、新政策綱領を党議決定し、憲法問題はからうじて「自主憲法の制定は立党以来の党是」といふ表現で決着した。本気で改憲へとり組まぬ限り、山積する問題の対症療法に追はれて、半永久的にモラトリアム国家からの脱却は不可能であらう。

事は教育問題についても同断である。この一月二十二日、臨教審は「審議経過の概要（その3）」を公表した。その第一章の「二十一世紀に向けての教育の目標」の中に、「幅広い国民的合意を基礎に、教育基本法の精神を我が国の教育土壤にさらに根づかせ、二十一世紀に

向けてこの精神をさらに創造的に發展させ、実践的に具体化していくことでなければならぬ」といふ言葉がある。「教育基本法」もまた、最も典型的な占領遺制の一つである。少し注意して読む人には、「真理」とか「正義」とか「人格の完成」とかいふ、概念規定の不可能な、余りにも抽象的な美辞麗句の羅列が見える筈である。かういふ空疎なテーマへ論から脱却して、国民の一人として真に生きる欲びを鼓舞されるやうな言葉が生れて来ない限り、制度の改革のみが際限なくくりかへされるばかりで、教育の世界に真の活力は生れて来ないであらう。

昭和六十年は、いろいろな意味で歴史の節目に当たる年であつた。今や「戦後四十年」であるとともに、人類史的には「二十世紀の世紀末」の時代である。十九世紀の世紀末が、古典的な人格概念の崩壊をもたらしたやうに、二十世紀の世紀末は人間の魂と巨大技術の共存は可能かといふ、深刻な問題をつきつける。スペース・シャトル・チャレンジャーの爆発は、一つの「象徴」の意を帯びて見える。この大きな転換期に、われわれの合宿教室も二十回を迎へた。

第三十一回「合宿教室」(昭和六十一年・一九八六)

政権抗争の具に供せられた民族興亡の根幹問題

——「新編日本史」検定と靖国神社戦犯合祀問題——

(昭和六十二年二月一日記)

【第31回「合宿教室」昭和61年8月（島原）参加者数294】

講 師	演 題
東京工業大学教授 江藤 淳	ことばとこころ
筑波大学教授 村松 剛	日本の外交の歴史と現況

【昭和61年（1986）】

- 2.7 フィリピン大統領選（15日マルコス当選宣言、25日、米の説得で辞任、新大統領にマキノ夫人）
- 3.17 第1次教科書訴訟で国家賠償を求める家永三郎、全面敗訴
- 4.26 ソ連、チェルノブイリ原子力発電所事故
- 4.29 天皇御在位60年記念式典
- 6.4 中国外務省、復古調の日本史教科書批判
- 7.6 衆参同日選挙（自民、歴史的な大勝）
- 8.15 首相、外相ら4閣僚、近隣諸国への配慮から靖国神社公式参拝見送り。16閣僚が参拝
- 9.5 藤尾正行文相の雑誌『文藝春秋』での「日韓併合は韓国にも責任」の発言が表面化。9.8首相、文相罷免、20日首相訪韓し陳謝
- 10.15 アフガン駐留ソ連軍、一部撤退開始

昨年七月六日の衆参同日選挙で、自民党は衆議院で三百議席を越す大勝を収めた。戦後四十年、政治状況を測る一つの座標軸であった「保守」対「革新」といふ図式は崩壊した。しかし政権政党である自民党は、今や何を「保守」するかといふ思想の核を失った。問題はより深刻の度を加へたといふべきであらう。政治の世界に過度に倫理を要求することは無理であらうが、民族興亡の根幹にかかはるやうな重大問題が、政権維持の具に供せられる現状は、何としても黙視しがたい。われわれはその顕著な具体例として、今年の「教科書問題」と「靖国神社公式参拝中止問題」の二つを挙げる事ができよう。

まづ昨年五月下旬から七月上旬にかけての、『新編日本史』検定をめぐる問題である。日本を守る国民会議編『新編日本史』の原稿本の内容を「復古調教科書」といふ一種の予断を与へる見出しで、「朝日新聞」がスクープしたのは今年の五月二十四日であった。五月二十七日一旦検定に合格した内閣本に対して、七月七日の最終決定に至るまで実に四次にわたる大修正が行はれた。その修正は「南京事件」や「安重根」に関する中韓両国の抗議といふ、明らかな内政干渉によるものであるが、それに便乗する形で目に余る自己規制が行はれた。他国の教科書の内容について異議を申し送るといふことは、国際通念に反することであり、

政府はさういふ外圧に対して防波堤の役割に徹することが常識であらう。然るに今回の修正措置は、外務官僚、官房長官、首相といふ権力の中樞が、聖域であるべき教育の世界に公然と介入して来た。そして、この公然たる侵犯を、マスコミは全く問題にしなかった。左翼が外国と通謀して、政府の意図を潰すといふ従来のパターンとは、今回は全く違つてゐた。四年前の、侵略、進出をめぐる教科書問題で、政府は検定基準の一部を変更し、「近隣のアジア諸国との間の近現代の歴史的事象の扱いに、国際理解と国際協調の見地から必要な配慮がなされていること」といふ小川文相談を發表した。この安易な政治的妥協が大きな禍根となつた。

今一つは靖国問題である。中曾根首相は「戦後政治の総決算」「タブーへの挑戦」をかかげて登場した。それは何よりも「東京裁判史観」の破棄を意味してゐた筈である。首相は一昨年八月十五日の終戦記念日に、靖国懇の答申を踏まへて、憲法の政教分離原則に抵触しないといふ前提で公式参拝に踏み切つた。しかし、やがて中国からA級戦犯合祀の事実に対して「不快感」が表明されるや否や、徐々に軌道修正を始めた。秦豊参院議員提出の靖国神社問題に関する質問趣意書への答弁書が閣議決定されたのは一昨年の十一月五日であつた。秦

氏がA級戦犯問題に関連して、「政府は日本による侵略戦争の責任を追究した極東軍事裁判に疑義を有しているのか」とただした点について、「平和条約（サンフランシスコ平和条約）十一条により、わが国は極東国際軍事裁判所の裁判を受諾している」と公式に言明した。この文脈に即する限り、この時点で政府は過ぐる大東亜戦争が「侵略戦争」であったことを肯定したのである。

いふまでもなく、サンフランシスコ条約第一条に明言されてゐる如く、昭和二十七年四月二十八日の条約発効の日までは「戦争状態」であり、東京裁判は戦時下の一方的な軍事裁判であった。従つて刑死したA級戦犯は広義の戦死者である。講和発効の翌年の第十六国会の議決により援護法が改正され、いはゆる「戦犯」の遺族に対して、戦死者の遺族と同一の扱ひがなされるやうになつたことは、国家による「戦死者」としての追認であつた。既に法的にも明確に決着のついた問題が、なぜ今になつて浮上して来るのか。中国が公式参拝を「不快」とするのは、そこにA級戦犯が合祀されてゐるからだ、といふ論理である。過ぐる戦争を「侵略戦争」と断ずる東京裁判史観に従ふ限り、その指導者を合祀した靖国神社参拝は好ましくないといふことになる。首相は中国側の論理に同調してここまで後退した。教科書問

題で過度の自己規制を促したものと根は全く同じである。この占領遺制の呪縛が断ち切られる日はいつであらうか。われわれの任は重く、道は遠いのである。

第三十二回「合宿教室」(昭和六十二年・一九八七)

米ソ両国が軋み合ふ世界の現状から遊離した  
日本の政治状況

(昭和六十三年二月一日記)

【第32回「合宿教室」昭和62年8月（阿蘇）参加者数269】

講	師	演	題
東京大学教授 小堀桂一郎		戦後思想との対決	
元侍従次長 鈴木 一		終戦と天皇陛下	

【昭和62年（1987）】

- 4.1 国鉄114年の歴史を閉じ、分割民営化、JR 6社等発足
- 9.22 天皇、腸通過障害で手術、初の沖縄訪問中止
- 10.19 ニューヨーク株式市場の下落率22.6%、史上最大の暴落（ブラック・マンデー）
- 11.20 東京株式市場、前日のニューヨーク市場での市場最大の暴落を受け、前日比3836円安、下落率14.9%で過去最大
- 11.29 大韓航空機、ビルマ沖で消息不明
- 12.8 米ソ首脳、ワシントンでINF（中距離核戦力）全廃条約調印

【昭和63年（1988）】

- 1.15 韓国、大韓航空機事件を北側の「爆弾テロ」と断定
- 2.2 北朝鮮、日本の大韓航空機事件制裁措置に対抗して第18富士丸乗組員釈放問題の折衝中止



ご退院される昭和天皇 62年10月7日  
<毎日新聞社提供>

八十七歳の御高齢の陛下が腸の病気に罹られ、大手術をされるといふ報道に国民は驚愕した。昨年九月二十二日、森岡恭彦・東大医学部教授執刀のもとに、二時間半に渉る大手術は無事終了した。日本医学の高い水準と国民の熱い祈りが稔った。新年参賀で再びお元気な姿を見て熱いものがこみ上げた。

昨年も多事多難な年だった。特に経済摩擦を中心に、日米間に不協和音が目立った。四月三十日東芝機械のココム違反が明るみに出た。東芝機械の工作機械がソビエトの手に渡り、ソビエト原潜のスクリー音の消音効果を高めたといふ指摘である。事は単に経済問題ではなく、東西軍事力の均衡の崩壊につながる問題だけに、衝撃は大きか

った。ためにする濡れ衣といふ指摘もあつたが、違反の事実は明白であり、米国の反日感情が一気に高まった。更にこれに追ひ討ちをかけるやうに、五月十七日、ペルシャ湾哨戒中の米海軍最新鋭のフリゲート艦スタークが、イラク軍機のミサイルの誤爆を受け大破し、多数の死傷者を出した。以後、アメリカ艦艇がペルシャ湾航行の西側タンカーを護衛することになり、緊張は今も続いてゐる。イランの敷設した無数の機雷が浮遊するペルシャ湾は、いふまでもなく日本へ原油を運ぶシー・レーンの起点である。なぜ米軍兵士の生命を代償に、日本向けタンカーの護衛をしなければならぬのか。かういふ素朴な疑問に答へる具体的な措置を日本政府は何もしてゐない。多少の防衛分担金の支出でお茶をにごすやうでは、国家的エゴと非難されても致し方がない。

十二月八日。奇しくも大東亜戦争勃発の日に当るが、ワシントンにおいて、米ソ首脳会談が行はれ、INF（中距離核戦力）全廃条約が調印された。全面軍縮への一歩前進とジャーナリズムは色めき立ったが、手放して喜ぶのは早過ぎる気がする。まづ、この条約成立によって廃棄されるのは核兵器全体のわづか七%余りに過ぎず、戦略核削減への道はなほ迂余曲折が予想される。日本における楽天的な論調と対照的に、西欧の知識人の反応は極めて冷静で

あった。周知の如く、ヨーロッパにおける東欧共産圏のワルシャワ条約機構の通常兵力と西側の北大西洋条約機構のそれとは、三対一といはれてゐる。そのアンバランスを補つてゐたパーシングⅡの全面廃棄は、西側の絶望的な劣勢を意味する。西欧諸国は国境線を突破して来るソビエトの大戦車群の悪夢に脅かされることにならう。まして、今度の条約の枠外にある戦術核の東西比が約六対一といふ事実を直視すれば、「ペレストロイカ」の微笑戦術にまんまとはめられた気もする。東芝機械と言ひ、ベルシャ湾と言ひ、INF全廃条約と言ひ、米ソ両超大国の力が軋み合つてゐる現実を冷静に見つめる姿勢が今日ほど要請される時代はない。

明治以後、韓国状況は常に日本と深いかかはりを持つて来た。その韓国に関して驚くべき事件が起つた。十一月二十九日、ソウルへ向けて飛行中の大韓航空858便が、ピルマ・アングマン海上空で空中爆発し、百五十人の生命が失はれた。調査の結果、この事件は、ソウル・オリンピック妨害を目的とした北朝鮮金正日の直接指示による、男女二人の北朝鮮工作員による組織的テロであることが判明した。北朝鮮側は例によって「捏造」を繰り返すばかりだが、韓国が国家的威信をかけて立証した事実をくつがへすだけの具体的証拠を何一つ提示し

ない。実行犯の一人、金賢姫キムヒョンヒの供述によれば、彼らは偽造された日本人の旅券を持ち、爆破に利用した携帯ラジオは日本製であり、拉致された可能性のある日本女性から日本語の訓練を受けたといふ。日本が国際諜報機関の基地であることを、これほど明白に語った例はない。それにもかゝらず、巷には「国家秘密法反対」の声が溢れてゐる。何といふ現実感覚の鈍磨だらうか。

政府はこの事件を北鮮の組織的テロであると断定し、北朝鮮制裁四項目を決定したが、それに対する北鮮の報復措置は、第18富士山丸乗組員の釈放に関する一切の交渉の打ち切りといふ通告だった。昨年十一月六日に発足した竹下内閣は、のっけから国際政治の激浪のただ中に投げ出された形だが、ねがはくは中曽根前首相のやうな、靖国神社公式参拝や教科書検定問題における屈従外交の轍を踏まないで欲しい。占領遺制で十重二十重に呪縛された日本人本来の魂の奪回なくては、嘗々として築いた「経済大国」も、世界の孤児と化するであらう。

第三十三回「合宿教室」(昭和六十三年・一九八八)

「昭和」の終焉とその重い遺言

——占領遺制の確認と伝達を——

(平成元年二月一日記)

【第33回「合宿教室」昭和63年8月（島原）参加者数227】

講 師	演 題
東京大学教授 小堀桂一郎	国家と我々——防衛問題について考へおくべきこと
歴史家 児島 襄	東京裁判と東京裁判史観の克服

【昭和63年（1988）】

- 5.9 奥野国土庁長官、日中戦争に侵略意図なし、盧溝橋事件は偶発事件と発言  
中国・韓国の新聞、同発言を批判、野党追究、13日辞任
- 5.15 アフガン駐留ソ連軍、撤退開始
- 7.3 米海軍艦艇、バルシャ湾でイラン航空機撃墜（乗客290人死亡）
- 7.6 リクルートコスモス社の非公開株譲渡、政治問題化
- 9.18 天皇、吐血、容態急変
- 11.8 米国大統領選挙で、共和党のブッシュ候補当選

【平成元年（1989）】

- 1.7 午前6時33分、天皇崩御（87歳）  
皇太子明仁、新天皇に即位、平成と改元（1.8施行）

昭和六十四年一月七日、午前六時三十三分、先帝陛下は永い御闘病の末、全国民の御快癒への祈りも空しく、遂に崩御遊ばされた。それは残照を残して静かに沈みゆく落日にも似た、厳かで静かな死であった。すべての人々がおのがじしの感慨をこめて、この歴史的瞬間に立ち合った。思へば、摂政の時代を含めると七十年に近い史上空前の御在位を、文字通り国と民のために全身心を捧げ尽くされたのであった。皇居前広場を埋め尽した記者の姿を見ると、今もなほ名もなき民の心に「恋闕」の情が脈々と流れてゐることに、改めて深い驚きに打たれる。

既に言ひ古された感もあるが、昭和といふ時代を形容する言葉として、「激動」といふ言葉抜きにしては語れない。制度も、人々の価値観もめまぐるしく変貌した。軍国、平和国家、経済大国といふやうな、一般的な呼称にしても、時代によって人々が思ひ描く国家像が如何に異質なものであるかを示してゐる。しかし、昭和といふ時代を、他の時代から区別し、特定する最大の事件が大東亜戦争とその敗北にあったことは誰も否定できないだらう。われわれはいま、この昭和の終焉といふ劇的な時代に立って、決して忘却の彼方に流し去つてはならない、言はば「昭和」からの重い遺言を確認して置かねばならない。

それは言ふまでもなく、東京裁判と日本国憲法によつて代表される占領遺制の孕む問題を、事実即ち確認し、次代に伝へなければならぬといふ生者に課せられた義務である。

東京裁判とは、法廷の形を借りた、いはば偽装された軍事行動であり、『バル判決書』に言ふ通り「敗戦者を即時に殺戮した昔とわれわれの時代との間に横たはるところの、数世紀にわたる文明を抹殺するものである。かやうにして定められた法律（国際裁判所条例）に照らして行はれる裁判は、復讐の欲望を満たすために、法律的手続きを踏んでゐるやうなふりをするものにはかならない」のであつた。東京裁判とは、世界的な舞台において、日本に侵略国といふ烙印を押す儀式であつた。それは敗戦国が受けねばならぬ苛酷な運命であつたに違ひないが、さういふ自虐史観で自己規制することが、習ひ性となつてしまつたところに、敗北の残した傷の深さを思ひ知らされる。この呪縛が断ち切られる日はいつだらうか。

第二は日本国憲法の問題である。この憲法が帝国憲法の改憲条項に従つて、形式上の連続性を保証してゐるとはいふものの、占領軍権力によつて造られた「押しつけ憲法」であることは弁解の余地のない、明白な「事実」である。なぜさういふ事実を眼をふさがうとするのか。ことは、保守、革新といふやうなイデオロギーの対立以前の、日本人が日本人としての

アイデンティティを持ち得るかといふ精神の深部にかかはる問題である。例へば第一条の天皇を「象徴」とする規定である。国交を有する諸外国は、すべて天皇を「元首」として遇してゐる。しかるに日本の憲法学者は、国民の代表権を持つ者が元首とすれば、それは総理大臣だらうといふ。兒戯に類する愚論といふべきだらう。この憲法が独立国家の憲法として欠陥に充ちたものであることは、当時の実質的制定者であつたアメリカの良識が一番良く知つてゐる。

更に、いはゆる政教分離を規定したといはれる第二十条、特にその第三項「国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない」といふ一文の恣意的解釈である。先帝の崩御に伴ふ御代替りの一連の皇室儀式、踐祚、大喪、即位、大嘗祭等を、「宗教活動」といへるだらうか。それは皇位の永続性と国の永続性を保証する広義の文化的儀礼であり、教団の宗教活動などとは全く別次元の問題である。今やわれわれは新帝陛下のもとで、心を一にしてかゝる難問の解決に渾身の力を傾ける時である。

第三十四回「合宿教室」(平成元年・一九八九)

## 東欧社会主義国家の崩壊

(平成二年一月八日記)

【第34回「合宿教室」平成元年8月（鳥原）参加者数204】

講 師	演 題
筑波大学教授 村松 剛	天皇と日本国家

【平成元年（1989）】

- 2.24 昭和天皇大喪の礼、新宿御苑で実施。163ヶ国の元首級55人・28国際機関の代表、使節等9800人が参列
- 4.15 中共前総書記胡耀邦急死。学生、天安門広場で追悼集会
- 5.13 北京の学生のハンスト開始
- 5.19 戒厳令発令、6.4戦車等で制圧
- 7.23 参院選挙で与野党逆転
- 8.19 東独市民約1000人、オーストリアに脱走。東欧民主化運動の発端
- 10.23 ハンガリー、人民共和国を共和国と改称
- 11.9 ベルリンの壁崩壊（28年ぶり）
- 12.3 米ソ首脳のマルタ会談、新時代の到来を宣言
- 12.22 ルーマニアのチャウシェスク独裁政権崩壊
- 12.25 チャウシェスク大統領夫妻処刑

ペレストロイカ（改革）といふロシア語が今や世界政治の動向を解くキー・ワードとなった。GNPの二〇%前後と推定される龐大な軍事費と、硬直した計画経済によつてもたらされた破局的経済危機、この袋小路を脱出するためには西側の資金と技術の導入は不可欠である。その窮余の一策だったといへる。ソビエト体制の中核である憲法第六条の「党の指導的役割」をいづれば削除せざるを得ないとところまで状況は切迫してゐる。かういふ現状が、長い間ソビエトの軍事力とイデオロギーの輓に呻吟して来た東欧諸国に影響を及ぼさぬ筈はない。昨年から年末にかけての、民主化へのドミノ現象は、まことに戦後世界政治史における瞠目すべき大事件であつた。

変革の動きは、九月、ポーランドにおける自主労組「連帯」主導内閣の発足によつて始まつた。続いて十月には、ハンガリー社会主義労働者党が共産主義を放棄して社会党となり、国名を「ハンガリー人民共和国」から「ハンガリー共和国」へ変更した。一九五六年のハンガリー動乱がソビエトの大戦車群に鎮圧されてから三十三年目である。続いて、住民の西側への大量脱出が続いてゐた東独で、ホーネッカー議長が辞任に追ひ込まれ、十一月九日、東西対立の象徴であつたベルリンの壁が消滅した。この第一報が西独国会に入った時、審議が一

時中断され、与野党の議員は一斉に起立して、「祖国ドイツに統一と正義と自由を」に始まる国歌の大合唱になった。聞くだにまなこうるむ劇的事件であった。十一月に入ると、ブルガリアを三十五年間支配したジフコフ体制が崩壊した。チェコでは各地に広がってゐた反政府デモが、首都では二十万人にふくれ上り、ヤケシユ書記長は退陣した。一九六八年、人間の顔をした社会主義を標榜し、「プラハの春」といはれた自由化の動きは、ワルシャワ条約機構の戦車軍団に無残に蹂躪された。その軍事介入は誤りだったとゴルバチョフは自己批判をした。当時の指導者ドブチェクの復権が報じられてゐる。最後まで頑強に改革を拒み続けたルーマニアは六万市民の流血の犠牲の上に、辛うじて自由化への道を開いた。十二月中旬の反政府デモの暴発から、チャウセスク体制の崩壊、大統領夫妻の処刑まで、十日余りの衝撃的展開となった。国号から「社会主義共和国」が削られてルーマニアとなった。中国と北朝鮮の孤立化は益々深まってゆくだらう。

十二月二日、マルタ島における米ソ首脳会談は、超大国による世界の分割支配、いはゆるヤルタ体制の終焉を告げた。情報や経済の面で、国境を越えた普遍化の現象が広がってゆく一方で、各国はそれぞれに固有な体制と哲学の選択を迫られてゐる。ひるがへって国内事情

に眼を転ずると、あふれ返る物と金の陰に、荒涼たる風景が広がってゐる。諒闇の年であるにもかかわらず、政界には汚職やスキャンダルが続発した。保守すべき哲学を失った自民党は、利権集団に墮してしまつた。敵失に乗じた社会党は、参院で議席数を伸ばしたものの、現行規約前文冒頭には「社会主義革命を達成し」とか、「労働者階級を中核とし」とかいふ文言が明記されてをり、紛れもなくマルキシズムを基盤とする階級政党である。政界の底流は、東欧の自由化とは逆方向に動いてゐる。保守の墮落、革新の偽善、緊張を失つた民族は、今や再生か没落かの岐路に立つてゐるといつても過言ではない。

本年秋には第百二十五代今上天皇の、即位の大礼と大嘗祭が行はれる。踐祚、改元に続く皇位継承儀礼の最後の重儀であり、民族の再生はこれらの重儀の齋行に賭けられてゐる。特に憲法の政教分離条項をテコとして、大嘗祭を「皇室の私的行事」とする言論とは容赦ない戦ひを覚悟すべきであらう。今必要なことは、三島由紀夫氏が言はれた「文化にとって最も大切な秩序と、政治にとって最も緊要な変革とを、つねに内包し保証したナショナルな歴史表象」としての天皇の御存在の確認であらう。

Ⅱ 〔補〕「合宿教室」の講義から一篇

第三十四回「合宿教室」(平成元年・一九八九)

## 昭和の精神

——「悲劇」の時代——

昭和の終焉

昭和の精神

昭和史回顧

戦後思想の総括

## 昭和の終焉

私はけふ「昭和の精神」——「悲劇」の時代」といふ副題をつけましたが——といふ題でお話し致しますが、昭和天皇の崩御によって昭和史といふものが一つの完結した時代として私たちの前に存在する、さういふ時代になりました。一つの時代が終るといふことがどういふ意味を持つのか、あるいはその時代の中に生き死にしてゐる人にどういふ深い思ひを湧き立たせるものかといふことは、今度の陛下の崩御とそれに続く御大葬で十分感じられたと思ひます。皆さんは自分の所属してゐる国家の元首——陛下は法的な規定はともかく、実質的には元首と思ひますが——が亡くなられるといふ劇的な瞬間に立ち会はれたわけです。生涯に何度もない劇的な一つの瞬間を体験されたといふことです。

最初の挨拶の時、運営委員長の長澤君が「経験」といふことを言ひました。小林秀雄さんは「経験といふものは、対象とのつびきならぬ関係を結ぶことだ」といふやうに言つてをられます。つまり、それは自分の心の外側を通り過ぎて行くものではなくて、心の中に深く食ひ込んで来ることによつて、始めて経験といふものになるのです。皆様方は、さういふ意味



葬場殿に向かふ昭和天皇の葱華輿そうかれん 平成元年2月14日  
＜毎日新聞社提供＞

において生涯に稀有な経験をなさったのではないでせうか。

私は、娘婿が東京の報道関係にゐるものから、一月七日は七時頃に娘から電話がかかってまゐりまして、「お父さん、陛下が亡くなられましたよ」といふ知らせを聞きました。その時私は電話の受話器を握ったまま絶句してしまひました。そして二月二十四日のあの御大葬の日を迎へました。私は轎車じしや——お柩をのせた車——が発進するところから、テレビの前に座って画面を見つめてをりましたが、涙がとめどなく流れてどうしやうもありませんでした。やがて新宿御苑で葬場殿の儀が始まりましたが、その時新帝陛下が切々

と御誄おんらうを述べられました。誄といふのは、昔の読み方では「しのびごと」とも申しますが、奉悼の辞と申しますか、追慕、追悼のお言葉です。私はこのお言葉を聞きながら、実にお心のこもった稀有の名文であると思ひました。今までの誄といふのは、硬い漢語調で述べられておりましたが、これは平易な口語文でございますが、その中に、子として父君を仰がれる哀惜の情がまことに深く表現されてをりました。

明仁謹んで、御父昭和天皇の御霊に申し上げます。

崩御あそばされてより、哀痛は尽きることなく、温容はまのあたりに在ってひとときも忘れることができません。櫛しん殿でんに、また殯宮ひんきやうにおまつり申し上げ、靈前にぬかづいて涙すること四十余日、無常の時は流れて、はや斂葬れんさうの日を迎え、轎車じしやにしたがつて、今ここにまいりました。

顧みれば、さきに御病あつくなられるや、御平癒を祈るあまたの人々の真心が国の内外から寄せられました。今また葬儀にあたり、国内各界の代表はもとより、世界各国、国際機関を代表する人々が集い、おわかれのかなしみを共にいたしております。

皇位に在られること六十有余年、ひたすら国民の幸福と世界の平和を祈念され、未曾有の昭和激動の時代を、国民と苦楽を共にしつつ歩まれた御姿は、永く人々の胸に生き続けることと存じます。

こよなく慈しまれた山川に、草木に、春の色はようやくかえろうとするこのとき、空しく幽明を隔てて、今を思い、昔をしのび、追慕の情はいよいよ切なるものがあります。

誠にかなしみの極みであります。

私はまだ後に続くのではないかと思つてをりましたが、こゝでお言葉は終わりました。最後の数行のお言葉はひたひたと胸にしみ込んで来るやうに思はれました。

私は漱石を専門に勉強してをりますが、一番印象の深い作品は『こゝろ』の一篇だらうと思ひます。『こゝろ』の主人公は「先生」と呼ばれる人ですが、その先生が日清戦争の戦死者の未亡人の家に下宿します。時代は丁度明治三十年くらゐでせうか。そこにお嬢さんが一人ゐて、先生は心を惹かれてゐます。先生にはKといふ親友がゐて、同郷の秀才ですが養家から義絶されて貧乏に苦しんでゐます。先生はKを引き取つて人間的に暖かい世界を味はせ

てやらうとします。ところが、非常にストイックだったKもまたお嬢さんに心を惹かれるやうになります。いはば三角関係が成立します。結局先生がお嬢さんと結婚することになって、Kは失恋をして自殺をしてしまひます。先生は生涯そのことに罪の意識を感じながら、いつかはKへの贖罪のために、自分も死なうと決意して生きてゐるのですが、その契機が、明治天皇の崩御であり、それに続く乃木大将の殉死であつたのです。有名な次の部分です。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく胸を打ちました。私は明白あかつさまに妻にさう云ひました。妻は笑つて取り合ひませんでした。何を思つたものか、突然私に、では殉死でもしたら可からうと調戯からかひしました。

私は妻に向つてももし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積りだと答へました。／＼それから約一ヶ月経ちました。御大葬の夜私は何時もの通り書齋に坐つて、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知にもなつてゐたのです。後で考へると、

それが乃木大将の永久に去った報知にもなつてゐたのです。私は号外を手にして、思はず妻に殉死だ〜と云ひました。

さういふやうにして、乃木さんの殉死をきっかけにして、先生は長い遺書を「私」といふ若い語り手に残して、明治に殉じてゆくわけです。私は『こゝろ』といふ作品は、漱石がその中で育ち、その中で彼の全人生を燃焼させた、その明治といふ偉大な時代に対する鎮魂の歌であるといふやうに理解してをります。私は先帝崩御の体験を通して、始めて漱石の悲しみを追体験できたと思つてをります。

### 昭和の精神

漱石は「明治の精神」について、「明治の精神は天皇に始まり天皇に終つた」と言つてをります。別のところで「自由と独立と己れとに充ちた現代」といふ言葉が出て来ます。自由といふのは分ります。独立といふのは個人の独立であると同時に、国家の独立といふ意識がふくまれてゐます。己れとは果敢な自己主張を意味するのでせう。明治といふ時代は個人

が自己主張しただけではない。国民が列強に対して強烈に自己主張をした時代でもあった。さういふ意味で、非常に鮮明な国家像を持った時代であり、われわれはそれを一元的に把握できる時代であったと言へるでせう。

ところが、昭和といふ時代は非常に複雑で、一元的に把握しがたい時代です。例へば通俗的な呼称ですが、戦前は「軍国日本」でした。戦後は「平和国家」とか「文化国家」とか言はれました。これも、戦前は軍事国家であり、武に偏した時代だといふ前提に立った奇妙な呼び名です。そして、大体昭和四十五年の三島由紀夫さんの自決事件以後の時代は「経済大国」と呼ばれてゐます。これらの呼称そのものが、価値観の激変を示してゐるわけで、「昭和の精神」といふものを抽出するのは極めて困難です。

昭和天皇には、敗戦の翌年の歌会始に次のやうな御製があります。

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

また、昭和六十三年、御病気で倒れられる直前、那須の御用邸で詠まれた実質上の御辞世とも思はれる次の御製があります。

あかげらの叩く音するあさまだき音たえてさびしうつりしならん

この二首の歌を踏まへて論じられた江藤淳氏の文章は、先帝崩御に際して書かれた多くの文章の中で、とりわけ心に沁むものでした。

“思えば「昭和」という時代は、悲愁に満ちた時代であった。戦前が戦争と窮乏の「昭和」で、戦後が平和と繁栄の「昭和」だったのではない。戦前も戦後も、「昭和」は一貫して悲しく、その悲しみを「ををし」くにならないながら、陛下は見事に皇統を維持された。”

「昭和の精神」といふものを、この文章の中から探るとすれば、「悲愁に満ちた時代」、「昭和は一貫して悲しい」といふやうなところにあるのではないでせうか。物や金があり余って、

レジャー・ブームで遊び呆けてゐる現在だけを見ると、まことにめでたい時代のやうですが、六十余年を通してみると、誠に悲劇的時代だったといふべきでせう。

なぜ悲しい時代であるかといへば、それは言ふまでもありませんが、昭和二十一年における敗戦といふ経験があつたからです。その傷痕は至るところにまだなまなましく残つてゐます。八月になると、各新聞の紙面は、「反戦平和」の大合唱に飾られますが、その多くは戦死者を政治に利用してゐるとしか思はれません。無名の庶民は黙つてその悲しみに耐へて来ました。こゝに一つの資料があります。靖国神社にお祀りしてある田中肇、田中豊といふお二人のお祭神にそのお母様の田中三代子といふ九十歳になられるおばあさんが、恐らく遺族年金を貯められたであらう二十万円のお金を同封して送られた手紙があります。御祭神のお二人の息子に呼びかけるやうに、漢字とカタカナで書かれた、たどたどしい便り、その写真版が『靖国』に載りました。

平成元年四月十一日カイト。田中肇、田中豊、母ハアイニキマシタヨ。貫工門モ、アイニキマシタ。ソレカラ、アイニ、イコウカト、オモテオルウチニ、母ハ、ピヨウキニ、ナ

ツタノデ、アイニイクコトガ、デキナクナタノデ、イルシテネ。アノトキハ、メイヨノセンシデシタガ、母ハ、カナシカタデス。肇豊ヤスラカニ、ネブテオクレ。母ハ、ハヤク二人ノ、トコロエイキタイガ、ジミヨウバカリハ、ドウシヨウモデキンノデ、母ハジミヨウガ、アルカギリガンバリマスノデ肇豊オウエンシテネ。ジミヨウガナクナタラ、イツデモヨイカラ、ラクニ、イケルヨニ、マモテ下サイヨ。母ハカズエノ、九十才ニ、ナリマシタヨ。コノテガミガ母ガ、アイニキタ、シルシデス。センシシタミナサン、ゴクロサマデシタ。ヤスラカニネブテ下サイ。キヨウダイ皆元気デスヨ。二十万円寄進サセテ、イタダキマス。マコトニ、スミマセンガ、肇豊ニ、コノテガミオ、ヨンデキカセテヤテ下サイ。オネガイシマス。母ガ長生ガデキタノモ、二人ガマモテクレタトオモイマス。母カラオレイオイマスヨアリガトウ。スコシデスガナニカノ、タシニシテ下サレバウレシイデス。

### 靖国神社

恐らく渾身の力をこめて書かれたのでせう。私はこれを読んで、涙がとまりませんでした。私は弟が祀られてをりますので、先日靖国神社にお参りしましたが、社内を清掃してゐた老

人たちが、「僕らももう先は長くないけれども、公式参拝をしてもらはないと、あの世に行つて戦友たちに申し訳がない」と言つてをりました。靖国神社問題が、慰霊、鎮魂といふ原点を忘れて、政争の具に供せられてゐるといふ現実がある限り、戦後は終らないと言ふべきでせう。

## 昭和史回顧

昭和天皇は明治三十四年のお生れですが、西暦に直しますと一九〇一年、二十世紀の最初の年に当ります。大正十年、大正天皇が御病気がちであつたため摂政になられます。皆さん御自分の年令と比べて下さい。二十一歳で国政を荷はれたわけです。その頃から、アメリカやイギリスが日本の海軍力に脅威を感じ始めます。日露戦争頃までは両国は日本の友好国でしたが、国際政治の中で利用価値がなくなると、次第に敵対関係に変化して来ます。そのはしりがワシントン軍縮会議だつたわけです。大正十二年、関東大震災。大正十四年治安維持法の成立といふやうに、内外ともに危機的状况が露呈して来ます。昭和期を通じて思想界の底流となるマルクス主義が力を得て来るのもこの頃からです。大正十五年も押し迫つた十二

月二十五日、大正天皇は崩御になり、即日踐祚、昭和元年は一週間といふ短かい期間でした。陛下は二十六歳でした。

昭和三年、御即位の大礼が行はれた年、張作霖といふ満州の実力者が、関東軍の河本大作といふ大佐によって爆殺され、大陸の風雲が急になって参ります。続いて昭和五年、ロンドン軍縮会議。翌六年九月十八日、満州事変が始まります。七年、上海事変。この年五・一五事件が起り、青年将校が重臣を暗殺するといふ軍部のクーデターが始まります。翌八年、日本は国際連盟を脱退して、次第に孤立化を深めて行きます。昭和十一年、陛下が三十六歳の御時に二・二六事件が起ります。これは以後の日本の進路を変へるやうな大事件でしたが、当時中学生だった私などは、青年将校たちが純一な思ひで国家の革新運動をやつてゐるのだといふ肯定的な評価をしてゐました。軍の上層部も、武装集団の反乱を鎮圧するだけの明確な判断を示し得ませんでした。この時、陛下は朕の重臣を暗殺することゝき行動は異勅の軍事行動だといふ明確な意思表示をされました。内乱状態を回避できたのは一に昭和天皇の御決断であつたと言へませう。

昭和十二年盧溝橋事件を発端とする日支事変が始まり、二十年八月十五日、日本の敗北を

以て大東亜戦争が終りました。終戦の年、陛下は四十五歳（数へ年）でいらつしやりました。御生涯の丁度中間点だったわけです。

終戦の直前の七月二十六日、ポツダム宣言が出されます。これは条件付の降伏勧告文書でしたが、その受諾の可否をめぐって、内閣は終に意思統一をすることができず、最終的な決断を陛下に仰ぎ、「聖断」によつて辛うじて戦争を終結することができました。御承知のやうに、陛下は非常に憲法を大切にされました。立憲君主制といふ制度を嚴格に守られたのです。輔弼の任にある内閣の決定に対しては異議を唱へないといふのが、陛下の政治のあり方だったのです。だから一部の人のいふやうに、戦前の天皇制は絶対専制君主だといふのは間違ひです。陛下が御自分で決定を下されたのは、二・二六事件の時と、八月十五日の御聖断の時と二回しかありません。この場合は既に行政機関が意志決定をする能力を失つてゐたからです。

敗戦後、約六年間、日本は史上始めての異国の軍事占領下におかれます。二十六年九月八日にサンフランシスコ条約が調印され、二十七年四月二十八日に発効します。こゝで一つ大切な事を申し上げますが、二十年八月十五日から二十七年四月二十八日まで、武力戦はな

いけれども、軍事行動は継続してゐたといふ事実です。日本国憲法（二十一年十一月三日公布、二十二年五月三日施行）の制定や東京裁判（二十一年五月三日——二十三年十一月十二日）といふやうな戦後政治の枠組を決定するやうな重大なことが、占領軍の軍事行動の延長として行はれてゐるといふ事實は、感情論を抜きにして直視すべきです。国家にとって最も重要な憲法制定といふことが、独立の状態にない時代に行はれたといふことに眼をつぶり、「内容が良ければ良いではないか」といふのは暴論でせう。

サンフランシスコ平和条約が調印されて、日本が独立回復した時、一番喜ばれたのは陛下ではなかつたでせうか。その日に次のやうな御製を詠んでをられます。

風さゆるみ冬は過ぎてまちにまちし八重桜咲く春となりけり

平和の回復を心から喜んでをられるお姿が、その弾むやうな調べから響いてまゐります。

そして、戦後の皆様方の一世代前の学生諸君にとっては忘れられない激動の時代が来るわけです。それは、昭和三十五年の第一次の日米新安保条約の調印をめぐる反対闘争です。学

生たちは「安保は戦争につながる」といふ革新勢力のスローガンの下に国会を包囲して、猛烈な武力闘争をやりました。樺美智子といふ東大の女子学生が一人死にました。四十年代に入ると全国で大学紛争の嵐が吹き荒れました。四十四年、東大の安田講堂にたて籠った学生たちと、それを包囲する機動隊の間に市街戦さながらの激しい攻防が行はれ、テレビはそのまま美しい映像を家庭の客間に送り届けました。私は今でも不思議に思ふのですが、あれだけの大闘争をやり、国有財産をめちやくちやにしながら、責任を取って死んだ学生が一人もゐなかつたといふことです。放水と催涙ガスで圧倒的に強かつた機動隊によつて、安田講堂が落城した時、一人か二人は責任を取つて自決するのではないかと思ひました。彼らは死なないことが保証されてゐて闘争をやつたのですから、所詮それは「革命ごっこ」に過ぎなかつたのです。天安門の戦車の前に立ち塞がった学生に比してはるかに男らしさがなかつたのです。

その翌年、四十五年の十一月二十五日、三島由紀夫さんが市ヶ谷の自衛隊で自決して亡くなられる。この三島さんの自決といふのは、戦後思想史の中の画期的な事件だと思ひます。三島さんの死といふのは、解明できぬ謎の部分もありますが、私はやはり一人の天才が、戦

後といふものは何か欺瞞の上に打ち立てられた虚構ではないか、フィクションではないかといふ疑問に対する、いのちを賭けた答へだったのではないかと思ひます。戦前は駄目だ、戦後こそわれわれの価値の源泉なのだといふことに対して、異議申し立てをされたのだ。だから、私は三島さんは戦後思想と刺しちがへて死んだと思ふのです。

三島さんは自決の二ヶ月前、雑誌「諸君」に「革命の哲学としての陽明学」といふ一文を書いてみました。その中で、飢餓にあへく窮民を見かねて、幕府に反逆した大塩平八郎の「身の死するを恨まず、心の死するを恨む」といふ言葉を引いてみました。肉体の死は怖くない、魂の死が怖いといふ意味でせう。そして、もし肉体の死を怖れて戦々兢兢として、魂の死んだ人で日本中が充満したら、日本人は滅びてしまふのではないかと述べてをられました。根性などといふ言葉がやたらに使はれますが、動物的エネルギーに過ぎない。三島事件によって、確かに一つの時代が終った。偽りの平和主義の時代が終った。それから二十年、日本人の全エネルギーが富といふことに集中されるやうになります。皆さんが生きられた時間はこの時代といふことになりませう。逆説的に聞えるかもしれませんが、金と物が溢れて心の飢餓感がないところに、現代学生諸君の不幸があるのではないでせうか。

## 戦後思想の総括

今、昭和といふ時代を送って、もう一度戦後といふ時代の制度と思想といふものを見直して見たいと思ひます。私は戦後思想の枠組みを作った三つのものは、ポツダム宣言と日本国憲法、それに東京裁判であると思ひます。こゝでごく簡単に通念と違ふことを申し上げます。まずポツダム宣言によって、日本は無条件降伏をしたといはれますが、それは違ひます。原文を読んで見ると、第五条に「われらの条件左の如し」とあり、以下十三条まで条件が並んであります。条件の最後に「日本国軍隊の無条件降伏」と書いてあります。少しややこしいのですが、条件付降伏の「条件」の中に、日本国軍隊の「無条件降伏」があるといふ構造です。このやうに明確に条件付降伏であつたものが、圧倒的に不利な力関係の中で、なしくずしに無条件降伏にされてしまつたわけで、今更国際政治の非情さを見せつけられる思ひです。

第二は日本国憲法の制定が、占領下に軍事行動の延長として行はれたといふ紛れもない事実です。江藤淳さんの「閉された言語空間」が明快に分析してゐるやうに、民間検閲支隊の行つた苛酷極まりない検閲基準の中で、最も重要なものは、東京裁判に関する批判、占領軍

が憲法を作ったこと、及び検閲の存在そのものへの言及の三つでした。ブッシュ政権ができて、新しい国防長官に予定されてゐたジョン・タワー氏(女性問題で予定されたポストを失つた)が、上院の公聴会で行つた証言は、憲法制定についての公然のタブーに対して、進歩派が眉をしかめるやうな発言だった。彼は「米国が日本を占領した当時、日本の軍勢力を厳格に抑へ込む憲法を押しつけたのは、グッドアイデアだった。しかし日本が同盟国になつたいま振り返れば、お粗末なアイデアだったといふことになる」と言つたのです。外ならぬアメリカ人が「押しつけ」と言つてゐるのです。それを躍起になつて打ち消してゐる日本人といふのは誠に象徴的です。成立過程に遡つて事実を洗ひ直すことが必要ではないでせうか。

第三は東京裁判です。裁判といふものは、その裁判が行はれる時に存在してゐた法律によつて行はれるべきものです。ところが連合国は、全く新たに極東国際軍事裁判所条例といふ、今まで国際法になつたものを作つて、しかも昭和三年まで遡つて裁いたのであります。これは法の不遡及といふ原則に背反した行為であることはいふまでもありません。パール判事が「儀式化された復讐」と言つたように、勝者が一方的に敗者を裁く政治裁判だったのであります。敗戦直後の勝者と敗者の力関係からいふと、それも已むを得なかつたでせうが、東京裁判の残し

た後遺症は、日本人自身が自らの行った戦争を、勝者側の検事や判事の眼で裁くといふ視点を身につけてしまったことです。これが「東京裁判史観」といはれる歴史の見方です。戦後、歴史は生きたものが、恣意や先入観によって死者を「裁く」対象になってしまったのです。誠に先人に申し訳ないことです。歴史を見る眼の根底に愛情がなければ、歴史は決してその真の姿を見せてくれないでせう。

以上のやうな状況が相互に影響し合ひながら、「戦後思想」といふものが形成されてゆきます。三島さんは、戦後とは虚偽の上に建てられたフィクションではないかと考へた。その中で作られた思想とはどういふものだったのでせうか。皆さんの人生は戦後そのものの中しかないのですから、戦後を否定されるのは、自分自身を否定されるやうな苦痛やとまどひを感じられるかも知れません。しかし、皆さんが真に自らの「生」を十全に生きるためには、まず真実を知る必要があります。

戦後思想が、思想としていびつであることの第一は先ほども述べましたやうに、歴史を蔑視する、歴史を裁くといふことです。死者は物を言ひませんから、自らが全能の神のやうな立場で祖先を裁くことができます。そして、過去の事実の中から暗黒面だけをあばき出して、

「日本の近代史は罪悪史である」といふやうな書き方をする。かういふ病的な自虐、呪縛から脱却すべき時ではないでせうか。

第二は国家の蔑視です。国は制度や組織であると同時に、個々人の有限の生命を越えて持続してゆく生命体でもあるのです。国家の本質は国家権力だといふのは事実でせう。制度化された権力構造は眼に見えるものであり、知的な分析の対象になり得ます。これを私はかつて「外なる国家」と名づけたことがあります。これに対して生命体としての国家といふものがあります。国といふものは、私たちの世代だけの物ではありません。祖先が作り、そのいのちの持続のために、多くの人が命を賭けたものである。それを受けついだわれわれが、やがて子孫に繋いでゆかねばならないものです。さういふ側面を、私はかつて「内なる国家」と名づけたことがあります。それは祖先の行為や言葉に感ずることによってしか受けとめることができなぬものです。国家への真の愛は、歴史を学ぶことによってしか生れて来ないのではないでせうか。

第三は人間観の問題です。人間は所詮は本能に従属した動物ではないかといふ考へ方があります。戦後の日本人は清らかなものとか、気高いものとかいふものへの痛切な憧憬をなく

したのではないか。逆に言ふと、濁つたものや汚いものに対する嫌悪感がなくなつてしまつたやうに思ひます。昔の形式道徳を鼓吹するやうな教育は論外ですが、偉人や英雄の行為を凡俗のところまで故意に引き下すやうな解釈が横行し過ぎてゐるのではないでせうか。人間が本能的に持つてゐる上昇志向に水をさすやうな言論とは戦はねばなりません。

最後に、もう一度天皇の問題を考へて見たいと思ひます。戦後、天皇制が残つたのは、連合国の政治的判断が働いたのは事実でせう。「天皇は数個師団に相当する力を持つてゐる」といふドライな認識があつたのは当然です。しかし、終戦の年の九月二十七日にマッカーサーを訪問された折の、陛下の捨身の言動が、彼の人格を根底から揺さぶつたといふ事実も、天皇制の存続に大きく働いたことは否定できません。今では多くの人を知るやうになりましたが、終戦時に昭和天皇が詠まれた四首の御製があります。

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかにもいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らるといばら道すすみゆくともいくさとめけり

外国と離れ小島にのこる民のうへやすかれとただいのるなり

これは、かつて侍従次長をなさつた木下道雄先生がお書きになつた『宮中見聞録』といふ本に収録されてゐますが、どのやうな御決意の中で終戦の「聖断」が下されたかを、これほどなまなましく伝へる資料はありません。文字通り、身を捨てて「民」を救はうといふお氣持があります。終戦直後、陛下は退位をされるか、それとも東京裁判の法定に引き出されるか、さういふ危機的状况にありました。そのとき「民」はどういふ行動をしてゐたか、伊藤たかといふ無名の御婦人は、毎日血判を押した信書をマツカーサー宛に送つてをられたのです。終戦の年の十二月七日の手紙の一部を抄録します。

私共にとつて、決して天皇は偶像としての神ではゐらっしゃいません。私共が天皇を仰慕する心は、もつともつと熱い、もつともつと広いゆたかなものだと思つてをります。昨日も申し上げましたとほり、それは日本人の血の中を脈うつて流れてゐるものでございます。／＼天皇をお守りするために、天皇の御安泰を保証される代りにならばほんたうに私共の生命を

よろこんで閣下のお国にさし上げます。

陛下は「身はいかならんとも」と詠み給ひ、無名の民は「私の生命をさし上げます」と言つてゐるのです。かういふ手紙が連日血判で何十通となく送られたことが、マツカーサーの心を動かさなかつた筈はないと思ひます。

戦後知識人の大部分の人は、残念ながら東京裁判史観の上に立つて天皇制はいずれはなくなるだらうし、なくした方が良くと考へてみました。それが流行思想でもありました。しかし、ごく少数の人たちですが、本物の学問をした人は、敢へて時代の風潮に逆らつてきちんとした発言をしてをられました。例へば小林秀雄さんは、終戦の翌年のある座談会の中で、「天皇の問題も単なる政治問題ではないでしょう。それは単なる政治的制度ではないからだ。日本国民という有機体の個性です。生きてゐる個性です。不合理だからやめるといふわけには参らぬ」と断乎として言ひ切つてをられます。当時の風潮の中で、これだけのことを極めて淡々と語られたのは驚異といふしかありません。その小林さんがいつか合宿に来られたとき、「今の学者たちは天皇制とは何ぞやとか、天皇の憲法上の規定は戦前はかうで、戦後は

かうだといふやうな難しい議論をしてゐるが、自分は全然さういふことに興味はない。天皇といふのは自分にとって借金や夫婦喧嘩と同じものです」といふ意味のことを言はれました。「借金や夫婦喧嘩と同じもの」といふのは、天皇といふものを貶しめる言葉ではありません。その反対です。庶民にとって天皇といふ方は、いつも身に泌みる「経験」としてあるといふことなのです。忘れがたい言葉として今も覚えてゐます。「天皇に始まり天皇に終つた」昭和の精神を噛みしめ、新帝陛下への更なる忠誠を誓ひたいと思ひます。

## 著者略歴

一、大正十年（一九二一）北九州市若松区に生れる

一、旧制若松中学、旧制佐賀高等学校を経て、九州帝国大学法文学部国文学科を卒業

一、県立若松高校教諭を経て、福岡教育大学教授、昭和五十九年退官、その後、中村学園大学・九州女子大学教授を歴任

一、著書「大正の文学」分担執筆（昭和四十四年、桜楓社）、共著「短歌のすすめ」「短歌のあゆみ」（昭和四十六年、国民文化研究会）著書「明治の精神——近代文学小論——」（昭和五十七年・国民文化研究会）、著書「夏目漱石の文学」（昭和五十九年・桜楓社）

## われらがマン・ツー・マン運動の戦後史

—全国学生青年「合宿教室」レポート（昭和37年から28年間）の「はしがき」から—

国 文 研 叢 書 No 36

平成八年三月二十八日 発行

頒価 九〇〇円

著者 山田輝彦  
やま だ てる ひこ

発行所 社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

〒104 東京都中央区銀座七-1-18  
(柳瀬ビル)

TEL(〇三)三五七二-一五二六(代)

FAX(〇三)三五七二-一五二七

振替 東京 七-六〇五〇七番

印刷所 (株)松井ピ・テ・オ・印刷

〒104 東京都平出町四二八七-七  
☎(〇二八)六六二-二五一一

(既刊) 国文研叢書 (新書判)

No. 1	夜	久	正	古	昭和41年	(改)	昭和48年	316頁
No. 2	森	木	尚	日本精神史のい	昭和41年			279頁
No. 3	高	村	一	弁証法批判の歴史	昭和42年			241頁
No. 4	小	田	二	日本思想の系譜	昭和42年			309頁
No. 5	小	田	三	文獻資料集・上巻(古代・中世)	昭和42年			317頁
No. 6	小	田	四	文獻資料集・中巻その1(近世I)	昭和43年			409頁
No. 7	小	田	五	文獻資料集・中巻その2(近世II)	昭和43年			403頁
No. 8	小	田	六	文獻資料集・下巻その1(近世I)	昭和44年			381頁
No. 9	小	田	七	文獻資料集・下巻その2(近世II)	昭和44年			283頁
No. 10	小	田	八	歴史と人生観	昭和45年			483頁
No. 11	夜	久	九	歴史名著訳訳(明治) 壺	昭和45年			310頁
No. 12	夜	久	一〇	花山院とその系譜	昭和46年			309頁
No. 13	夜	久	一一	短歌のすずめ	昭和46年			316頁
No. 14	夜	久	一二	短歌のすずめ(総短歌のすずめ)	昭和46年			338頁
No. 15	夜	久	一三	新作と鑑賞	昭和46年			324頁
No. 16	三	井	一四	白村江の戦い	昭和49年			293頁
No. 17	三	井	一五	白村江の戦い7世紀・東フジワの動乱	昭和49年			320頁
No. 18	三	井	一六	国史の地誌—聖徳太子と梅氏の精神	昭和49年			354頁
No. 19	三	井	一七	国史における	昭和51年			430頁
No. 20	三	井	一八	日本における	昭和51年			421頁
No. 21	三	井	一九	明治天皇御集研究(復刊)	昭和52年			172頁
No. 22	三	井	二〇	いのうち ささげて—戦中学徒・遺跡遺文抄	昭和53年			298頁
No. 23	三	井	二一	いのうち ささげて—戦中学徒・遺跡遺文抄	昭和54年			335頁
No. 24	三	井	二二	社会主義理論との戦い(山本國市博士論文選集)	昭和55年			270頁
No. 25	三	井	二三	"とつちやん"先生の国語教育	昭和56年			270頁
No. 26	三	井	二四	戦後教育の中で	昭和56年			320頁
No. 27	三	井	二五	明治の精神—近代文学小説	昭和57年			357頁
No. 28	三	井	二六	米英思想研究抄	昭和58年			350頁
No. 29	三	井	二七	「しきしまの魂」研究	昭和59年			279頁
No. 30	三	井	二八	学問・人生・祖国—小田村實二郎遺集	昭和60年			328頁
No. 31	三	井	二九	戦後世代からの発言	昭和61年			276頁
No. 32	三	井	三〇	戦後世代からの発言	昭和62年			326頁
No. 33	三	井	三一	重業集 その湧るいのうち	昭和62年			336頁
No. 34	三	井	三二	Bellet that & Bellet in	平成元年			338頁
No. 35	三	井	三三	和歌と日本人類の悲劇	平成3年			267頁
			三四	ノ連抑留と日本回帰	平成5年			
			三五	占領後連座の克服—祖国の真の独立のために—	平成6年			







